平成 23 年度　宇都宮大学教育学部　卒業論文

日本プロサッカー界の「プロフェッショナリズム」に関する社会学的考察

宇都宮大学教育学部　学校教育教員養成課程　教科教育コース
社会科教育専攻　4 年　社会学研究室
081116M

渡辺　和磨

日本プロサッカー界の「プロフェッショナリズム」に関する社会学的考察　目次

はじめに..... 2

序章　サッカー選手とプロフェッショナリズム..... 3

1　プロフェッショナルスポーツとしてのサッカー..... 3
2　日本のプロサッカー..... 4
3　サッカー選手とプロフェッショナリズム..... 7

第１章　本研究の方法と仮説..... 10

1　本研究のテーマ..... 10
2　研究の方法..... 11
3　本研究の仮説..... 11
4　雑誌『Sports Graphic Number』..... 15

第２章　Ⅰ期：J リーグ・スタートダッシュの成功と課題..... 20

1　プロリーグの誕生と課題..... 20
2　Ⅰ期におけるプロフェッショナリズムの検証..... 21
3　小括..... 29

第３章　Ⅱ期：街とクラブとフットボール..... 30

1　二つの事件と黄金世代..... 30
3　Ⅱ期におけるプロフェッショナリズムの検証..... 32
4　小括..... 40

第４章　Ⅲ期：日本サッカーは死んだのか..... 41

1　欧州系アジア諸国の登場..... 41
2　Ⅲ期におけるプロフェッショナリズムの検証..... 41
3　小括..... 50

第５章　Ⅳ期：新・黄金世代の挑戦..... 51

1　解決されない問題..... 51
2　Ⅳ期におけるプロフェッショナリズムの検証..... 52
3　プロフェッショナリズムの今後の変化について..... 58

第６章　総括..... 60

参考文献..... 62

分析資料一覧..... 64

おわりに..... 67

はじめに

日本にプロサッカーリーグ「J リーグ」が誕生して 20 年近く経つ。本論文ではそんな日本プロサッカー界におけるプロフェッショナリズムの変質に、社会学的な視点で着目する。

日本サッカーは、世界が驚くような速さで成長を遂げた。20 年前はアジアですら勝つことが出来なかった日本代表は今や FIFA ワールドカップ（W 杯）本大会の常連国である。J リーグクラブも FIFA クラブワールドカップで上位入賞を果たしている。

日本人選手が海外トップリーグのクラブに数多く名を連ねていることも大きな変化だ。これを書き終えた 2012 月 1 月現在でも、こうした「海外組」を挙げるときりがない。本田圭佑はロシアの CSKA モスクワをロシア勢初の UEFA チャンピオンズリーグ 8 強に導いた。長友佑都は DF の要としてイタリアのインテルで世界の一流選手と肩を並べる。香川真司の所属するドイツのドルトムントと、内田篤人の所属する同・シャルケは、同じルール地方に本拠地を置いており、ブンデスリーガで両者が対戦する「ルール・ダービー」は屈指の好カードとして知られる。同じドイツの名門バイエルン・ミュンヘンに宇佐美貴史が、イングランドの強豪アーセナルに宮市亮が、それぞれ 20 歳に満たない若さで入団した。この論文を執筆している時期は冬の欧州移籍市場が大きく動いており、李忠成がイングランドのサウザンプトンへ、ハーフナー・マイクがオランダのフィテッセへ、それぞれ戦いの場を移した。

2011 年 8 月 10 日、およそ 30 年ぶりに韓国から 3 点差を奪って圧勝した日韓戦に召集された選手 23 名のうち、実に 14 人が欧州クラブ所属者である「海外組」だった。実現はならなかったがピッチ上の全員が「海外組」になる可能性もあったのだ。

そして驚きなのは、最近日本人選手の多くが W 杯での優勝を目標として公言するようになったということだ。それはサッカーをする人なら誰でも夢見る栄光であり、一方で本当に限られた人間しか体験することのできない高みである。欧州・南米以外でそれを成し遂げた国はいない（女子サッカーでは、日本代表がアジア勢初の W 杯優勝を果たしている）。

キリンチャレンジカップ 2011　韓国代表戦
日本代表召集選手一覧

No	選手名	所属（当時）
1	川島永嗣	**リールセ**
2	伊野波雅彦	**H・スプリト**
3	駒野友一	磐田
4	栗原勇蔵	横浜 FM
6	内田篤人	**シャルケ**
7	遠藤保仁	G 大阪
8	松井大輔	**ディジョン**
9	岡崎慎司	**シュトゥットガルト**
10	香川真司	**ドルトムント**
11	清武弘嗣	C 大阪
12	西川周作	広島
13	細貝萌	**アウクスブルク**
14	家長昭博	**マジョルカ**
15	今野泰幸	F 東京
16	槙野智章	**ケルン**
17	©長谷部誠	**ヴォルフスブルク**
18	本田圭佑	**CSKA モスクワ**
19	李忠成	広島
20	吉田麻也	**VVV**
21	柏木陽介	浦和
22	阿部勇樹	**レスター・C**
23	東口順吾	新潟
24	森本貴幸	**ノヴァーラ**
監督　アルベルト・ザッケローニ		

※ゴシック体が海外クラブ

㈶日本サッカー協会公式 HP を基に作成

思えば 2010 南アフリカ W 杯での日本代表は「グループリーグ敗退、良くて 1 勝」が当然と思われていた。岡田武史監督（当時）率いる日本代表が目標としていた「ベスト 4」は日本国民に失笑と共に迎えられた。しかし、日本は自国開催以外の W 杯で初のベスト 16 進出を果たし、世界を驚かせた。

20 年以上前、日本にはプロリーグも存在せず、W 杯出場経験もなかった。それどころか日本はアジアで全く勝てなかった。そこから 20 年という短い間に、日本サッカーは世界で堂々と戦えるほどに成長し、選手の意識も W 杯優勝を目指すに至るまでになった。そこで私は、「こうしたサッカーの急成長と、プロとしての意識の変質との間には関係があるはずだ」と考えた。J リーグが登場した 1993 年から「W 杯優勝」が選手の目標として当然のものとなった現在まで、サッカー選手のプロフェッショナリズムがどういった変化を遂げ、何が背景としてあったのか。J リーグ誕生と共に始まり、今なお続く私のサッカー人生の「集大成」であるという思いでこの問いに取り組むのである。

序章　サッカー選手とプロフェッショナリズム

1　プロフェッショナルスポーツとしてのサッカー

1-1　サッカーとは

日本で「サッカー」と呼ばれる競技のルーツは、19 世紀にイングランドのパブリック・スクールで教育活動の一環として行われていた「フットボール」というスポーツである（山本浩，1998）。ただ、そのルールはスクール間でまちまちであった。19 世紀後半に入ると、鉄道など交通機関の発達もあり、フットボールはスクールの卒業生たちによってイングランド各地へ広まり、多くの「フットボール・クラブ（FC）」が誕生した。クラブは多様なコミュニティを単位として発生したが（パブリック・スクールの OB、職業学校の卒業生、水晶宮の従業員、陸軍省、公園でよく遊んでいた人々など）、次第に各地で対外試合が組まれるようになると、フットボールのルール統一が緊急の課題になった。こうした状況を受け、1863 年にフットボール・アソシエーション（フットボール協会、FA）が設立。FA の統一ルールによる「アソシエーション・フットボール」、すなわちサッカーが誕生した（英語表記 association football から soc をとり、接尾語-er を付したのがサッカー＝soccer という言葉の成り立ちだが、英国では soccer ではなく football と呼ぶのが一般的である）。一方、フットボールは 1871 年に設立されたラグビー・フットボール・ユニオン（RFU）によって「ラグビー・ユニオン・フットボール」という新しいスポーツへも生まれ変わることになる。これが今日の世界的スポーツ「ラグビー」の始まりである。

1-2　サッカーの「プロ化」と浸透

サッカーの対外試合が盛んになり、また 1872 年に FA チャレンジ・カップ（現・FA カップ。世界で最も古い歴史を持つ大会。FA に登録する全クラブに出場権がある）が始まると、クラブではレベルアップへの動きを強めていく。工場を母体とする労働者のサッカーが盛んであったイングランド北部・ランカシャ地方では、サッカーのために仕事を休んで差し引かれた賃金をクラブ側が補完するという習慣が始まったのである。ダニング（Dunning，E．1979）はこれをサッカーにおける「プロフェッショナル（Professional）」の誕生であるとしている。

プロフェッショナルという言葉の本来の意味は「職業上の」であり、「プロ」と略して呼ばれることが多い。スポーツをすることを職業とし、スポーツをすることにより報酬を得ているプロ選手やその指導者などで構成されたスポーツ・スポーツ組織のことをプロフェッショナルスポーツ（プロスポーツ）と言う。反対に、金銭の受け取りのない純粋な余暇としてのスポーツがアマチュアスポーツである。

アマチュア精神を大事にしていた FA では、南部のクラブを中心としてプロ化の流れを否定する姿勢を見せたが、賃金支払いが日常的に行われていた北部との激しい対立は FA の組織分裂の危険性を孕んだ。結局、分裂回避を最優先に考えた FA は、遂にプロ化容認へと軌道を修正し、1885 年 7 月にはプロ化を認める新しい規則を制定した。

FA チャレンジ・カップは、第 1 回から 11 シーズンにわたって主にパブリック・スクールの OB によって構成されたチームが完全な優位を維持していた。その後、上述のような傾向もあり労働者のチームが好成績を上げるようになると、労働法の改正など労働環境の改善によって余暇をもつようになった労働者を中心に「見るスポーツ」としてのサッカーに関心が集まり、観客数は膨れあがった。それまで 5,000 人を超えなかった入場者数は、1884 年には 12，500 人、1893 年には 45，000 人、1894 年から 10 年間の決勝戦での平均観客数は 80，000 人に達した（Dunning，1979）。

観客数の増大に勇気づけられて、1890 年代から入場料を課すクラブも現れ始めた。入場料の導入はプレーヤーへの金銭支払いを促し、サッカーのプロ化をますます推し進め、同時にクラブのレベルアップ

を加速させていった。北部バーミンガムに本拠地を置くアストン・ヴィラは、1896 年に FA のクラブとして初めて入場料をとり始めたクラブであるが、以降の 5 シーズンでフットボールリーグ優勝 4 回を果たし、うち 1 回は FA カップとの 2 冠を達成している。

2012 年 1 月現在、サッカー競技における「プロフェッショナル」の定義は、国際サッカー連盟（FIFA）の「Regulations on the Status and Transfer of Players」において「クラブと契約を結び、日常の出費を上回る給料をサッカー活動により支払われている者」とされている。このため、クラブと契約を結んでいない者はもちろんのこと、契約を結んでいても給料がごく少額に留まる者や、名目上サッカー活動以外の対価として給料を得ている者（いわゆる社員選手など）はプロ選手として扱われない。その意味で、副業の有無に関係なく賃金を受け取る人を単にプロと呼んでいた 19 世紀のイングランドとは異なる。

2　日本のプロサッカー

2-1　前史

日本におけるプロリーグは、1888 年に創設されたイングランド「フットボールリーグ」（その後 1992 年に分離・新設されたのが「プレミアリーグ」）、1929 年に創設されたイタリアの「レガ・カルチョ」などの欧州各国リーグと比較すると、創設が 1993 年 5 月 15 日とかなり浅いことがわかる。

日本においては、1960 年代まで大学サッカーが主流であり、サッカーで賃金を受け取る選手はいなかった。こうした形態を大きく変えたのが、1965 年に開幕した実業団クラブによる全国リーグ「日本サッカーリーグ（JSL）」である。1964 東京オリンピック（五輪）で日本代表をベスト 8 に導いたドイツ人監督デットマール・クラマーの「トーナメント戦（天皇杯）だけではなく、リーグ戦による全国大会が必要」との提言を受け創設された。

JSL はとにかく人気が出なかった。クラマー退任後の 1968 メキシコシティ五輪で銅メダルを獲得し、この頃の日本サッカーに希望の光が見えた。しかし企業宣伝が重視された危機感のないサッカーで JSL が人々の熱狂を生むこともなく、代表も以降 1996 アトランタ五輪まで、実に 30 年近くの間世界の舞台に立つ以前にアジアで全く勝てない時期が続いてしまう。いわゆる日本サッカー「冬の時代」である。

そうした中、1970 年代に入ると、選手に対して練習時間を就業中もしくは残業として認め給与を支払ったり、その他様々な名目（例えば勝利する事で会社の知名度を上げたとして賞与を与える実質的な勝利給など）でお金を渡したりするクラブが現れ始めた。日本サッカーリーグ事務局や日本サッカー協会は 1985 年から「スペシャル・ライセンス・プレーヤー制度」という実質的なプロ契約制度を導入し、こうした状況を追認した。当初スペシャル・ライセンス・プレーヤーとして西ドイツ（当時）のケルンから日本に帰国したばかりだった奥寺康彦（古河電気工業）と木村和司（日産自動車）の 2 人が登録した。

韓国では 1983 年にプロリーグが開幕していた。1986 メキシコワールドカップ（W 杯）アジア予選でその韓国に日本が完敗を喫したことで、それ以降日本ではプロ化への流れが具体化していく（後藤健生, 2007）。それに従い、選手が次々にプロとして登録されるようになった。

1990 年、プロリーグ発足にあたり 20 のクラブが参入を希望。そのうち 10 クラブの参加が認められ、1993 年の J リーグ初年度に「オリジナル 10」として華々しく登場した［**表 1**］。この時点でほぼ全ての選手がプロとして登録された。1990 年という年は景気後退の直前の時期であり、仮にこれ以上計画が遅れれば、企業のオーナーが新たな事業に特別な資金を投入しようなど考えなかっただろう（Moffett, S. 2002）。その意味で J リーグは幸運だった。

2-2　概要

J リーグの開幕により、日本に「ホームタウン」「アウェーゲーム」「スポーツクラブ」「サポーター」「ゴールパフォーマンス」など新鮮な概念が次々持ち込まれ、大ブームを起こした。企業宣伝としてのスポーツと一線を画すため、J リーグはクラブチーム名に企業名を入れることを禁じており、ホームタウンを定めチーム名に明示する必要があった（初年度に限り読売クラブは「読売ヴェルディ」とし、次年度以降「ヴェルディ川崎」となった）。そのため［**表 1**］のような「地域名」と「愛称」を組み合わせた表記により地域のためのクラブであることを明確にしている。クラブ数が増えた現在では、より身近に

感じてもらおうと「FC 東京」「愛媛 FC」といった覚えやすい名称を採用するクラブも多い。

2012 シーズンの J リーグには、ディビジョン 1（1 部リーグ、通称 J1）18 クラブ、ディビジョン 2（2 部リーグ、通称 J2）22 クラブの計 40 クラブが加盟している。J リーグクラブは所属する各ディビジョンにおいて 2 回戦総当たりの 1 ステージを戦う。この制度は 2005 シーズンからのものであり、1993～1995 年、1997～2004 年のシーズンにおいては、J1 はシーズンを 2 つのステージに分けて総当たりのリーグ戦を行っていた（93～95 年は各 2 回戦総当たり、97～04 年は各 1 回戦総当たり）。その年の年間王者は、各ステージの優勝チームが出場する J リーグチャンピオンシップで決定していた。1996 年のみ試験的に 1 ステージ制が導入された。J2 は創設された 1999 シーズンから 1 ステージ制を採用している。

リーグの最終成績により、J1 下位クラブと J2 上位クラブが自動で入れ替わる。2011 シーズンは、J1 の下位 3 クラブ（ヴァンフォーレ甲府、モンテディオ山形、アビスパ福岡）が J2 自動降格、J2 の上位 3 クラブ（FC 東京、コンサドーレ札幌、サガン鳥栖）が J1 自動昇格となった。2004 年～2008 年のシーズンでは入れ替え戦も実施されており、降格を免れたり昇格できなかったりした。

J リーグの下部には実質 3 部にあたるアマチュアチームの全国リーグ「日本フットボールリーグ」（JFL）が存在する。JFL のクラブは、プロクラブであるための規定の条件を満たすことで J リーグ加盟＝J2 への昇格ができる。2011 年に松本山雅 FC と町田ゼルビアが J リーグに加盟し、2012 シーズンからに J2 参戦する。また、松本と町田の加盟により J リーグの定数枠が埋まり、2012 シーズンからはそれまで行われなかった J2 と JFL の入れ替え戦が実施される予定である。

クラブ名 ホームタウン	前身	JSL 最終年度成績
鹿島アントラーズ 茨城県鹿島町	住金工業	2 部 2 位
ジェフユナイテッド市原 千葉県市原市	古河電工	1 部 7 位
浦和レッズ 埼玉県浦和市	三菱自動車	1 部 11 位
読売ヴェルディ 神奈川県川崎市	読売クラブ	1 部優勝
横浜マリノス 神奈川県横浜市	日産自動車	1 部 2 位
横浜フリューゲルス 神奈川県横浜市	全日空横浜	1 部 8 位
清水エスパルス 静岡県清水市	清水 FC	不参加
名古屋グランパスエイト 愛知県名古屋市	トヨタ自動車	1 部 12 位
ガンバ大阪 大阪府吹田市	松下電器	1 部 5 位
サンフレッチェ広島 広島県広島市	マツダ	1 部 6 位

表 1　J リーグ“オリジナル 10”

クラブ名、ホームタウンは開幕当時のもの

J リーグクラブは、アマチュアクラブも参加するオープントーナメント「天皇杯全日本サッカー選手権大会」（天皇杯）にも参加する。天皇杯優勝クラブと J1 優勝クラブが出場するスーパーカップ「FUJI XEROX SUPER CUP」（ゼロックス杯）は、新シーズンを占う一戦として注目される。

また、J1 クラブは「J リーグカップ」、一般には冠スポンサーの名をとり「ヤマザキナビスコカップ」（ナビスコ杯）と呼ばれるカップ戦をリーグと同時進行で行う。ナビスコ杯はかつて J2 クラブも参加していた。J リーグ、J リーグ杯、天皇杯という三大大会（ここにゼロックス杯を加えて四大大会とする場合もある）の構図はイングランドにおける大会の構図をモデルとしているが［表 2］、J リーグの理念などはドイツのブンデスリーガがモデルである（佐野毅彦，2006）。

近年、三大大会の優勝クラブに対して国際大会出場という特典が与えられている［表 3］。J1 上位 3 クラブと天皇杯優勝クラブの 4 クラブには、クラブのアジア王者を決定する大会「AFC チャンピオンズリーグ」（ACL）への出場権が与えられる。2005 年大会より、ACL 優勝クラブは FIFA クラブワールドカップ（クラブ W 杯）へアジア枠として出場することができる。2007 年に浦和レッズ、2008 年にガンバ大阪が ACL を制覇してクラブ W 杯へ出場し、それぞれ 3 位に輝いた。クラブ W 杯にはナショナルチームの W 杯と同様に開催国枠があり、この枠で 2011 年大会に出場した柏レイソルが 4 位に入った。ナビスコ杯優勝クラブは、2007 年以降「スルガ銀行チャンピオンシップ」への出場権が与えられ、南米のクラブ国際大会「コパ・スダメリカーナ」王者と対戦する。

2-3　サッカー日本代表

サッカー日本代表は、日本サッカー協会（JFA）による日本のサッカー国家代表チームである。一般に

日本（2012）

プロリーグ
Jリーグ（1-2）
リーグカップ
Jリーグヤマザキナビスコカップ
オープンカップ
天皇杯
スーパーカップ
FUJI XEROX SUPER CUP

イングランド（2012）

プロリーグ
Premier League Football League（CS-1-2）
リーグカップ
Carling Cup
オープンカップ
The FA Cup
スーパーカップ
Community Shield

表 2　日英大会構図比較

Jリーグ

Division 1		
優勝	名古屋	ACL2011 出場権
2 位	G 大阪	
3 位	C 大阪	
4 位	鹿島	
……		
15 位	浦和	
16 位	F 東京	J2 自動降格
17 位	京都	
18 位	湘南	

Division 2		
優勝	柏	J1 自動昇格
2 位	甲府	
3 位	福岡	
4 位	千葉	
……		
19 位	北九州	

Jリーグヤマザキナビスコカップ

優勝	磐田	スルガ銀行 CS2011 出場権
2 位	広島	

天皇杯

優勝	鹿島	ACL2011 出場権
2 位	清水	香港アジア SCC2012 出場 （公式特典ではない）

国際大会

AFC チャンピオンズリーグ 2011

名古屋	ベスト 16
G 大阪	ベスト 16
C 大阪	ベスト 8
鹿島	ベスト 16

2011 FIFA クラブワールドカップ

柏	開催国枠／Jリーグ 2011 優勝
4 位：3 位決定戦 0-0（PK3-5）アル・サッド（QAT）	

スルガ銀行チャンピオンシップ 2011

磐田 2-2（PK4-2）インディペンディエンテ（ARG）

表 3　2010 シーズン国内三大大会結果と 2011 シーズンの国際大会における日本勢の成績

各大会公式 HP を基に作成

「監督名＋ジャパン」という愛称で親しまれ、アルベルト・ザッケローニ監督が率いる現在の日本代表の愛称は「ザック（ZAC）ジャパン」。「SAMURAI BLUE」という愛称もある。ナショナルチームの番付である「FIFA ランキング」2011 年最終発表で、日本はアジア最高位の 19 位である。

1954 スイス W 杯でアジア予選初参加。そこから実に 44 年の歳月を経て、1998 フランス W 杯で本大会初出場を果たした。J リーグブームの最中の 1994 アメリカ W 杯アジア最終予選・イラク戦、日本の初出場が確定するまで数十秒を残すだけの状況から一転して予選敗退が決まった「ドーハの悲劇」はサッカーファンの記憶に強く刻まれた。しかし、フランス W 杯以降は現在まで 4 大会連続出場を果たすなど、アジアの盟主としての地位を築いている。幾度となく日本代表の W 杯初出場の夢を阻んできた韓国代表との試合は「日韓戦」と呼ばれ、国家のプライドをも懸けた一戦として注目される。直近では 2011 年 8 月 10 日に札幌ドームで開かれ（キリンチャレンジカップ 2011）、3-0 で日本が勝利した。

FIFA 主催の国際大会では、W 杯においては 2002 日韓大会・2010 南アフリカ大会のベスト 16、FIFA コンフェデレーションズカップ（コンフェデ杯）では 2001 日韓大会での準優勝が最高成績である。アジアのナショナルチーム No. 1 を決める戦い「AFC アジアカップ」（アジア杯）では、1992 広島大会で初優勝を果たして以降、2000 レバノン大会、2004 中国大会、2011 カタール大会において優勝を果たし、最多優勝回数を誇っている。先述のコンフェデ杯は各大陸の選手権優勝チームが出場する大会であり、コンフェデ杯のアジア枠をこの大会で決定している。カタールアジア杯で優勝した日本は、コンフェデ杯・2013 ブラジル大会へ出場する。

W 杯には U-17（17 歳以下）、U-20（20 歳以下）という世代別の大会もある。日本代表の最高成績は、U-17W 杯では 2011 メキシコ大会のベスト 8、U-20W 杯では 1999 ナイジェリア大会の準優勝である（当時は U-20W 杯ではなく「ワールドユース」と呼ばれていた）。

五輪におけるサッカー競技での最高成績は 1968 メキシコシティ五輪の 3 位だが、U-23（23 歳以下。なお 24 歳以上の選手を「オーバーエイジ枠」として 3 名まで登録可能）という年齢制限が設けられた 1996 アトランタ五輪以降では 2000 シドニー五輪のベスト 8 が最高成績である。

3　サッカー選手とプロフェッショナリズム

3-1　プロフェッショナリズムとは

現在、プロサッカーリーグは、ヨーロッパに限らず世界中の国と地域に存在し、多くのプロサッカー選手が存在している。サッカー選手に限らず、モデル、料理人などその道の「プロ」の職業観、姿勢、価値観などは、時にプロ意識や職人気質などと言われる。日本で「プロ意識」という言葉が使い始められたのはさほど古くはないが、「プロ」が自分の技能や技術で身を立てる者が当然に求められる結果を出すために日々の研鑽や努力を惜しまない姿勢は「プロ意識が高い」とマスコミなどによって讃美される傾向がある。例として、現在のサッカー日本代表主将である長谷部誠の著書『心を整える。――勝利をたぐり寄せるための 56 の習慣』(2011) では、無名の選手だった彼が日本代表の主将になるまで大事にしてきた生活習慣を綴っており、サッカー選手という職業に対する誇り、日々の研鑽や努力を惜しまない姿勢は、読者やメディアから「プロ意識が高い」と絶賛され、本もミリオンセラーとなった。

一方で、こうした専門職種に従事する者は、不祥事や醜聞などで「プロ意識が足りない」「プロ失格」などと罵倒されることも間々ある。本研究では、これら「プロ意識」や「職人気質」を「プロフェッショナリズム（professionalism)」と呼ぶことにする。

3-2　プロフェッショナリズムに関する先行研究の整理

松尾睦（2006）は、プロフェッショナリズムという概念について、「プロフェッション（profession）＝職業」のメンバーである「プロフェッショナル（professional)」が抱く理想像、すなわち「プロフェッショナルは『どうあるべきか』」を表現したものであるとしている。彼は代表的な 2 つの研究によって示されたプロフェッショナリズムの次元［表 4］を検討し、プロフェッショナルの特徴について以下の 6 つの次元があると説明した。

1. **専門的なサービスを顧客に提供するために知識・スキルを獲得している**
2. **同業者集団に準拠している**
3. **職務を遂行する上で自身の判断に基づいて自律的な行動をとることができる**
4. **同僚や顧客から専門家として認められている**
5. **顧客の目標達成を助け、公共の利益に奉仕することを重視している**
6. **職業に対する愛着を持って、たとえ外的報酬がなくてもその分野で働きたいという献身的な姿勢を持っている**

これらの次元を整理し、プロフェッショナリズムは「技術的側面（知識の獲得)」、「管理的側面（自律性、自己統制、同業者への準拠)」、「精神的側面（他者の援助、公共利益への奉仕、職務へのコミットメント)」の 3 つの側面から捉えることができるとした。各側面は相互に関係しているが、松尾は技術的側面がプロフェッショナリズムの基盤となると考えている。もちろん、技術的側面のみを満たすことは、

Miner, J. B. (1993), Miner et al. (1994)	Hall, R. H. (1968)
知識の獲得	同業者への準拠
顧客にサービスを提供するための知識を獲得する	プロのコミュニティに関与している程度
自立した行動	自律性
自身の判断に基づいて自律的に行動する	仕事において自由に意思決定をしたいという欲求
地位の確立	自己統制の信念
同僚や顧客の間で地位を確立し維持する	仕事の質は同僚によって評価されるべきであるという信念
他者の援助	公共サービスの信念
他者を助け奉仕したいという欲求	公共の利益に奉仕したいというコミットメント
プロフェッショナルとしてのコミットメント	職務へ献身したいという感覚
職業に対する愛着とアイデンティティを感じる	外敵報酬がなくてもその分野で働きたいという献身的姿勢

表 4　プロフェッショナリズムの次元

出典：松尾睦（2006）

プロフェッショナルの必要条件を満たしているにすぎず、これらをベースにした自律的な行動力、他者を援助するという高い精神性などがプロフェッショナルに要求されるのである。

3-3　本論文におけるプロフェッショナリズムの定義

ここで、松尾のプロフェッショナリズムの定義について問題点を指摘し、本研究において用いるプロフェッショナリズムを定義することにする。第一に、松尾の定義には類似した表現が認められる。④に関しては、職業集団への準拠が集団において何らかの位置を確保させるという意味で②と同義であると考えられる。そのため、同僚から認められるという表現は②に加えることができる。同じ④顧客から専門家として認められることに関しても、⑤目標達成を助けることとほぼ同義である。顧客の目標達成は専門家としての地位を確立させるからだ。従って、松尾の定義における④は不要となる。

第二に、⑤顧客の目標達成と公共の利益への奉仕は相反しうるものとして捉えるべきである。顧客の目標が達成されても公共の利益に結びつかない場合はあらゆる場面で想定される。プロスポーツにおいても、一強時代が長く続く場合、確かにそのクラブを応援するファンやサポーター＝顧客の目標は達成されるだろうが、そのスポーツ全体の盛り上がりには結びつかない。顧客の目標達成への意識と公共利益への奉仕に関する意識は明確に区別した方が良い。

第三に、プロフェッショナルとしての大前提である「対価の受け取り」に関する説明がなされておらず、⑥の定義によってアマチュアリズムとの境界線が大きく揺らいでいる。確かに純粋に職務を楽しむ姿勢は大事であるが、職業とする以上、職務内容に相応した対価を受け取っている（と認識している）ことがプロフェッショナルには重要である（伊東良二，2010）。とはいえ、外的報酬の問題を除外して職務を楽しむことは、職務の魅力を顧客に伝え、目標達成を助けたり公共の福祉に奉仕したりする上で重要な要素であり、次代の子どもたちに夢を与えるという意味でもプロフェッショナルには求められる。

以上の検討を踏まえ、プロフェッショナルは以下の 6 次元から説明することができる。

(1) 専門的なサービスを顧客に提供するための知識・スキルを獲得している
(2) 同業者集団に準拠し、同僚の間で地位を確立し維持しあっている
(3) 職務の遂行や報酬に関して、自律的な考えをもっている
(4) 顧客の目標達成を助ける
(5) 公共の利益に奉仕することを重視している
(6) 職業に対する愛着を持って、たとえ外的報酬がなくてもその分野で働きたいという献身的な姿勢を持っている

3-4　サッカー選手とプロフェッショナリズム

それでは、本研究におけるプロフェッショナルの 6 つの次元は、日本プロサッカーの「プロフェッショナリズム」を考える上でも有効だろうか。順を追って検討することにする。

①専門的なサービスを顧客に提供することとは、サッカー選手においては「見る」スポーツを提供するためのサッカーの技術であり、高い知識・スキルは無論必須である。また、ここではプロフェッショナルとして知識・スキルへの自己分析力も重要になる。

サッカーが団体競技であるという点で②の同業者とのコミットメントは重要である。プロサッカークラブにおける信頼関係の方向は、選手、フロント、コーチ陣などクラブ全体に及ばなければならない。

③については、ここでは「キャリア設計における自律性」とすべきだろう。サッカー選手における自己利益の追求とは、レベルの高い国外リーグに挑戦したい、代表に招集されたい、などの思いから、年俸に対し相対的な自己分析（昨年度の実績やクラブ内の他者との比較などを通して、実績に見合った報酬を受け取っているか）を行ったり、自律的に新たなキャリアの形成に踏み切ったりすることである。

④顧客の目標達成とは「見るスポーツ」の提供である。この次元では、試合観戦にスタジアムへ訪れるサポーターを満足させたい、良い関係を築きたいという意識を表している。

日本のプロサッカーにとっての⑤公共の利益への奉仕は「地域のスポーツ文化の創造・振興」である。J リーグはプロ野球発足から約 60 年を経過して出来た第 2 のプロリーグであるが、J リーグクラブに求められたものは「地域のスポーツ文化の創造」であった（佐野毅彦，2006）。日本ではなじみの薄かった「ホームタウン」という概念を初めて持ち込んだのも J リーグだった。サッカーに限らずスポーツ全体

への貢献が J リーグの理念として明確に示され、「見るスポーツ」だけでなく、「するスポーツ」「知るスポーツ」を地域に提供することがクラブに求められている。これはドイツに多く見られる総合スポーツクラブ（シュポルトクルップ）をモデルとしている。

⑥のような「愛着」や「献身的な姿勢」は、プロサッカー選手としての幸せ、大勢の観客の前でサッカーをする楽しさ、日本サッカーを牽引する責任への充実感などである。この「愛着」「献身的な姿勢」を示した選手の例を挙げる。2011 年 8 月、心臓発作で亡くなった元日本代表・松田直樹である。彼は 1995 年から 2010 年まで、横浜 F・マリノス（入団当初は横浜マリノス）一筋でプレーし、W 杯にも出場した選手であるが、2010 シーズン終盤、クラブから戦力外通告を受けた。

松田には J2 クラブや韓国・アメリカのクラブ、さらには破格の年俸掲示が特徴的なカタールのクラブから打診があった。しかし自身初体験の移籍市場において J1 クラブからオファーが来ず、松田のプライドに相当のダメージを与えたはずである。その彼が 2011 シーズンの所属先として選んだのは、当時 JFL に所属していた松本山雅 FC だった。元日本代表の社会人リーグ挑戦は、メディアで大きな驚きをもって伝えられた。日本代表 40 試合出場という華々しい過去を持つ松田が、JFL という場に立つ自分を想像することは容易ではなかったはずだ。松田は生前のテレビ出演（TBS『バース・デイ』，2011）で、プロのクラブではなく松本山雅を選んだ理由をこう述べている。

> **松田直樹「マリノス（の選手生活が）終わって、いろいろ含めたうえで俺が伝えたかったのは、本当にサッカー純粋にできるかじゃん。カタールはまぁ、金だけじゃん。でもその、山雅っていうチームは、社長・副社長・GM が（自分のために出迎えに）来るって有り得ないじゃん。自分の経験とか、全部伝えようと思ってやろうとしているから」**

松田はプロかそうでないかではなく、「純粋にサッカーをプレーすること」を伝える自分を大事にしたのである。そして、真っ先にオファーを出し、クラブ視察にクラブの社長・副社長・GM が帯同するなど最大限の誠意をもって出迎えた松本山雅というクラブ、熱狂的な山雅サポーターの存在に魅せられ、松本山雅への入団を決断したのである。

反対に、元日本代表・中田英寿は、サッカーに対する愛情が薄れていったことを自覚して 2006 年に 29 歳という若さで引退を決意したという（鎌田道彦，2006）。中田は、期待や注目、責任などを負わされ、時には称賛を浴び、時には批判に苛まれるプロサッカーの尊さに大きな感動を覚えながら、子供の頃に持っていた瑞々しい感情を失っていく。それを守るために「厚い壁を築くようにしていた」が実らず、さらに自分の思いを当時の日本代表と共有できなかった。サッカーへの純粋な思いを守るために貫いた中田英寿像と、本来持っていた自己像との相違に対して整合性を見いだせなくなっていたのだろう。

ここまでの検討を通して、日本サッカー界のプロフェッショナリズムを、以下のようにまとめた。

① 見るスポーツを提供するに値する知識や技術を持ち、分析ができる
② クラブに所属しており、互いにプロとしての信頼関係を結んでいる
③ キャリア設計において自律的な考えを持っている
④ クラブを応援するサポーターの喜びの為に試合に臨む
⑤ 地域のスポーツ文化の振興に貢献することを重視している
⑥ 何より純粋にサッカーをプレーすることを愛し、サッカーを通してサッカーを含むスポーツの素晴らしさを伝えようとする姿勢を持っている

この①から⑥までの 6 つの次元を基にして本研究を進めることにする。次章では、その研究の方法と研究に用いる仮説、および本研究に扱う資料の概要とその特徴を示す。

第１章　本研究の方法と仮説

１　本研究のテーマ

日本がまだ世界への扉、すなわちＷ杯出場すら叶わなかった 1993 年にＪリーグが発足して 20 年近く経つが、日本サッカーは大きく進歩した。日本代表は 1998 フランスＷ杯で本大会初出場を果たして以来、4 大会連続で出場を決めている。うち 2002 日韓Ｗ杯・2010 南アフリカＷ杯ではベスト 16 入りを果たしている。Ｊリーグのクラブも、2007 年には浦和レッズが、2008 年にはガンバ大阪が、それぞれクラブＷ杯において 3 位入賞の成績を収めている。Ｊリーグ創設期にはＷ杯出場が目的だった。今ではＷ杯制覇を口にする選手が多く現れ、ファンもそれに期待し始めている。

短期間で日本サッカーがここまで発展したのには、あらゆる側面における日本プロサッカー界の変化を要因として指摘することができると考えている。こうしたＪリーグ開幕以降における日本プロサッカー界の変質は、プロフェッショナリズムの変化にも影響を与えており、歴史的な変遷を明らかにする中でその関係性を社会学的な理論で説明することは可能か。これが本研究の主題である。

1-2　時代区分

研究にあたり、日本サッカーの成長に合わせてプロフェッショナリズムの変化が理解しやすいように、「Ｗ杯における目標」を基準にして 4 つの時代区分を設けることにした。Ｗ杯は常にサッカーの指標（トレンド）を示すものとして重視されてきた。記憶に新しい南アフリカＷ杯では、スペイン代表が華麗なパスサッカーを展開。得点力不足をボール支配でカバーし、個人技で圧倒的な攻撃力を誇っていたオランダ代表を決勝で下し優勝した。これによりパス戦術の強化が新興地域などでも追求されるきっかけとなった。また守備的なシステムが中堅チームを中心に重視されたことで大番狂わせが多くなり、世界最高の舞台でのサッカーの在り方について議論を呼んだ。

こうした視点を基に設けた時代区分により、以下の 4 期の比較から歴史的変遷を明らかにする。

Ⅰ期　1993 年～1998 年：Ｊリーグ開幕からフランスＷ杯まで
Ⅱ期　1998 年～2006 年：フランスＷ杯後からドイツＷ杯まで
Ⅲ期　2006 年～2010 年：ドイツＷ杯後から南アフリカＷ杯まで
Ⅳ期　2010 年～現在　　：南アフリカＷ杯以降

Ⅰ期は、日本プロサッカーリーグ開幕から、Ｗ杯出場が目標だった 1997 年、そして初出場を果たした 1998 フランスＷ杯までである。

Ⅱ期は、決勝トーナメント出場が絶対目標であった 2002 日韓Ｗ杯と 2006 ドイツＷ杯を中心とした時期である。2002 年は自国開催であり、当時Ｗ杯では「開催国は必ず決勝トーナメントに進出する」というジンクスが第 1 回大会から守られていた。前回大会で初出場を果たし、勝利がなかった日本代表には高いハードルであった。結果として韓国とともにベスト 16 入り（韓国は 4 位）を果たしたが、2006 年は国外大会での初勝利と決勝トーナメント進出が目標であり、一部では 2002 年を上回るベスト 8 入りを求めるメディアもあった。しかし結果は 1 分け 2 敗の惨敗であった。またこの 8 年間は、いわゆる「黄金世代」と呼ばれる 1979 年生まれの選手たちが活躍した時代でもある。1999 ワールドユース（U-20）で準優勝を果たし、2000 シドニー五輪（U-23）でベスト 8 に進出すると、2002 日韓Ｗ杯以降ではＡ代表の中心として長きにわたり活躍した。

Ⅲ期は、新しい日本サッカーの姿が模索された時期でもある。2006 ドイツＷ杯終了から約 1 年半に渡り日本代表監督を務めたイビチャ・オシムは、独特の言動で人々を魅了し注目を集めた。2005 年から開催された FIFA クラブＷ杯では、2007 年大会に浦和レッズが、2008 年大会にガンバ大阪が AFC チ

ャンピオンズリーグ優勝を果たして出場し、それぞれ 3 位の成績を収めた。岡田武史監督による日本代表は、2010 南アフリカ W 杯の直前 4 試合で結果を出せず、世間の期待は低かった。しかし、自国開催以外での W 杯初勝利を含む 2 勝 1 敗でグループリーグを突破し、ベスト 16 進出を達成した。

Ⅳ期は、その岡田武史の後を引き継いで現在指揮を執るアルベルト・ザッケローニ監督の時代をまとめる。2010 年大会の結果をうけ海外の日本サッカーへの関心が高まり、ドイツを中心に欧州リーグへ渡る選手が多くなった。宮市亮（アーセナル）や宇佐美貴史（バイエルン・ミュンヘン）というように、20 歳以下の選手が世界の強豪クラブに渡るようにもなった。また、彼らの多くは、「2014 ブラジル W 杯の優勝」を目標に掲げている。2011 年にはカタールアジア杯優勝を果たす。

2　研究の方法

サッカー選手の内面にあるプロフェッショナリズムを明らかにするにあたり、本研究はスポーツ雑誌のインタビュー記事などで語られるサッカー選手個々人の本音の「言葉」に着目することにした。その方法は以下の通りである。

①各次元の歴史的変遷の大まかな流れを仮定する

前節において J リーグ開幕から現在までの日本プロサッカー界の歴史を 4 つに区分した。第一の作業では、この時代区分を用いて各次元で時期ごとにどのようなプロフェッショナリズムの傾向が見られるかを推測し、大まかな流れを仮定する。その際、スポーツ社会学で用いられる理論を応用し、各次元の意識に影響する因子を明らかにする。この作業の過程は第 3 節で詳述する。

②インタビュー記事から、いずれかの次元を示すものを抜き出す

第二の作業では、序章で示したプロフェッショナリズムのいずれかの次元を示すと思われる選手の発言やインタビュアーとのやり取りを抜き出し、時期ごとに分類する。つまり、4 期×6 次元で、インタビュー記事を 24 の項目に分類するのである。この作業は雑誌を限定して行っており、雑誌の概要とその特徴は第 4 節において示している。

インタビュー記事は、主に各時期における中心選手や中堅・ベテラン選手のものを扱う。「中心選手」とは J リーグや独、英、伊などの欧州トップリーグで試合に出場して活躍し、A 代表や世代別代表に選出される選手のことであり、年齢は関係ない。中堅選手とは、20 代後半で一般に「全盛期」と呼ばれる時期を迎えている選手のことである。ベテラン選手とは、一般に 30 歳以上の選手のことを指すが、本研究で扱うのは基本的に「A 代表である、もしくは A 代表を経験したことのある」30 歳以上の選手である。

③一定の傾向を分析し、仮説との検証を行う

第三の作業では、収集したインタビュー記事から示される一定の傾向を 24 項目ごとに分析する。その傾向を①で示した仮説と照らし合わせ、合致しない場合は別の社会的背景の存在を検討する。

以上の方法によって、本研究のテーマを解き明かすことにする。なお、本研究は一考察に過ぎず、主な傾向ととれるものを示しているのであって、全ての選手のプロフェッショナリズムが本研究で示されたものである（ものであった）とは限らない。

3　本研究の仮説

前節の①に従い、プロフェッショナルの各次元の変化について仮説をたてる。そして各次元の変化に影響していると考えられる因子を明らかにし、次章以降で検証することにする。

各次元のプロフェッショナリズムの変化に関する仮説は、次の 4 つのスポーツ社会学的理論のいずれかを応用することで形成する。各理論の詳細については、各仮説の説明とともに述べることにする。

(1) フロー理論　　：チクセントミハイ（Csikszentmihalyi，M．1990）
(2) 形式社会学　　：ジンメル（Simmel，G．1908）
(3) 象徴的相互作用論　：ゴフマン（Goffman，E．1967）
(4) 社会的交換理論　　：ブラウ（Blau，PM．1964）、ホーマンズ（Homans，GC．1974）

①見るスポーツを提供するに値する知識や技術を持ち、分析ができる

ここでは、各時期における日本サッカーのレベルと選手の挑戦目標との適合性を見ることで、意識の高さ、つまり分析力の優劣を明らかにする。「目標設定が高いほど意識が高い」という意味ではない。

ここでの仮説は、(1)フロー理論を応用している。フロー理論では、能力と挑戦目標が適合しているときに意識の秩序が保たれ、その際、内的経験の最適状態、つまり幸福であると感じることができるとしている。一般にサッカー選手がこの「幸福」に向かうのであれば、挑戦目標が自己の能力と適合するようにならなければならない。

歴史的変遷の検証のための時代区分は、当時日本サッカーに求められていたW杯での目標の違いによって設定した。すなわち、Ⅰ期においては「アジアで勝つこと」、Ⅱ期においては「世界でとにかく勝つこと」、Ⅲ期においては「アジアのベスト 4」、そしてⅣ期において主に示されているのは「W 杯優勝」である。しかし、フロー理論に則り選手が幸福に向かうために挑戦目標を設定するのであれば、各期において「アジアで勝つこと」、「世界で勝てるようになること」、「アジアで確実に勝つこと」、「W 杯 8 強（もしくは 4 強）」となるのが妥当である。選手は自己のレベルについて適切な自己分析を行っており、挑戦目標の設定がそれに準拠したものであるかを見ることで、意識の高さが明らかになる。

②クラブに所属しており、互いにプロとしての信頼関係を結んでいる

ここでは、クラブにおいて互いをプロとして認め合う信頼関係の高さ――特に、日本人選手同士の信頼関係の高さを明らかにする。ここでは(2)形式社会学の立場をとり、信頼関係の意識の変化に関する仮説を形成した［図 1-1］。各期において日本人選手であるAとBとの関係に対し、異質な選手Cの持つ「カ

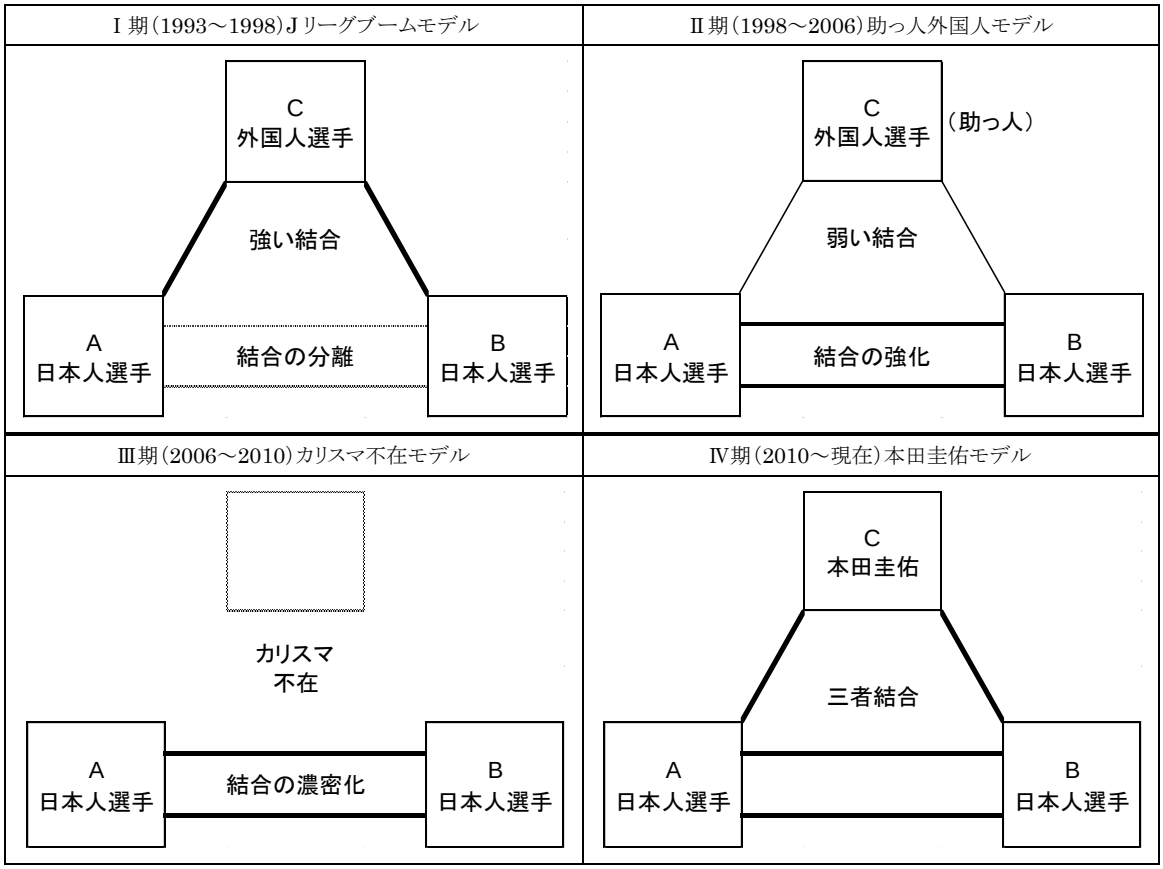

図 1-1　プロフェッショナリズムにおける信頼関係（次元②）の形式社会学的変遷モデル

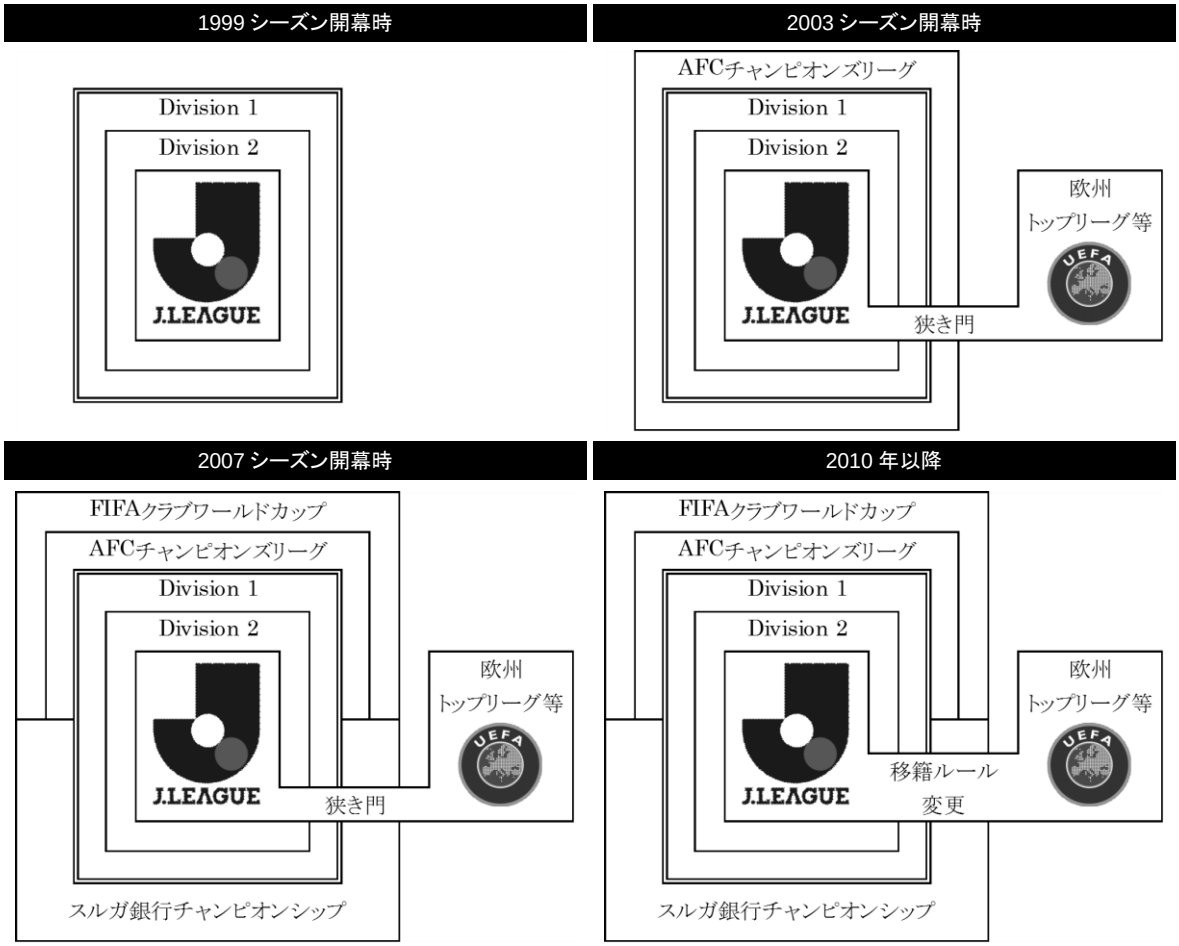

図 1-2 Ｊリーグの国際化

リスマ性」が日本人選手の結合にどのような影響を及ぼすのかという形式社会学的な人間関係の変化を図式化している。I 期で異質な選手 C に該当するのは、かつて W 杯で活躍したジーコ、リトバルスキー、リネカーなどの外国人選手である。彼らが持っていた圧倒的な技術、高い情熱などはプロサッカー選手としての求心力となって A と C、B と C との間に濃密な結合を生み、他方 A と B との間の結合は分離すると考えることができる。II 期ではそうした「カリスマ性」を有する外国人選手は存在せず、むしろ「助っ人選手」つまり短期間チームを支える役割としての意味合いが強い。こうした状況では日本人選手 A・B の結合は深まるものと考えられる。カリスマが存在しないⅢ期は日本代表を率いていたイビチャ・オシム、岡田武史が「日本人らしいサッカー」の完成を掲げた時代であり、日本人選手同士の結びつきは強くなる。Ⅳ期では「カリスマ性」をもつ選手として本田圭佑が挙げられる。二宮寿朗（2011）は、2010 年以降の日本代表の躍進について、本田圭佑が彼の同世代を中心に日本サッカーの意識改革を先導したことを背景に挙げている。一方、I 期との違いは「カリスマ性」を持つ人物が「日本人」という点で A・B と同質であるということである。同じ日本人選手が「カリスマ性」を有することで、モデル的には I 期に類似した状態ながら内容的にはⅢ期と同じ、という日本人選手としての三者による強い結合が見られると仮定する。

③キャリア設計において自律的な考えを持っている

この次元では、サッカー選手が移籍や代表入りなど新たキャリアを形成するための自律性の高さを明らかにする。これは J リーグと他の大会との関係性の変化、つまり J リーグの国際化により大まかな流れを説明することができる。ここでも形式社会学のモデルを応用し、［図 1-2］に図式化した。

他との関わりが密接になれば、元々の関係から自由になるという意味では②に応用した形式社会学的モデルと同様である。I 期では J リーグはほぼ単独で存在している。II 期では J2 が誕生し、2003 年か

らACLが登場する。Ⅲ期ではACLがクラブW杯と結びつき、さらにナビスコ杯がスルガ銀行チャンピオンシップと結びつく。Ⅳ期ではJリーグの移籍ルールがFIFA基準に変更され、欧州トップリーグなどへの移籍がしやすい状況になった。こうしてJリーグが国際大会との結びつきを広げたり移籍ルールの緩和をはかったりして規模を拡大する中で、選手の自律性が高まるのではないかと考えられる。

④クラブを応援するサポーターの喜びの為に試合に臨む

この次元では、サポーターへの意識の高さ、サポーターとの結合の強さを明らかにする。この次元の変化は、(3)象徴的相互作用論を応用し、Jリーグを行うスタジアムの構造に背景を求めることで歴史的変遷に関する仮説を形成することが可能である。

象徴的相互作用論においては、ある物理的距離が社会的距離の象徴とされ、人々の結びつきに反映されるという。ここでは「スタジアムにおける観客席とピッチとの物理的距離がサポーターと選手との社会的距離に転換される」と仮定して、歴史的変遷の仮説モデルを形成する。

Jリーグ発足当時のⅠ期では、各クラブチームがホームゲームを行う競技場は、欧州など世界のサッカーの現場からはおおよそ考えられない酷いものであった。すなわち球技専用スタジアムではなく、コートとスタンドの間に競技用トラックが敷かれていたのである。これは、建設したスタジアムを国民体育大会にも使用したいという日本の自治体の体質が表れている（Moffett, 2002）。国民体育大会は毎年異なる都道府県で開催されるが、政府から多額の助成金を受け取ることができる。スタンドとピッチには長い距離があり、本来提供されるべきスペクタクルを十分に観客に提供できなかった。

スタンドとピッチのこうした「物理的距離」は、サッカーの試合そのものにあるべき「雰囲気」をこわし、選手にとってはサポーターの情熱を感じ取りづらくし、サポーターにとってはスタジアムで応援することとTV観戦との違いを区別しにくくする。

サッカー専用スタジアムと陸上競技場の物理的距離に関する比較が可能な写真を［図 1-3］に示した。どちらがプロサッカーの緊張感や激しさを味わえるか、サポーターが力強いものと選手が感じられるかは、この図を比較すれば明らかである。

Ⅱ期では、2002日韓W杯に合わせたスタジアムの建設ラッシュもあり、20, 000人以上の観客収容数を誇るサッカー（球技）専用スタジアムが増加するなど、ハード面での見直しがなされた。1999年以降のJ2誕生から次々にJリーグ参入クラブが増加したこともあり、各地にJリーグ規則に準拠するスタジアムや芝のグラウンドの建設が進められていた。

こうした動きはⅣ期まで続いていく。ガイナーレ鳥取や松本山雅FCがJリーグ参入初年度（鳥取は2011、松本は2012）からサッカー専用スタジアムを採用し、ガンバ大阪がサッカー専用スタジアム建設を進め、海外選手の増加によって本格的なサッカースタジアムでのプレーが増えた。ここからサポーターへの意識はJリーグ開幕から質的に高まり続けると考えられる。

図 1-3 大宮公園サッカー場（上）と万博記念競技場（下）

⑤地域のスポーツ文化の振興に貢献することを重視している

この次元では、サッカーを多様な要素に影響する一つの「文化」として捉え、その発展に貢献しようとする意識の高さを明らかにする。ここでは(4)社会的交換理論を応用し、歴史的変遷の仮説モデルを形成する。

社会的交換理論においては、全ての社会的行為には価値があり、その行為への対価となる社会的行為を贈与することによって社会が成り立つとする。この次元のプロフェッショナリズムを分析する際、地域のスポーツ文化への貢献という社会的行為について以下のよ

うに仮定する。

① **選手ではない外部の貢献が大きいとき、選手は本来担うべき役割を課した外部への代償となる社会的行為への意識が高まり、他方、文化貢献への意識は低くなる。**

② **選手ではない外部の貢献が小さいとき、選手は本来担うべき文化貢献という社会的行為への意識が高まる状態にある。**

この仮説を用いた場合、まず全日空、松下、三菱、日産と、JSL の流れをくむ大手企業に支えられて一大ブームを形成していたⅠ期においては、選手の地域貢献への意識は低いと考えられる。

Ⅱ期では J リーグ人気の低迷から全日空や読売、佐藤工業などが撤退し、横浜の 2 クラブの合併、ヴェルディ川崎の東京移転などといった地域のスポーツ文化を軽視したスポンサーの行動が問題となり（第 3 章で詳述)、代わって地域住民がその地位を高めていく。これまでスポンサーがほとんど担っていた文化貢献を地域住民や選手が取って代わっていく状態になり、スポーツ文化の振興に関する選手の明確な意識はⅡ期より生まれ始めるものと考えられる。

Ⅲ期では、ドイツ W 杯以降の日本サッカーの閉塞性、リーマンショックに端を発する景気後退により、クラブの経営難が深刻化した時期である（水戸ホーリーホック、東京ヴェルディ 1969 など)。これは地域住民の行動力に悪影響を及ぼすと考えられる。そのため選手の貢献への意識はⅡ期と比較して高いものであると仮定する。

Ⅳ期、つまり近年では、スポーツが日本を活性化する明確な「文化」として定着し始めた時期である。東日本大震災から今日まで続く各地のチャリティマッチの開催、女子サッカー日本代表の W 杯優勝は、原発事故後の対応への不満と政治の停滞に対する閉塞的な雰囲気から日本人を一時的に逸脱させるという役割を明確にした。そのため、Ⅳ期においてはそういった文化人としての誇りや喜びを内面化するものと考えることができる。そういった点で外部から完全に自律した意識を持っている。

このように、スポーツ文化への貢献を担う「外部」とくにスポンサーの権力は時期を経るごとに弱まり、他方、文化貢献へのプロ意識は高まり続けるものと仮説をたてることができる。

⑥何より純粋にサッカーをプレーすることを愛し、サッカーを通してサッカーを含むスポーツの素晴らしさを伝えようとする姿勢を持っている

ここでは、サッカー選手が持つサッカーへの楽しみや愛情の意識の高さを明らかにする。この次元は、「サッカー選手としての幸福」を見るという意味で①の次元でも用いた(1)フロー理論の応用が適している。すなわち、この次元は①において挑戦目標と実力との乖離が大きいほど、幸福から遠ざかっている状態にある（楽しみや愛情を見出しにくい)、と説明することができる。

ここまでの仮説形成を通して、プロフェッショナリズム 6 次元の変化は、「①と⑥―挑戦目標と実力との適合性」、「②―カリスマ選手」、「③―J リーグの国際化」、「④―競技場の物理的距離」、「⑤―スポンサー」を主な因子として説明することができるとした。ここまで整理したプロフェッショナリズム 6 次元の変化を図に表したのが［図 1-3］である。ただし、Ⅳ期については期間も短く、未曾有の大災害となった東日本大震災という特別な事象を最近経験したばかりでもあるため、南アフリカ W 杯から現在までの傾向は読み取るが、「現在以降～少なくともブラジル W 杯までにどういったプロフェッショナリズムの変化を予想することができるか」という考察にも重点を置くこととする。

4　雑誌『Sports Graphic Number』

4-1　雑誌の概要

本研究においては、文藝春秋社が発行している総合スポーツ雑誌『Sports Graphic Number』（以下『Number』）を扱う。『Number』はアメリカのスポーツ週刊誌『Sports Illustrated』をモデルに観戦者向けのスポーツ全般を扱う雑誌として、1980 年 4 月に発刊された。初期は『Sports Illustrated』から記事や写真の提供を受けるなど、発刊元の Time Warner との提携も行っていた。1990 年代の F1 ブームに至るまで赤字続きだったものの、現在は硬派なスポーツ誌としての地位を確立。兄弟誌「ナンバープラ

		Ⅰ期	1998 W杯	Ⅱ期	2006 W杯	Ⅲ期	2010 W杯	Ⅳ期
①	技能分析 / 幸福追求	アジアで勝つ		世界で勝てるようになる		アジアで確実に勝つ		世界の8強 or 4強
②	信頼関係 / カリスマ	外国人依存と結合分離		結合の強化		結合の濃密化		カリスマとの共存
③	自律性 / J国際化	低い自律性		自律性の萌芽		高い自律性		強い海外志向
④	親近感 / 物理的環境	サポーターへの親近感の遠さ		親近感の向上		親近感の向上		海外環境の影響の強化
⑤	地域貢献 / スポンサー	意識の低さ		意識の萌芽		高い意識		文化人としての高い意識
⑥	愛情・楽しみ / 幸福追求	幸福		幸福との多少の乖離		幸福		幸福との乖離

図 1-3 プロフェッショナリズム変遷の仮説

ス」などの発刊やインターネットによる記事配信、Number ブランドの商品を販売するなど幅広い事業展開を模索し、文藝春秋の出版物の中でもトップクラスの稼ぎ頭に成長した。月 2 回という発行ペースであるため、記事の速報性の面ではスポーツ新聞や週刊誌より確実に劣る。そのため、誌面構成はスポーツライターによる特集記事、インタビュー記事、対談記事などが中心である。

4-2 『Number』の特徴

山際淳司の「江夏の 21 球」以来、ノンフィクションの手法でアスリートの内面を描くスタイルが、従来のスポーツ誌にない『Number』の特徴である（宮田義行，1997）。記事は署名原稿がほとんどを占め、沢木耕太郎や乙武洋匡などの著名なライターの特集記事が掲載されることもある。また、特集記事を毎号で組んでおり、巻末にコラム記事等が書かれている。様々なジャンルのスポーツを扱うが、特集記事はその時期で世間の話題が高いスポーツを特集している。サッカーも J リーグが開幕した 1990 年代から多く取り上げられ、以降頻繁に特集記事が組まれている。読者層は 20～30 代の男性が中心である。

売り上げは今でこそ 10 万部台に落ち着いているが、1998 年には 47 万部にまで達したこともあり、広告収入が 1 号 1 億円を超す成功を収めた。これを契機に 2000 年代前半には数多くのスポーツ雑誌が創刊された。その 1998 年の『Number』は、増刊号を含めた 30 号中実に 11 号でサッカー選手が表紙を飾っており、フランス W 杯開催期間の 6 月 10 日～7 月 12 日前後に発売された 446 号～450 号ではすべてサッカー選手が表紙を飾っている。

開幕直前に刊行された 446 号（6 月 4 日，副題「日本代表、史上最大の挑戦」）は、コラムを除く全ページを W 杯直前の特集に割いているが、［W 杯直前の胸の内］というテーマで日本代表全員のインタビューが掲載されている。開幕に際し著名な元サッカー選手へのインタビューも掲載されている。

447 号（6 月 18 日，副題「Get Heated！！」）は、第 1 戦・アルゼンチン戦での中田英寿が表紙を飾っている。447 号は日本対アルゼンチン戦、ブラジル対スコットランド戦のゲームレポートに続き、クロアチア代表ボバンと同国出身の格闘家・シカティックの対談が掲載される。『Number』では、こうしたサッカー選手と異なるスポーツ選手との対談が日本の選手同士でもよく行われている。次いで［密着インタビュー］として当時の代表の主力・山口素弘が 10 頁にわたり登場する（密着インタビュー「勇気」）。

刊行時に日本代表の 1 次リーグ敗退が決まっていた 448 号（7 月 2 日，副題「日本代表、戦いの果て」）では GK の川口能活が表紙を飾った。インタビュー記事には、城彰二（「エースは何を思ったか」）、中田英寿（証言構成「中田英寿がピッチに残したもの」）、川口能活、秋田豊などが登場する。

449 号（7 月 16 日）は W 杯総集編であり、日本人サッカー選手が登場するインタビュー記事等はほぼ皆無だった。しかし 450 号（7 月 30 日，副題「反撃者」）では、当時海外移籍を決めた中田英寿が表紙を飾り、中山雅史を含め 2 人のインタビューが掲載されている。なお、この 2 日前には W 杯の完全保存

版と銘打った増刊号が発売され、この中で川口能活のロングインタビューを掲載している。

『Number』はスポーツ雑誌ではあるものの、時期に応じて半分以上を特定のスポーツに割くことがあったり、場合によっては 446 号のようにほぼ全てを 1 つのスポーツに絞ったりすることがある。しかしながら、やはり記事のほとんどがドキュメントやインタビュー、対談によって構成されている。

4-3　サッカーと『Number』

1998 年以降、『Number』においてサッカーの位置付けは重要なものになっている。2007 年に刊行された全 24 号のうち、サッカー関連の人物が表紙を飾ったのは 14 号、うち、当時の監督であるイビチャ・オシムが表紙となったのは 4 号である。これは「オシム語録」と呼ばれるウィットに富んだ表現が当時注目を集めていたことを意味している。南アフリカ W 杯終了後、その熱もおさまり甲子園特集が組まれた 759 号以降の 760 号から 790 号（2010 年 8 月 19 日～2011 年 10 月 27 日）の 31 号の中でサッカー関連の人物が表紙を飾ったのは実に 20 号に及ぶ。787 号（2011 年 9 月 15 日，副題「日本の論点～サッカー総力特集～」）では、女子選手を含め 14 人にわたるインタビュー記事やドキュメンタリーが掲載されている。この 31 号のうち、日本代表・本田圭佑は 6 度にわたり表紙に登場している。かねてから「W 杯優勝」を宣言し、一時期は「ビッグマウス」と揶揄されていた彼は、しかし W 杯で 2 ゴールの活躍を見せ、見事に結果を残した。そのことで彼の言動にもより注目が集まったことがわかる。

『Number』に登場する人物は、ロングインタビュー向きの選手・人物が多い。本田圭佑や中田英寿は、自身の公式ホームページを立ち上げ、マスコミの悪質な記事捏造などを嫌い、自分の言葉を直に伝えることを大事にする人物である。彼は 1996 年に「君が代がダサい」と発言したと報道されたが、これは会見の言葉尻だけを捉えた悪質な記事に基づいており、その後の右翼団体の抗議活動などもありメディア不信になったという過去がある。中田の引退については先述したが、引退時も公式会見などは行わず、公式ホームページ上で声明が発表されたのみであった。その中田も『Number』では多くの表紙に登場し、ロングインタビューに快く応じている。本田もその発言を「ビッグマウス」とマスコミに呼ばれるなど批判を受けていた時期もあり、現在は会員限定のブログ上で自分の思いなどを綴っている。一方で『Number』での登場は先述の通り多い。

元日本代表監督イビチャ・オシムは、スポーツジャーナリスト以外への受け答えは温厚でありながら非常に慎重である。彼の姿勢は、かつて彼が経験したユーゴスラビア内戦の時期に「マスコミが戦争を始めさせる」という様を見せ付けられてきたことに起因するものである（木村元彦，2005）。

月ごとの刊行数が少なく速報性の面で他紙とのハンディキャップを持ちながら、『Number』は試合をノンフィクションのドラマとして描き出す手法で雑誌としての特異性を示している［図 1-4］。アスリートの内面からくる言葉に着目し、その世界を深く掘り下げ、「スポーツを読む」文化を日本に築いた『Number』の功績は大きい。

4-4　本研究と『Number』

では本研究を進めるための資料となるべき必要な条件を『Number』が満たしているか、本章第 2 節な

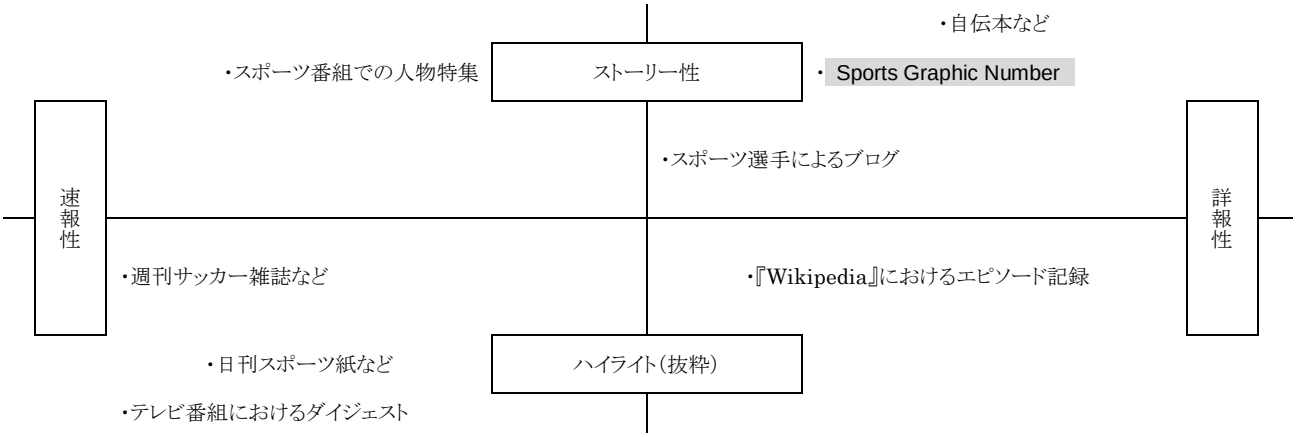

図 1-4 『Sports Graphic Number』と他のスポーツ情報媒体の比較

どを基に整理する。その条件とは、以下の三つである。

1. **Jリーグ開幕から常に日本プロサッカーを記事の対象としている。**
2. **方法①で示した研究の対象とするカテゴリーの選手すべてを『Number』がインタビュー対象として捉えている。**
3. **Jリーグ開幕からスポーツ雑誌としての性格が不変である。**

第一に、『Number』がJリーグ開幕から常に日本プロサッカーを記事の対象としているという条件である。Jリーグが開幕した1993年5月15日の直後に刊行された316号（1993年5月20日）以降の全号でサッカーの記事が載っているというわけではないが、毎年日本人プロサッカー選手に関する記事が出ている。Jリーグ開幕以降初めて選手個人が特集されたのは317号（1993年6月5日）で、Jリーグ総力特集とともに『ロマンの残党、加藤久』という記事が掲載された。分析資料一覧には2章以降で引用した記事が掲載された『Number』のみを示しているが、その一覧から本研究では2004年の『Number』から記事を引用しなかったことが理解できる。ただし、2004年には606号（2004年7月8日，副題「日本代表総力特集 覚悟」インタビュー記事：小野伸二，中田浩二ほか）や617号（2004年12月9日，副題「日本サッカーには浦和がある THE ONE AND ONLY REDS」、インタビュー記事：山田暢久，永井雄一郎ほか）などでサッカー選手の記事が掲載されており、夏季には五輪代表も特集された。よって、第一の条件を満たしているといえる。

第二に、方法①で示した研究の対象とする層の選手すべてを『Number』がインタビュー対象として捉えているという条件であるが、［表 1-5］から『Number』が幅広い世代の選手をインタビューの対象としているかが理解できる。最近（Ⅳ期）でいえば、778号（2011年5月12日，副題「カズに学べ。明るく生き抜くベテランの思考法」）では10以上の選手からインタビューを行いベテランのサッカー論を特集している。一方で787号では現在の日本サッカーを牽引する中心選手14名を特集していた。よって第二の条件を満たしているといえる。

第三に、本研究で扱う時期においてスポーツ雑誌としての性格が不変であるという条件であるが、これを『Number』編集長・鳥山靖のインタビュー（2009）から検証する。

――来年創刊30周年ですが、編集方針などで大きく変わったことはありますか？
鳥山靖「時代とともに見え方とか作業の技術的なものは変わってきていると思います。でも、編集の基本は変わっていないと思います。スポーツのドラマやアスリートの日常を深く掘り下げる。そして、それを文章と写真の力で美しく感動的に見せる。これが、この雑誌の基本だと思ってい

時代	Ⅰ期 1993～1998	Ⅱ期 1998～2006	Ⅲ期 2006～2010	Ⅳ期 2010～現在
中心選手	三浦知良 北澤豪 中山雅史 前園真聖	中田英寿 中村俊輔 高原直泰 中田浩二	中澤佑二 鈴木啓太 阿部勇樹 田中マルクス闘莉王	本田圭佑 長友佑都 内田篤人 香川真司 …
中堅選手	岡野雅行 相馬直樹 本田泰人 呂比須ワグナー	宮本恒靖 藤田俊哉 福西崇史 三都主アレサンドロ	福田健二 小野伸二 長谷部誠 玉田圭司	松井大輔 豊田陽平 李忠成 川島永嗣
ベテラン選手	加藤久 井原正巳 柱谷哲二 ラモス瑠偉	田中誠 福田正博 秋田豊 名波浩	三浦知良 川口能活 松田直樹 石川直宏	服部年宏 遠藤保仁 鈴木隆行 明神智和 …

表 1-5　『Number』で特集記事が組まれた選手一覧

三浦知良のように、立場は変われどインタビューを受けている選手もいる。三浦は全ての時期においてインタビューを経験しており、松井大輔も若手だったⅡ期から『Number』で特集記事が組まれている

ます」
――読者層に変化はありますか？
鳥山「当初は、大学生～30 代の男性が中心でした。いまは、その人たちの成長とともに、もう少し上の層までカバーできていますね……」
――ライバル誌を挙げるとすれば何になるのでしょう？
鳥山「あえて挙げれば「Sportiva」（集英社）さんでしょうか。 でもあちらは月刊、うちは隔週なので違うかもしれませんね。90 年代に後発のスポーツ雑誌がいくつか立ち上がってきましたが、われわれは独自の土俵を創刊以来つくってきたので、この分野では誰にも負けないといった気持ちはあります」

つまり、『Number』はその歴史の中で、雑誌の性格を一貫して守り続けてきたことが伺える。草創期の読者の成長と共に読者層が広がったことから、『Number』が 30 年以上に渡り雑誌としてのスタイルを守っていることが理解できる。したがって、第 3 の条件は満たされている。

ここまでの検討を通して、雑誌『Sports Graphic Number』が本研究で用いる資料として適切であることが示された。第 2 章からは、『Number』の記事を用いてプロフェッショナリズムの研究を行うこととする。

第２章　Ⅰ期：Ｊリーグ・スタートダッシュの成功と課題

１　プロリーグの誕生と課題

1-1　アジアを超えるために

本章では、J リーグが開幕した 1993 年から 1998 フランス W 杯までの選手のプロフェッショナリズムを検証する。

1993 年 5 月 15 日に J リーグが開幕し、サッカー選手を取り巻く状況は一変する。JSL 時代に 200 人ほどしか観客がいなかった試合は毎試合満員御礼となり、チケットはプラチナ化。買ったチケットをさらに高額で売りつける「ダフ屋行為」が問題となるなど、社会現象を巻き起こした。「オリジナル 10」には、かつて W 杯で活躍したスター選手がそろい、サッカーファンや選手をも熱狂させた。初年度は日本リーグ時代の名手「読売クラブ」「日産自動車」を母体とする「読売ヴェルディ」「横浜マリノス」が人気を二分し、この 2 クラブが二強としてリーグを引っ張ると思われていた。その大方の予想を覆しファーストステージ優勝を果たしたのは、茨城県鹿島町という当初人口 4 万 5000 人にも満たない小さな町を本拠地とした「鹿島アントラーズ」だった。アントラーズを母体とする住友金属工業は前年度 JSL2 部所属であり、下馬評は高くなかっただけに人々を驚かせた。セカンドステージは読売が本来の実力を見せつけ優勝。その勢いのまま NICOS シリーズで鹿島を破り、J リーグ元年の王座に輝いた。

J リーグ人気は数年後に衰えを見せるが、金子達仁（1997）は、野球場と比較して J リーグ会場への交通の便が悪いながら、開幕から 1997 シーズン終了まで平均観客動員数 1 万人を維持したのは称賛すべき結果だとしている。参戦クラブも毎年増え、1998 シーズン終了時のクラブ数は 18 にのぼった。

日本代表は、J リーグ開幕年の 1993 年に「ドーハの悲劇」を経験してアメリカ W 杯出場を逃したが、4 年後のフランス W 杯予選をアジア 3 位で通過し、1954 年スイス W 杯から 44 年目の挑戦にして初めて世界への扉を開いた。

1-2　なぜブームとして終わったのか

J リーグの社会現象な長くは続かず、いわゆる「ブーム」が冷めた後、人々はスタジアムから遠ざかっていった。J リーグが新しい文化として人々に浸透しなかったのには、いくつかの問題点を指摘することができる。第一に、スタジアムの構造である。この時期に J リーグが開催される競技場で球技専用のスタジアムは、カシマ、三ツ沢、日本平の 3 つのみであった。その他はピッチと観客席の間に 400m トラックが敷かれていた。「サッカーの聖地」とも呼ばれる国立競技場も同様だ。ピッチと観客席の間に大きな距離ができ、本当の意味でサッカーを楽しめる空間とはならなかった。競技場ではサポーター同士が火花を散らせるような緊張感を生み出せなかった。試合前後にお互いを讃えあうエールを送るという、欧州のサッカー通が見たら卒倒してしまうような様相を呈していたという（Moffett，2002）。これには、サッカーの雰囲気を味わう空間を用意しようとする意識を行政・自治体が持っていなかったことが背景にある（Moffett，2002）。すなわち、「スタジアムを国民体育大会の時にも使用したい」という思惑があった。毎年異なる都道府県で開催される国民体育大会は、多額の助成金が開催県に与えられるからである。行政は、スポーツクラブを所有しているというより、多様な用途に用いることのできる大型スタジアムを所有しているということに価値を見出していた。そのためクオリティよりもキャパシティや多目的性が重視されたのである。

第二に、観客が地元のクラブを応援するために試合に訪れるのではなく、J リーグそのものに共鳴したために試合に訪れていたことである（Moffett，2002）。試合を見て特定のチームを好きになったり、サッカー独特の臨場感を味わえたりればファンの開拓は進んだだろう。だが用意された舞台はほとんど陸

上競技場であった。そのうち、観客席から遠いピッチでの戦いを観戦することと TV で観戦することに違いを見出せなくなり、客はスタジアムから離れていったのである。また当時の J リーグには、上位の数チームに対して国際大会（現在で言う ACL や、欧州の UEFA チャンピオンズリーグ、UEFA ヨーロッパリーグなど）への出場権を与えるという特典がなかった。そのため多くの J リーグファンが、自分の応援しているチームが勝とうが負けようが気にしなくなっていったのも事実である。一方で、ブーム終焉とともにこうした層が居なくなったことで、一方でサポーターの質は高まっていく。つまり純粋に地元のクラブを応援しに来るという本当のサポーターはブーム後に発展する。

第三に、本拠地決定の問題である。「オリジナル 10」が本拠地とした「都市」はそれぞれ浦和、市原、鹿島、川崎、横浜、清水、名古屋、大阪、広島である。これを野球の本拠地と比較すると、西武ライオンズ、千葉ロッテマリーンズ、横浜ベイスターズ、中日ドラゴンズ、大阪近鉄バファローズ、広島東洋カープ……都道府県単位で考えれば 9 府県中 6 府県がプロ野球の本拠地と重複しているのである。初のプロスポーツチームが誕生した県は茨城、静岡の 2 県だけである。その一つである静岡・清水市（当時）も旧来よりサッカー処だった都市である。鹿島町を本拠地とした鹿島アントラーズが町おこしに成功し初年度総合 2 位を獲得しただけに、スポーツ文化の「拡散」に出だしで失敗したことは問題といえる。

2　I 期におけるプロフェッショナリズムの検証

2-1　早くから芽生えた世界志向

それでは、I 期におけるプロフェッショナリズムを検証する。フロー理論を応用した仮説では、I 期で見られる挑戦目標はアジアでの勝利に置かれるとした。しかし、『Number』のインタビュー記事を検証すると、それよりも高い目標に選手の意識が向いていることがわかってくる。例えば前園真聖は、J リーグで戦う自分の能力についてこう話している。

> **前園真聖「このまま日本にいたんじゃ、自分のプレーは絶対に伸びない。自分の本当の力も判断できないからさ。J リーグじゃわからないよ、本当の自分の実力が……」**
>
> （佐藤俊，1996，Vol．394）

前園は後にスペイン・セビージャ FC からオファーを受ける逸材であるが、満を持して始まった J リーグでは満足できない意識があらわれている。浦和レッズに所属していた福田正博は、当時の選手個人個人の「闘う意識」の欠如に危機感を募らせている。

> **福田正博「ウチのチームは意識が低いですよね。勝つためにはどうしたらいいかを考えていない選手が多いんだから……。汚いプレーをしたっていいんですよ、プロなんだから。なのに三菱のフェアプレー精神とかいって……。三菱時代の保守的なカラーが残っているというのかな、戦う姿勢が前面に出ていないんですよ」**
>
> （鈴木洋史，1993，Vol．320「レッズに火をつけて。――磨かれざる赤いダイヤモンドが輝く日」）

浦和レッズは、2011 年まで運営会社名が「三菱浦和フットボールクラブ」であった。とくに J リーグ創設当初は福田曰くその色が強く残っており、プロになったことに満足し、日本サッカーリーグ時代のサッカーと変化がないことを憂いている。確かに、初年度はヴェルディも「読売」をチーム名に用いたことで問題となった。この背景は第 2 章において詳述するが、当時はまだ企業利益優先の色が強く残っており、そうした環境は一部の選手に J リーグから脱したいという意識を生んでいることがわかる。次に北澤豪と岡野雅行のインタビューを挙げるが、彼らのインタビューから、早くから世界に目を向けられる機会が J リーグ開幕前にあったことがうかがえる。

> **北澤豪「もうゾクゾクしちゃって、嘘だろって感じだよね。俺が小学生の時、夜中に目をこすりながら見ていたワールドカップで、大活躍していたあのジーコとゲームやっているんだから。リ**

ネカーにしてもリトバルスキーにしてもワールドカップの常連で、テレビでしか見ることのできなかった存在だよ」

（小松成美，1993，Vol．320）

——小学校時代の目標はなんだったんですか。
岡野雅行「最初は親に連れていかれて、泣きながらサッカーやってたんです。でもテレビで外国のサッカーを見てすごいなあと思って。もう将来は外国行ってサッカー選手になろうかとしか思ってなかったです。その頃の日本リーグなんかシケてましたからね」

（山崎浩子，1996，Vol．406）

サッカー不毛の時代に代表されるテレビ番組として『三菱ダイヤモンドサッカー』がある（1968～1988）。この番組は、毎週ヨーロッパ各国リーグの特筆すべき試合を放送する番組で、イギリスの『Match of the Day』の日本語版としてスタートした。以降は、1970 年のメキシコ W 杯を日本初衛星生放送。1974 年の西ドイツ W 杯を 1 年間かけて全試合放送。決勝の西ドイツ対オランダ戦は、他局が参議院の開票速報の最中だったにもかかわらず生中継を実施した。番組の解説を務めた岡野俊一郎はのちのテレビ出演（TBS『FOOT×BRAIN』，2011）で「毎週決まった曜日に決まった時間にサッカーがあることは、サッカー文化の発展に大いに貢献した」としている。J リーグ開幕の 10 年前に一世を風靡したサッカー漫画『キャプテン翼』の影響も考えられる。1981 年から連載されたこの作品は 1983 年にアニメ化され、現在のテレビ東京アニメ史上最高視聴率を記録した人気番組である。この中で主人公・大空翼ら日本の選手たちが世界を舞台に活躍する姿は、サッカー少年に世界への大きな憧れを抱かせ、世界で戦う日本人選手のイメージを選手にイメージさせた。

世界志向の意識は、96 年アトランタ五輪で「マイアミの軌跡」を演じた世代の選手に強く表れている。また、インタビューにおける特徴として、こうした世代の選手が監督との確執を抱えたことが頻繁にあらわれている。以下に挙げる 420 号（1996）、また 440 号（1998）中田英寿と前園真聖の対談が代表的な例であり、その中で城彰二のインタビューを挙げる。

城彰二「（フランス W 杯アジア最終予選の）韓国はいい選手もいなかったし、前半のやり方を続けてたら問題なく勝った相手でしょ。だから僕、文句言いましたもん、加茂さんに。なんで僕が交代しなきゃいけないんですかって」

（金子達仁，1997，Vol．420「アトランタ五輪代表『岐路』」）

城彰二「あの時（上のインタビューとは異なり、1995 年のアトランタ五輪アジア予選）の韓国も、普通にやれば問題なく勝てる相手だったと思うんです。ところが、直前になって西野監督が守備的布陣で行くって言いだした。こっちはガックリですよ……。僕もゾノ（前園真聖）さんも、ヒデ（中田英寿）も、完全にシラけちゃった（試合は韓国に敗れる）」

（金子達仁，1997，Vol．420「アトランタ五輪代表『岐路』」）

城のインタビューから、アジアとの戦いでの余裕が伺える。一方で、指揮をとる日本人指導者の低姿勢に不快感を示している。選手とスタッフとの目標意識の違いから、チームに不協和音を生じさせている。選手が自己の能力を最大限に引き出せない戦いを強いられているからだ。

城彰二「（J リーグでの戦いは）欲が出てきて、途中からは物足りなささえ感じるようになった。入団した頃にイメージしてた“こういうプレーができるようになりたい”っていうのがこなせるようになってきて、反面、僕に新しい何かを与えてくれる気がしなくなったんです。今から思えばあの頃ですかね、韓国にビビらなくなったのは」

（金子達仁，1997，Vol．420「アトランタ五輪代表『岐路』」）

川口能活は、アトランタ五輪の世代が持つ世界への意識の高さを語っている。

川口能活「アトランタを経験してる選手たちは、もうワールドカップ予選は勝つのが当たり前だ

し、すでに本大会の方に目が行ってる部分はあると思うんですよ。ところが、いざ代表に入ってみると、どうもそうじゃない選手もたくさんいる。はっきり言って、話が通じないなって感じること、多かったですよ」

（金子達仁，1997，Vol．420「アトランタ五輪代表『岐路』」）

アトランタ五輪の世代は、中田英寿や前園真聖に代表される世代であるが、彼らは1993年のU-17世界選手権、1995年のワールドユースで世界の8強入りを達成した世代である。ユース年代で結果を出した自信が世界志向を強くしているのだが、Ⅰ期ではそうした意志を周囲と共有できていないことが伺える。このように、多くのの選手に世界志向の傾向が伺えるが、テレビで世界のサッカーに触れる機会が充実していたこと、世界と戦う日本人のイメージを形成しやすかったことが影響のひとつとして挙げられる。一方で高い志向は周囲とギャップを生み、プレーで表現したいことを十分に発揮できないという不満を覚える選手が多い。

ここに、Ⅰ期の能力分析において高い乖離、つまり意識の低さが示されている。Jリーグの環境に自分の能力を十分に知る機会がないまま（それは他選手の意識の問題、監督の低姿勢など様々な要因が挙げられる）、ただ「早く世界と戦いたい」という思いに駆られているという状況が選手の発言から見える。

2-2　ジーコはパパ

チーム内の信頼関係において、やはりⅠ期では外国人をリスペクトする発言が多い一方、日本人の選手間での信頼関係について強調する選手は少ない。一例を見ていく。

大野俊三「ジーコはウチのチームのパパ。パパはいろんなことを教えてくれる。そしてジーコが言っていることを自分でプレーしながら、噛み砕いて教えてくれるお兄さんがサントス、って感じですね……。ジーコが良く言うのは、俺は99%アドバイスする、でも残りの1%は自分で考えろ、ということ」

（平野史，1993，Vol．392「大野俊三vs．黒崎比差支『アントラーズサッカーの真髄』」）

ジーコを「パパ」、サントスを「お兄さん」と呼ぶあたり、外国人選手に絶対的な信頼が寄せられていることがわかり、この時期の鹿島アントラーズ、もしくはJリーグクラブにおける選手間の権力構造が垣間見える。しかし彼らは単なるプロサッカーの先輩として位置づけられたのではなく、彼らの取り組む姿勢は尊敬の対象とされていたのである。以下の北澤のインタビューからもその意識が伺える。

北澤豪「俺が驚いたのは、彼らがJリーグの試合に本気で臨んでいること。最初はね、日本のサッカーを軽く見て、手を抜くんじゃないか、って話してたんだ。でも、彼らは決して手を抜くことがない。本当にありがたいよね」

（小松成美，1993，Vol．320）

また、三浦知良はこうした姿勢は彼らの“危機感”が根底にあると話している。

三浦知良「ビスマルクにしてもジーコ、リトバルスキー、ディアス、サントス、エドゥー、みんなプロの厳しさを知っている。彼らの持つ“危機感”が、グラウンドでのプレーに繋がっているんだよね。全ての日本人が、“危機感”を持てるかどうか……。そこが日本のプロサッカーの分岐点になると思うんだ」

（小松成美，1993，Vol．332）

彼の言う「危機感」とは、プロチーム内での生存競争、お互いをプロとして認め合う中での高いライバル意識のことである。三浦も単身ブラジルへ渡った身としてプロの厳しさは十分承知であるが、Ⅰ期ではこうした危機感がない状態であり、これから選手に芽生えるか、芽生えないままかの分岐点にあることがわかる。ただ、先程の福田正博や川口能活の発言から明確な変化がなかったと推測される。

当時の外国人選手への依存を示すインタビューを以下に示すが、選手名は記されていない（浦和レッズの中心選手)。選手の意志を尊重してのものだろうか。

> 選手 A「上位チームはセカンドステージに向けて次々と新外国人の獲得を進めているのに、ウチは来るはずもないマラドーナの話題がマスコミを賑わしただけでしょう。どうなっちゃってるんだろうって、フロントへの不信感が芽生えてきちゃいましたよ」
>
> （鈴木洋史，1993，Vol．320「レッズに火をつけて。――磨かれざる赤いダイヤモンドが輝く日」）

すなわち外国人の獲得いかんで成績が大きく左右すると考えており、ここに「日本人らしいサッカー」への意欲はみられない。こうした面でも欧州・南米志向は見られる。

一方、外国人への依存には別の背景を指摘することができる。J リーグ開幕に伴い戦力の大幅見直しをはかった各クラブが、非情なまでにベテランを解雇した事にある。

> 北沢豪「キュウさん（加藤久）の退団でしょう。あまりにショックが大きすぎて、まだ冷静になれないよ。うちの若手選手がどれだけキュウさんの影響を受け、多くのことを教わってきたか……。精神的なことも技術的なことも、まだまだ教えてもらうことがいっぱいあったのに……」
>
> （小松成美，1993，Vol．320）
>
> 井原正巳「日本代表でも急にその辺り（30 歳台）の年代の選手がいなくなってしまったし……、やっぱりいて欲しいなという感じはします。チーム（マリノス）でもそう思うときがある。（J リーグの）各チームでもその数は減ってますよね。そういう選手がいてくれると、また別の意味で引き締まることもあるし」
>
> （杉山茂樹，1996，Vol．406）

こうした「W 杯スター － 若手」の構造が、外国人への依存を強めていったと考えられる。

日本人同士でのコミュニケーション能力の欠如については、アトランタ世代の代表格である中田英寿と前園真聖の対談に見られる。

> ――きっちり自分の判断したことを相手に伝えるということを、なかなかしない？
> 中田英寿「うん、あんまりしないね。それで同じ失敗を繰り返しすぎる」
> ――それを改善しようというふうには。
> 中田「いや、改善しようとしているのかどうかわからないけど、同じ失敗が多すぎる」
> ――それがやっぱり途中でキレちゃう一つの要因になってるわけですか。
> 中田「うん、やる気なくなるね」
> 前園真聖「キレるよね」
> 中田「キレるよ。そのうちに自分は何やっていいかわからなくなってくる」
> ――なんとかしようというふうに、みんなで話し合ったりしないんですか。
> 中田「そういう問題じゃないと思うね。もう頭が固まって無理なんだろうね。……自分から声も出さないし、要求も何も出さないし。言ったもの勝ちなんだよ。だって、代表自体、みんなおとなしいもんね。なんていうか、みんなブツブツ系？ブツブツ、ブツブツ言って終わっちゃう、自分で。相手に言わないでね」
>
> （佐藤俊，1998，Vol．440）

中田は、1997 年フランス W 杯アジア最終予選、「ジョホールバルの歓喜」のピッチに立っていた。しかし、出場を決めた瞬間の輪に、中田はいなかった。

結論として、I 期の信頼関係のモデルは第 1 章で示した仮説と同じであることがわかった。輝かしい経歴を持つ外国人選手への高い依存が見られる一方、日本人同士での高い信頼関係に言及する選手はほとんど見られず、中田と前園の対談などからコミュニケーションへの意識が低いことがわかる。

2-3　お金とクラブ

キャリア形成の面であるが、Ⅰ期では J リーグが他の大会との関わりを持っていない。そのため選手のビジョンとしては J リーグ優勝にほぼ絞られるわけである。仮説ではキャリア形成において自律性は他期と比較して相対的に低いものとした。まずは北沢豪のインタビューを検証する。

> **北沢豪「J リーグが参加する 8 チームから誘いがあったんだ。レギュラーを保証する、と言ってくれたところもあったし、今の 2 倍近い契約金を掲示してくれたところもあった。ヴェルディを選んだのは、自分自身への挑戦なんだよ……。自分を甘い環境に置いておくことができない性分なんだよね」**
>
> （小松成美，1993，Vol．320）

契約金が純粋に選手としての能力への評価を示すものなら、選手は自己を高く評価してくれるクラブへ進むはずである。しかし、北澤は契約金に関係なく、ヴェルディというクラブのレベルやブランドに注目している。この背景を、次の前園の発言から分析する。

> **前園真聖「チーム（当時所属していた横浜フリューゲルス）は絶対、簡単に出してくれない。俺がいなくなりゃお客さんだって減るだろうし、チームの人気にも影響が出てくるでしょ。俺がいくら海外に行きたいって言っても、『チームは賛成だ』なんて絶対に思っていないはずだから」**
>
> （佐藤俊，1996，Vol．406）

前園の発言を分析すると、まずクラブと選手の結びつきは強固なものである。これはキャリア形成の仮説モデルに相当する状況である。次に J リーグ優勝、人気の獲得という方向にクラブのビジョンが絞られる結果、「商品」である選手との結びつきは強固になった。契約金が選手の技術としての評価を示すものではなく、人気獲得のためのオークション的なものとなっている。北澤が契約金に関わらずヴェルディを選んだという決断は、今後の移籍に自由がきかない状況、移籍金が能力への評価を純粋に示すものではないという状況から生まれたものであると推測できる。次の前園の発言からも、日本においてお金が必ずしも選手としての価値を示すものではないという彼の意識、そしてクラブとの強い結びつきの存在がわかる。

> **前園真聖「たしかに、今、海外に行けばずいぶん収入も減るだろうね。それは仕方ないよ。日本にいればいくらでもお金は稼げると思う。それでも、海外に行かないと自分の気が済まないんだよ。でも、もしね、サッカー以外でも、今以上のお金が稼げたら転職してもいいなって思ってる（笑）。サッカーはきついし、疲れるし、いつケガするかわからないでしょ。怖いスポーツだからね、サッカーって……」**
>
> （佐藤俊，1996，Vol．400）
>
> **前園真聖「移籍は自分だけの問題で行けるわけじゃないから……。来年はワールドカップの予選もあるし、時期についても考えないといけない」**
>
> （金子達仁，1997，Vol．425）

中田英寿は、そうした日本サッカーの状況に警鐘を鳴らしている点で意識が高い。彼は数多くの J リーグクラブからのオファーに対し「海外からオファーが来たら自分の意志を尊重する」という条件を受け入れたベルマーレ平塚（現・湘南ベルマーレ）に入団した。

> **中田英寿「いまはプロなんだから、評価をしてもらってから高いお金をもらいたい。代表についても、とくに入りたいという希望はありませんね。たとえワールドカップに行けたとしても、そこでボロ負けしたら、まったく評価の対象になりませんからね」**
>
> （李春成，1995，Vol．373「俺たちのここを見てくれ」）

ここまで見た中で、Ⅰ期の仮説モデルに相当する状況が当時の日本サッカーにうかがえることがわかった。クラブが選手（特に日本代表などで活躍する主力選手）との結びつきを強くし、選手たちが自由なキャリア形成を行えていない。

2-4　Ｊリーグへの共鳴

J リーグがハード面で失敗を負ったことは本章の冒頭で説明した。『Number』においても、この問題点が指摘されている。開幕当初は最下位を独走し「お荷物クラブ」と揶揄された浦和レッズだったが、当時のホームスタジアム・駒場は真っ赤に染まったサポーターが浦和に熱い声援を送っていた。

> **Ｊリーグが企業色を排そうとしているのに、レッズの運営会社名は「三菱浦和フットボールクラブ」と、三菱の名を冠している。ならば三菱は積極的に金を出すべきなのだが、残念ながらそういう意志は感じられない。その責任は大きいのではないか。……駒場に足を運ぶたびに、ここがサッカー専用スタジアムでフィールドとスタンドの距離が近ければ、サポーターの声援はアウェーチームにとってより威嚇的になるのに、と残念でならない。**
>
> （鈴木洋史，1993，Vol．320「レッズに火をつけて。――磨かれざる赤いダイヤモンドが輝く日」）

当時から、浦和レッズのサポーターは、400m トラックによる物理的距離に関わらず海外のような地元民によるサポーターが構成されていたことがわかる。チケットも常に入手困難なクラブとして、成績と無関係に人気を維持していた。こうした浦和サポーターの成立の背景は第 4 章で詳しく説明するが、前園も、浦和などのこうしたサポーターの力を感じ取っている。

> **前園真聖「最後に鹿島や浦和と戦って思ったけど、あいつら羨ましかったね。Ｊの人気が落ちたって言ってもサポーターはすごいからね。やっぱりスタジアムの雰囲気とかサポーターの応援ってゲームには欠かせないものでしょ」**
>
> （佐藤俊，1996，Vol．406）

前園真聖にとって、サポーターはプロとしてサッカーをする上で欠かせないものとなっている。同様の思いを北澤豪も抱いている。

> **北沢豪「すべてのプロサッカー選手にとって 5 月 15 日（J リーグ開幕）は忘れられない一日になったんだ。日本にこんな日が来るなんて、つい数年前までは誰も信じていなかったんだからね。ロッカールームまで届いた歓声で、胸が熱くなった。俺でさえも言葉を失うほど興奮していたんだから」**
>
> （小松成美，1993，Vol．320）

このように北澤は、プロとしてサッカーをしてお金がもらえることではなく、プロ化したことで多くの観客がサッカーを見に来てくれていることに強い喜びを見出している。

三浦知良は、そうした J リーグでのサポーターの声援は遠い地でも自分たちの力になっていると強調する。

> **三浦知良「俺たちがゲームをしているとき、日本は深夜だよね（インタビュー時はカタールでアメリカ W 杯アジア最終予選を戦っていた）。こんな夜中にテレビの前で俺たちの応援をしてくれている人が何百万人もいるんだってことを想像したんだよ。胸が熱くなって、ワールドカップというとてつもない夢が、凄く近くに感じられたんだ」**
>
> （小松成美，1993，Vol．327）

スタジアムに詰めかけた観客は、選手の力として明確に意識されている。一方で、当時の「J リーグに共鳴した人」という客層が多かった事実が影響しているのか、こうしたサポーターへの意識が特定の層、

すなわちクラブを応援する地元サポーターや地元住民との関わりを示すエピソードではないことも事実である。人気を博していた浦和レズに所属していた福田正博も、サポーターの強い後押しには勇気づけられるとしながらも、深い関わりを求めようとする明確な意識は見られない。

> 福田（正博）を取材したとき、
> 「国立のジェフ戦でつまらないサッカーをしていたので、レッズのファンになることを保留している」
> と、私が言ったら、
> 福田「まだ保留しておいた方がいいですよ」
> と、力なく笑った。
>
> （鈴木洋史，1993，Vol．320「レッズに火をつけて。――磨かれざる赤いダイヤモンドが輝く日」）

Ⅱ期以降ではサポーターとの深い関わりを示す意識や、関わりを求める意識が高まるが、Ⅰ期では漠然と「サポーターは J リーグの雰囲気づくりに欠かせない」とか「応援は力になる」という意識にとどまっている。「サポーターの応援は力になる」と言った三浦も、別のインタビューではこう語っている。

> 三浦知良「日本の選手って、やっぱりほのぼのやっているでしょう。スタジアムでも和やかなんだ。外国のスタジアムは違うんだよ。僕がブラジルで感じていた、息苦しいくらいの重たい空気とゾクゾクするような殺気立った雰囲気は、日本では到底感じられなかった」
>
> （小松成美，1993，Vol．332）

三浦の二つの発言を通して観客が自分のクラブを応援していようがしていまいが、当時大半を占めていた観客は「ピッチで戦う選手に対しての激励」という意味で声を送っていたことがわかる。つまり「どちらのチームも頑張れ」と両者の健闘を祈る、日本人らしいものである。J リーグに共鳴した人が多数押し掛けたスタジアムでは、そうした満員の観客から送られる「声援」は選手の後押しになったことは間違いないだろう。ただ、それが特定のチームに送られる「応援」ではなく、選手、サポーター同士の「ライバル心」や「緊張感」に発展しなかった。そして選手や地元サポーターとの強い結びつきも生まれなかったものと考えられる。

2-5　人気の先行と準備不足

Ⅰ期における地域のスポーツ文化貢献への意識は、結局は企業主導の色が強かったこの時期において、仮説ではそうした意識が低いものとした。この時期において、選手たちは J リーグが開幕した日本のスポーツ文化をどのように捉えているのか。まず、中山雅史のインタビュー記事を検証する。

> ――大成功を収めた J リーグですが、中山さんはどのような印象を持ちましたか？
> 中山雅史「成功しすぎじゃないのか、というのはありました。人気だけが先行しているんじゃないか、という危惧を抱いた人も多かったんじゃないですか」
>
> （小松成美，1993，Vol．327）

中山は、J リーグ初年度には参加できず、社会人サッカー選手として 1 年を過ごしながら J リーグの盛り上がりを観察していた。そこで見えたのは、新たな理念を掲げ人気の獲得には成功したがその他の面で後れを取っている、という現状だった。

鹿島アントラーズに所属していた黒崎比差支と大野俊三との対談からも、日本サッカーの問題点が見える。

> 黒崎比差支「ある試合でこんなことがあった。ペナルティエリア内で後ろから押されて倒れたのね。それはワザと倒れたように見えるような押され方じゃなかった。レフェリーが笛を吹かないんで、ペナルティ（キック）じゃないの？って聞いたの。そしたら『お前、もっと踏ん張って立

っていろ』ですよ」
大野俊三「要するにワザとコケた、と思われたわけでもないのにね。それにしても、そういう言い方はないよなあ」
黒崎「相手チームがウチよりも格下のときだと、レフェリーが相手のファールを取らないことも多い。何度も言うようだけど、とにかく一貫性のあるジャッジをして欲しいですよね」

（平野史，1993，Vol．392「大野俊三 vs．黒崎比差支『アントラーズサッカーの真髄』」）

つまり、先ほど三浦が語っていたような「弱肉強食」のプロサッカー文化を毛嫌いするような JSL 時代的な文化が残っていることが見て取れる。ここまで、新しい選手と監督の対立、移籍に障壁となる企業利権など種々の問題を取り上げてきたが、ここではレフェリーの問題も浮上する。強者が弱者を圧倒するのを「弱い者いじめ」と捉えるレフェリーの質が選手の闘争心を阻害している。大野と黒崎をインタビューした平野史も「アントラーズに対して妙にきびしいジャッジをするケースが目についた」と語っている。三浦知良も、審判の問題について触れている。

三浦知良「プロという意味では、当然審判の問題も出てくるよ。審判は絶対だよ。だけど、間違うことだってないとは言えない。ブラジルでは、誤ったジャッジをした審判に対しては罰が下される。半年笛が吹けなかったり、一生吹けなかった審判もいた。ジャッジに対する抗議は選手だけが悪いと言われるけど、誤ったジャッジには、選手にレッドやイエローが提示されるように、審判にも裁定が下されるべきだと思う」

（小松成美，1993，Vol．332）

つまり、当時の審判の世界には選手のような生存競争が見られず、こうした不平等なジャッジを引き起こしていると三浦は見ている。

J リーグは企業の莫大な投資によって選手とクラブのプロ化が先行し、その他の面での整備が全く間に合っていない印象を受ける。それはサポーターとの関係の次元における三菱の例からもわかるだろう。プロサッカー選手として満足にプレーできない状況を嘆いている選手が多い。

一方、そうした意識は選手たちが「自分はプロサッカー選手である」という明確な意識改革がなされた結果だろう。前園真聖も、プロサッカー選手という価値、役割の重大さを肌で感じ取っている。

前園真聖「子どもたちへの影響って、俺あまり考えたことないけど、昔マラドーナを見てスゴイって言っていた俺を見て、今の子どもたちはスゴイって言っているわけでしょ。それはなんかスゴイっていうか、結構、責任を感じるよね。うれしいけど。それに、たとえば病気の人とかもいるわけでしょ。そういう人たちが俺のファンで、俺が会いに行ったり、サインしたりするだけでがんばれる気持ちになってくれたりするわけじゃん。そういうことを考えると、俺ってスゴイところにいるんだなって思う」

（佐藤俊，1996，Vol．400）

Ⅰ期におけるサッカー選手は J リーグを含む日本サッカーの問題点に言及する姿勢が全体的に強く、サッカー選手が新しいスポーツ文化を担う職業であるという意識改革が明確になされていることがうかがえる。磯貝洋光のインタビューからも、そうした J リーグのプロサッカー選手としての誇りが垣間見える。その一方で、地域の文化に「貢献したい」という明確な意思表示はあまり見られない。

磯貝洋光は、今は様々な面でプロサッカーリーグとしての整備が為されていないことを感じ取っているが、そうした問題が改善されたとき、選手として文化に貢献したいという意識を持っている。

磯貝洋光「これからいろんな新しい会場も出てくるし、環境も整ってくるし、外人にしても昔はちょっと終わった人がきていたけれども、いまはあと 1、2 年現役でバリバリにやれる選手もだいぶ入ってきているでしょう。そういうのを思うと、この日本という舞台を、セリ A じゃないけど、そういうレベルに近いところで見せたいっていうかね。僕がイタリアに行きたいとかそういう気

持ちよりも、向こうの選手が金だけでなくいろんな意味で『生きたい』と思えるような J リーグにしていきたいなという気はします……。いまは外に行ってサッカーをやるより、そっちの思いの方が強いですね」

（一志治夫，1994，Vol．334）

3　小括

仮説との比較は次の通りである。

能力分析に関しては、特にアトランタ世代の選手には「世界で自分たちの実力を試したい」という強い挑戦目標があり、アジアでの戦いに満足していない。その反面、この目標は「自分の能力は世界で通用する」という意識に必ずしも裏付けされたものではない。ここに第 1 章の仮説との相違が見て取れる。選手たちは自分の能力に関係なく、高い目標を設定している。

この状況から、当時のサッカー選手は「幸福」から遠い状態にあることがわかる。確かに所々でプロサッカーリーグが開幕した喜びや誇り、責任は読み取れた。しかしながら純粋にサッカーを仕事とすることへのそうした意識はあまり見られなかった。他の次元で不満などを漏らす選手が間々見られるのも適合状態からの乖離が影響しているのではないかと推測される。

信頼関係に関してはほぼ仮説と同じモデルを当時の日本サッカーに見出すことができた。当時は外国人選手がチームにとって絶対的な存在となっており、この次元の意識が外国人へ強く働いている。一方、日本人選手との強い信頼関係が認められる発言はほとんど見られなかった。

キャリア形成における自律性に関しても仮説と同様のモデルがうかがえる。J リーグクラブと選手の結びつきが強く、新しいキャリアを形成しにくい状況を嘆く選手の発言も見られた。人気獲得・維持のために高い契約金を設定する姿勢に、当時から一歩先の意識を持っていた中田英寿は警鐘を鳴らしている。

サポーターへの親近感は、ブームに乗り満員の客が入ることを喜びながらも、競技場での彼らの存在がプロサッカーのための「雰囲気づくり」に必要だ、という思いに留まり、親近感に結び付く意識は見られない。熱狂的で欧州的な地元サポーターをいち早く形成した浦和レッズの選手も親近感を抱くには至っていない。

地域文化への貢献に対する意識も低い。企業・親会社の多大な投資によってクラブ、そして選手は純粋にプロ化されたが、他方面で後れをとってしまう。その中で選手たちは「スポーツ文化を振興する存在である」という意識を抱いている選手は多いものの「貢献したい」という意識は見られなかった。

第３章　Ⅱ期：街とクラブとフットボール

1　二つの事件と黄金世代

1998 フランス W 杯後から 2006 ドイツ W 杯までを扱うこの時代は、2 つの「事件」により地域密着のスポーツクラブという J リーグの理念を改めて考え直すことに始まる。本章のタイトルは『Number』464 号の副題を引用したものである。以降で説明する事件を受け、西欧クラブにみられるスポーツクラブをレポートしながら「本当のスポーツクラブとは」という問いを日本サッカーに投げかけている。

1-1　横浜――フリューゲルスと全日空の「暴挙」

第一の事件とは、オリジナル 10 の一員であった横浜フリューゲルスの横浜マリノスへの吸収合併、事実上の「消滅」である。1998 年、フリューゲルスの親会社のひとつであった佐藤工業の経営不振（のちに経営破綻）により、もうひとつの親会社である全日空が佐藤工業に代わるビジネスパートナーを探し始めた。その行き着いた先のパートナーが横浜マリノスの親会社の日産自動車であり、それはマリノスとの合併を意味していた。

問題だったのは、フリューゲルス、マリノスのそれぞれの親会社である全日空と日産自動車の協議が、サポーターの目の行き届かない水面下で行われていたこと、そして合併相手がよりによって同じ横浜市にホームタウンを置くライバルチームであることだった。しかし全日空とフリューゲルスのクラブ関係者の、ファンや選手への悪質な裏切り行為はこれだけにとどまらなかった。ある土曜日のフリューゲルスホーム戦で競技場にクラブの歴史をふりかえるビデオ映像を流し、お涙頂戴のエンターテインメントに利用したのである。サポーターからの嘆願も全日空の関係者は聞き流して同じ答えを繰り返すばかりか、「君たちがもっとスタジアムに足を運べばこんなことにならなかった」などと言って返したのである。

合併発表後、横浜フリューゲルスは残していたリーグ戦・天皇杯で 1 度も負けることがなかった。1999 年 1 月 1 日、クラブ史上 2 度目のタイトルとなる天皇杯制覇を果たしてフリューゲルスはクラブの歴史に終止符を打った。しかしその祝賀会会場となったホテルに、今まで選手たちが顔も見たこともない全日空の重役が出席し、まるで自分たちはなにも間違ったことをしていないとアピールするように選手たちを拍手の輪で迎えたのである。彼ら関係者の一連の行動に激怒した山口は選手たちを引き連れ、彼らと別の部屋で優勝の喜びを分かち合ったのである。

モフェット（Moffett，2002）は一連の合併騒動を以下のように分析する。当時の日本の厳しい経済状況の中で、多くの企業は様々な方策の転換を迫られていた。日産自動車はバブル期に数多くの工場を建設したものの、やがて自動車が売れない時代が訪れる。1998 年には赤字を計上し、東京の中心にあった本社ビルを売却。そして資金を注入する新たなパートナーとして、フランスのルノー社と提携を結んだ。このケースが他の様々な業界にも広がって、とくに資金の減少に悩みながら顧客の拡大に腐心していた銀行や証券会社で頻発した。このように自動車会社が提携を結び、銀行が合併を繰り返す時代に、サッカーが同じことをやってはいけないという理由はなかった。しかしフリューゲルスの決断、そして全日空の行為は、サポーターを裏切る「暴挙」そのものであった。

1999 年シーズン、フリューゲルス存続を願うサポーターによって「横浜 FC」が設立された。フリューゲルスの商標が F・マリノスにあったことで新しい横浜フリューゲルスの設立には至らなかった（F はフリューゲルスの意味）。横浜 FC を創立させるにあたって重要な決定事項がひとつあった。それは、解散を決定できるのはサポーターたちだけである、ということだった。そして、スペインのビッグクラブである FC バルセロナが採り入れている「ソシオ」――サポーターによるクラブへの資金支援制度をモデルに「ソシオ・フリエスタ」（フリエのソシオ。フリエとはフリューゲルスの愛称）を設立。シーズンチ

ケットを販売しクラブ資金に充て、会員は運営アシスタントやクラブ上層部との意見交換会に出席できるなどの見返りがあり、クラブとサポーターとの繋がりを明確にした。横浜 FC は「市民クラブ版横浜フリューゲルス」として新たに生まれ変わったのである。初年度に元西ドイツ代表であるピエール・リトバルスキーを監督に招き、特例で参加した JFL で優勝。2000 年に J リーグ正会員となり JFL 無敗優勝を達成。2001 年に J2 昇格を果たした。現在は J2 で 12 年目のシーズンを迎える。

1-2　川崎――ヴェルディと読売の裏切り、フロンターレの登場

第二の事件は 1999 年シーズン終了後に起こった。J リーグブームを支えたかつての「エリート集団」ヴェルディ川崎の本拠地東京移転、つまり「東京ヴェルディ」となることが受理されたのである。

もともと前身である読売サッカークラブは、J リーグクラブになるにあたり東京を本拠地とすることを望んでいた。しかし東京に J リーグ開催に見合うスタジアムが見当たらず、不本意ながら川崎で「ヴェルディ」を始動させた。1993 年シーズン終了後、一旦は東京移転を申請するものの、ホームタウンの理念を壊すとして即座に却下されるが、読売は川崎市に何の敬意も払っていなかったといえる（Moffett, 2002）。J リーグ熱に陰りが見え始め、J 屈指の人気クラブだった川崎のホームゲームでも空席が目立つようになった 1999 年、読売は再び東京移転を申請したのである。J リーグ側は最終的に 2001 年からの移転を了承した。同じ 1999 年に J2 が開設されたのと同時に川崎フロンターレが誕生していたこと、観客減少の現状などが憂慮されてのことだろうが、当時ヴェルディのサポーター集団「川崎ハーツ」のリーダーである太田綱吉は、自分の街への裏切り行為に激怒し、川崎フロンターレのサポーターになった。現在、かつての川崎と今の川崎の立場は逆転。フロンターレは ACL 出場も経験する J1 の強豪となったが、ヴェルディは近年経営難に苦しんでおり、一時期はクラブ消滅寸前まで追い込まれている。

2-1　「海外組」の登場

この時期から、海外でプレーする「海外組」と呼ばれる選手が多くなる。1999 ワールドユース準優勝、2000 シドニー五輪ベスト 8、コンフェデ杯 2001・日韓大会準優勝、2002 日韓 W 杯ベスト 16……と、日本代表が世界で特筆すべき戦績を残すようになり、日本サッカーへの世界の関心が高まった。中田英寿は 1998 年にイタリアの AC ペルージャ（現ペルージャ・カルチョ）に移籍し、引退する 2006 年までビッグクラブである AS ローマやパルマなどを渡り歩いた。1998 フランス W 杯では海外クラブ所属者が 0 だったが、2002 日韓 W 杯は中田英寿と小野伸二の 2 名、2006 ドイツ W 杯には中田英寿、中田浩二、高原直泰、中村俊輔、大黒将志、稲本潤一の 6 名が海外組だった。

第 80 回全国高等学校サッカー選手権大会（2002）でのキャッチフレーズは「待ってろ、世界。」だった。高校生の「青春」をイメージするキャッチフレーズが続いてきた中で、このキャッチフレーズの登場はプロへの登竜門という位置付けを明確にしただけでなく、日本サッカー全体が世界基準で動き出したことを反映している。

日本サッカーにおいて「世界」というとき、この語は「欧州」（もしくは「欧州・南米」）という意味しか含まれていなかった。日本がいる「アジア」は日本が目指す「世界」ではなかった。2002 年に W 杯を共催した韓国は日本最大の好敵手であるが、しかし韓国は「アジア」であって日本が目指す「世界」には含まれていない。「脱亜入欧」の精神で 1860 年以降、急激な近代化を遂げ、アジア軽視が依然根強く基調としてある（佐山，1998）日本では、サッカーにおいても「世界」との戦いが多くなるとアジア軽視は顕著なものとなった。アジア杯では 2000 レバノン大会では圧倒的なパフォーマンスで優勝し、2004 中国大会では当時の情勢から地元中国サポーターからの過剰な反日行為に苦しみながら、試合を重ねるごとにチームは勢いを増し、決勝戦で地元中国を 3-1 で退け大会 2 連覇を達成、アジアでの地位を確固たるものにした。

2-2　黄金世代

1998 年から 2006 年までの日本サッカーは、いわゆる「黄金世代」と呼ばれる選手たちに代表されていた。そもそも「黄金世代」とは、特定の分野において比較的狭い年齢層に突出した才能を持つ人材が集中することを指す言葉である golden generation の和訳である。日本サッカーにおける黄金世代は「79 年組」とも呼ばれ、1994 年に開催された U-16 アジアユース選手権カタール大会の優勝メンバーでもあ

る小野伸二、稲本潤一、高原直泰、永井雄一郎、酒井友之、播戸竜二、辻本茂輝、手島和希、本山雅志らに代表される 1979 年度生まれの選手たちを指す。彼らは 1999 年の U-20 ワールドユースで準優勝に輝き、その後のシドニー五輪や日韓 W 杯、ドイツ W 杯で主軸として活躍した。

彼ら「黄金世代」がプロになる道程を探るとき、彼らはサッカーのキャリアを重ねる中で 2 つのブームに大きく影響を受けていたことが見えてくる。第一に、一般にサッカーを始める時期が小学校低学年とすれば、彼ら黄金世代の小学校時代と大きく関係してくるのが、1981 年に『週刊少年ジャンプ』（集英社）で連載された「キャプテン翼」のブームである。世界と互角以上に戦う日本人「大空翼」「日向小次郎」といった登場人物は当時の少年たちの憧れとなった。アニメ（83 年～86 年放送）ではテレビ東京のアニメ最高視聴率 21．2%を記録し、その記録は今も破られていない。

第二に、黄金世代が具体的に進路を考える時期にある中学生時代に J リーグが開幕したことである。前章で述べたように、当時は J リーグが一大ブームとなり、ダフ屋が行為横行するほどチケットにプレミアが付き、毎試合満員の中で行われていた。当時の J リーグがみせた「華やか」さが、多くのサッカー少年に憧れを抱かせたことは間違いない。

3　Ⅱ期におけるプロフェッショナリズムの検証

3-1　世界志向

Ⅱ期における能力分析の仮説では、フランス W 杯で世界への扉を開いたことで挑戦目標は「世界でも勝てるようになる」という意志になるとした。

この時期、静岡県磐田市に本拠地を置くジュビロ磐田が全盛期を迎えていた。当時の中盤の軸を担った名波浩は、ジュビロについてこう語っている。

> **名波浩「正直に言えば、このチームで、ヨーロッパのどこかのリーグを戦ってみたいという気持ちはあります。スペインとかイタリアとかイングランドじゃなくて、ポルトガルとかフランスとかがいいですよね」**
>
> （佐藤俊，1999，Vol．467）

名波は、ヨーロッパのリーグでも自分もジュビロも戦えるということを公言している。ただ、彼が戦いたいリーグとして挙げた「ポルトガルとかフランス」が「スペインとかイタリアとかイングランド」のような世界のトップリーグでないことから、単なる憧れからの発言ではなく自己能力と海外リーグのレベルに関する高い分析に裏打ちされたものである。

遠藤保仁は 2003 コンフェデ杯・ニュージーランド戦を振り返ってこう述べている。

> **……遠藤のシンプルなプレーは欧州組に交じっても目を引いた。彼がいたから中田も中村も攻撃に力を発揮できたのだ。だが、3-0 という結果とは裏腹に、遠藤は「楽しくなかった」と唇を噛み、珍しく眉間に深い皺を寄せた。**
> **遠藤保仁「ニュージーランドは、たぶん J リーグ以下のチームだね。ちょっとゆる過ぎだよ。やってて勝って当たり前って感じがしたもん。まぁ勝ち点 3 が取れたことはいいことだし、それが一番だと思うけど……。それだけって感じだし……」**
> **――どういう部分で？**
> **遠藤「ありえないパスミスを 2 本やったから。あれを強いチームの時にやったら簡単にカウンターにもっていかれて失点喰らう。……絶対にフランス戦ではやっちゃいけないし、やったらやられる。あとは、ほんとゴールだけっすね」**
> **――フランス戦で、だね。**
> **遠藤「取りたいけど……まぁ頑張ります」**
>
> （佐藤俊，2003，Vol．579）

遠藤の頭の中では試合中すでにフランス戦での自分が意識されていた。欧州以外を相手にしての大勝

の喜びよりも、欧州以外のチームとの戦いでミスが出たことの悔しさをあらわにしている。そして、それは待望するフランス戦への危機感からくるものである。
このように、日本のサッカー選手は内容や結果について「欧州との対戦」をイメージして考察することが多い。この点、脱亜入欧的な当時の風潮を反映したものである。
この時期にはベテランの域に達していた秋田豊の発言から、日本サッカーの主軸を担う世代の選手たちのレベルが急激に変化していることがわかる。彼の話から、メディアの影響が選手の実力に転換されるようになったことが伺える。

> **秋田豊「本当に巧い。話にならないくらい巧いし速い。駆け引きからボールコントロール、格段に違う。やっぱりヨーロッパや南米のサッカーが10年前に比べて身近になってきたからだと思う。僕たちの世代は、海外の選手をW杯とかでしか見れないし、それも毎日のように見ることができなかった。でも今の選手は、子どもの頃からテレビでジーコやピクシーのプレーを観てましたって子たちでしょ。だから（小笠原）満男とか本山（雅志）とか（中田）浩二とか、ああいう選手が生まれてくるんだと思う。…」**
>
> （乙武洋匡，2002，Vol．564）

全体として欧州のサッカーを基準として自己の技術に対して分析をする傾向がある。これはⅠ期と比較して分析力の高さを伺うことができる。
一方で、柳沢敦のインタビューから、メディアがより高い結果を求めていることがわかり、その姿勢に違和感を覚えている。彼はインタビューの中で、「いい状況判断と、質のいい動きが、僕の中での永遠のテーマ」としており、得点に対する執着はあまり見られない。そうしたプレースタイルに柳沢は自信を持ちながら、勝利のための得点を期待するメディアの批判を買うことになる。

> **柳沢敦「……ある程度の自己満足……、ジコマンの世界がないとやってられないから。誰も褒めてくれなかったプレーだけど、自分のなかでは『アレはいいプレーだったな』と思うと、家に帰って何度もビデオを見返して、一人でニヤついてたり（笑）。僕の中では、いいプレーも沢山あるんですよ」**
> **――でも、解説者やマスコミなど周囲にはわかってもらえないことが多い。**
> **柳沢「沢山ありますね。僕の性格についても同様ですが、解説者やマスコミの言葉の多くが正しいものとされ、イメージになりますよね。例えば『柳沢はなんで強引に行かないんだ？』と一言話されただけで、多くの人やマスコミに、『なんで柳沢は！』と思われてしまうでしょう。残念な場合も多いんですよ」**
>
> （小崎貴紀，2000，Vol．504）

自己評価が周囲の評価と合致しないため、柳沢は「ジコマンの世界」を内面化することになる。つまり内容を正当に評価しない周囲との隔離を図ろうとしている。
小野伸二は、メディアとの温度差に憤りを感じているという点で柳沢と同じである。

> **小野伸二「……（当時は自信を持って試合に臨める状態じゃなかったのに）周囲の人は五輪だ、完全復活だ、とか言うでしょ。普通に考えれば、僕はまだそういう問題じゃないっていうのは、すぐに分かることなんだけど……。だから、すごくイライラしたし、静かにしてほしいなって思っていた。当然、五輪への気持ちも冷めていきましたね。……自分がシドニーに出る気持ちになるには時間が少し足りないなって思っていた。そう思っていたから、なおさらシドニー、シドニーって騒がれるのがイヤだったんです」**
>
> （佐藤俊，2000，Vol．492）

このように、Ⅱ期ではサッカー選手がメディアから自己を隔離するようになる。それは、数字上の結果を求めるあまり内容を軽視する傾向にあったメディアと温度差が生じたためであるが、逆に選手はこ

うした要求に惑わされず、選手としての確かな自己分析能力を有していることも理解できる。
挑戦目標と能力との適合性で言えば、選手の意識に高い世界志向が見られるものの、その傾向は自己分析の裏付けも見られ、その意味でⅠ期と比較して分析力が高いことがわかる。

3-2　日本人を軸としたサッカー

次に、クラブへの準拠、信頼関係に関するプロフェッショナリズムを検証する。クラブにおける外国人選手がカリスマ的ではなく「助っ人」という位置付けに変化していくこの時期では、日本人の選手同士の信頼関係が成熟していく、とする仮説モデルをたてた。黒部光昭は、日本人を軸としたチームを思い描き、チームとしてのまとまりを重視している。

> **黒部光昭「……多くの外国人は移籍するから、それが中心になってしまうと愛着を抱けるチームになれないと思う。それにジュビロみたいに、外国人に頼らなくても勝つチームもある。僕たち（京都パープルサンガ）は個々の能力では劣っているかもしれないけど、まとまりでは負けない自信がある。いまの若いチームがそのまま成熟していったら、すごいチームになるのは間違いないと思う。」**
>
> （熊崎敬，2003，Vol．572）

黒部は、日本人選手が軸となることで、クラブに愛着を抱けるようになり、チームワークも強みとなって良いチームに進化する、と説明している。日本人選手としてのプライドと、選手相互の結びつきが強くなったことがわかる。三浦淳宏もチームメイトとの結びつきを「ハートの繋がり」と表現し、結びつきを大事にしている。川口能活も、チーム内の信頼関係の構築に目を向けるようになったと語る。

> **三浦淳宏「プレーでうまく力を出せるようになるには、一緒に食事に行ったりすることも必要だと思う。……スポーツ選手にはハートのつながりとか人間関係が必要だから、そっちのほうでボクはチームの力になっていきたい。もちろん、プレーでも思ったことははっきり言いますけどね」**
>
> （戸塚啓，1999，Vol．467）
>
> **川口能活「自分に取り組むべき課題がある。チームにもある。そしたら今年は、まずチームのために動く。去年も同じように考えてたんだけど、今年は頭のなかだけじゃなく実践したいんですよ」**
>
> （戸塚啓，1999，Vol．467）

先程、柳沢はメディアとの温度差から「ジコマンの世界」を築いたことを紹介した。それには続きがあり、こうした中で内容の評価を同僚に求めるようになるのである。

> **柳沢敦「それはもう！！身近な人たちに、僕のいい部分を認めてもらえているのが大きいし、自信につながっています。**
> **　そして、アントラーズという環境。これまでのすべての監督、コーチ、選手そしてサポーターが僕の性格やプレーを理解してくれている。僕にとっての本当の強みですよ」**
>
> （小崎貴紀，2000，Vol．504）

このように、サッカー選手はチームメイトについて内容を評価しあえる仲間として価値を見出していったのである。結果ではなく、内容を吟味して互いを評価する意識は、以下の 2 人の FW についての中村俊輔の発言にもあらわれている。

> **中村俊輔「タカ（高原直泰）はシュートチャンスはないけど動いてスペースを空けてくれるし、大久保もよく動いて守備をしてくれる。だから、前に飛び込めるし、俺もいい状態でボールが持てるんだよ」**
>
> （佐藤俊，2003，Vol．579）

FW はとくに結果が求められるポジションであるが、中村は内容の面で高原と大久保を評価している。内容を評価し合って信頼関係を高める必要性が高まったことを表している。

このように、サッカー選手の信頼関係が高まった背景に外国人選手の位置付けの変化が挙げられる。そしてその信頼関係は、選手の能力を認め合う上で成り立つという意味合いが強い。

3-3　勝負強さのルーツ

次にキャリア形成における自律性に関するプロフェッショナリズムを検証する。

Ⅱ期では、2003 年に ACL が開幕するが、まだアジアにとって名誉ある大会ではなかった。一方、J2 の開幕にともない、それまで J リーグの醍醐味が優勝争いのみだった状態から、残留争いや昇格争いにも焦点があてられるようになる。試合の緊張感や選手のモチベーションは全体としてⅠ期よりも高い状態にある。仮説では選手の自律性としてはⅠ期と同じか、Ⅰ期と比較して少し高いものとした。

小笠原満男は、名門である鹿島アントラーズへの入団を果たしたが、その理由を以下のように述べている。

> **小笠原満男「強いチームで出れればアピール度もちがうと思うんですよ。下位チームで出ても、あんまり注目されないっていうか、正直言ってアントラーズでレギュラーをとるってことは代表に繋がるとは思います」**
>
> （小齋秀樹，1999，Vol．467「U-20、アントラーズ組『明日を信じて』」）

つまり、代表入りという目標はあるものの、試合の出場を重視しているのではなく、競争の激しい強豪チームでの経験を勝ち抜いて代表入りを目指すという考えを持っている。ここにⅠ期で見た北沢豪の考え方との類似が認められる。

当時同じく鹿島に在籍した中田浩二も、鹿島入りの理由を話している。

> **中田浩二「純粋に上手くなりたいなって思って。それならうまい人がいるところでやればお手本がたくさんありますから、そこで勉強していけばいいって思ったんです。たしかに試合に出れば経験は積めますけど、ただ、今の自分のプレーをそのままやるだけっていうか、何も変わらないような気がするんですよ」**
>
> （小齋秀樹，1999，Vol．467「U-20、アントラーズ組『明日を信じて』」）

小笠原や中田浩二の発言から、高いレベルでのプレーを求める意識が強いことが分かる。その反面、試合出場への意欲という面で考えると、そうした欲求はⅠ期と比較して低いものである。秋田豊は、J リーグ初期と比較して選手の試合への意欲が低いという変化を感じとっている。

> **秋田豊「今ね、そういう（何でも試合に出てやるっていう）選手が少ないよ。ゴンちゃん（中山雅史）なんか、いまだにギラギラしてるけど（笑）、若い子は本当に物足りない。高校時代に全国優勝を経験してる金古や羽田、彼らはもちろんいい選手だけどギラギラさがない。彼らには、いつもこう言うんだ。『そんなんじゃセンターバックはできない。もっと相手に嫌がられるような選手にならないと。チームの中でも、俺を引きずり下ろしてでも試合に出る、という気持ちでやらないとダメだ』って。……」**
>
> （乙武洋匡，2002，Vol．564）

あえて厳しい環境に自分の身を置いて技術の向上を目指すという姿勢は、海外移籍の実現に表れ、Ⅰ期では 0 だった「海外組」が増えていく。海外移籍に関する選手の価値観として、中山雅史はインタビューで当時イタリアでプレーしていた中田英寿との会話を想起して、以下のように語っている。

> **中山雅史「ひとつ言っておきたいのは、海外移籍に失敗なんてないということです。移籍を疑問視するような記事をみたこともありますが、そもそも言葉も環境も全て違うところで順応するの**

は本当に大変なことだと思いますよ。……（中略）試合に出られないと精神的にキツクなることもあるだろう。でもそこで自信を持って踏ん張って、挑戦して何でもいいから得ればいい。…
ヒデは言うんですよ。もし海外でって思うんだったら、外に出ることが先にありきだよ、ってね。レベルとか云々の話は二の次で、スペイン、イングランド、イタリアが移籍先のすべてじゃない、どこだってあるだろう。スイスもあるしオーストリアもある。でもそういう所で始めて挑戦しなければ上（日本代表）に這い上がっていけないんだとね。自分のことに置き換えて考えていますよ」

（増島みどり，2001，Vol．529）

この時代のサッカー選手のキャリア形成において、Ⅰ期と比較して「挑戦」への意識が高まっていることがわかる。アピールするために試合に出場できる環境を求めるのではなく、厳しい環境の中に身を投じて身近なハードルを飛び続けながら、質の高いプロとしての自己を形成したいという自律的な意思がみられる。こうした意識を持つ日本人選手には強い「自信」が芽生えている、ということが川口能活動のインタビューから伺える。

川口能活「今の（日本代表）チームは、窮地に立たされると集団としての力が増すんですよ。だから周りから『日本、やばいんじゃないの？』とか言われるぐらいのほうが、『やってやる』って気持ちが前面に出ていいんじゃないかな」

（戸塚啓，2005，Vol．618「川口能活 楢崎正剛『ライバルとして、友として』」）

2004 中国アジア杯に代表される当時の日本代表の「勝負強さ」は、こうした挑戦への意欲が強い選手により生まれたものと推察することができる。しかしながら、当時も海外への移籍は以降の時期と比較してもなかなか実現されていない。移籍に際してⅠ期にみられたクラブとの強い結びつきが存在し、依然として高い挑戦への意欲を実現する環境が整備されていないことが推察される。

3-4　カミーザ・ドーゼ

「カミーザ・ドーゼ」とはポルトガル語で Camisa 12＝「12 番目のシャツ」、つまり 12 番目の選手としてのサポーターを指す。[図 3-1] は、J リーグクラブにおける試合会場の変遷を示している。選手のサポーターへの親近感、つまり両者の社会的距離は物理的距離が転換されたものと仮定しているが、日韓 W 杯前後にかけてサッカー専用スタジアムが着々と完成し、プロサッカーたる試合環境が増えたⅡ期においては、そうしたサポーターへの親近感は強まるものと考えられる。[表 3-2] からもわかるように、Ⅱ期は背番号 12 の「サポーターズメンバー化」、つまりサポーターのための番号とする動きが進み、サポーターの価値が確立された時期であった。例えば秋田豊は、サポーターが自分たちを多様な側面から支える大切な存在であることに言及している。

秋田豊「サポーターの人々と付き合って行く上で、……彼らがグラウンドに見に来てくれて、そのお金が自分のサラリーになることがわかっていれば、感謝の気持ちが沸いてくるのは当たり前のこと。……近所の人とか、地域社会の様々な場面でつながりが出てくる。すると、自分も何か恩返しをしなければと謙虚になって、自然と（試合後には勝敗に関わらず）頭を下げるようになっていく」

（乙武洋匡，2002，Vol．564）

つまり、サポーターは試合の雰囲気を作るだけでなく、クラブを純粋に応援し、金銭やプライベートでの人間関係といった生活のレベルで選手を支えており、秋田はそれに「恩返し」をしたいという意志を示している。ここに、サッカー選手とサポーターが「支え合い」を重視していることがわかる。
同様に、三浦知良もヴィッセル神戸所属時代にこのように語っている。

三浦知良「昨日なんかでも、神戸を歩いてて、たぶん熱狂的な人だと思うんだけど、白い前掛け

		Ⅰ期 1993	Ⅱ期 1998	Ⅲ期 2006	Ⅳ期 2010
★	札　幌			札幌ド	
☆!	仙　台			仙台ス	
	山　形				
★	鹿　島	カシマ			
	水　戸				
	栃　木				栃木グ
	草　津				
★	浦　和			埼玉ス	
	大　宮		大宮公		
	千　葉			蘇我球	
	柏		日立柏		
	F 東京			東京ス	
	東京 V			東京ス	
	町　田				
	川　崎				
☆	横浜 M	三ツ沢			
	横浜 C			三ツ沢	
	湘　南				
	甲　府				
	松　本				松本平

		Ⅰ期 1993	Ⅱ期 1998	Ⅲ期 2006	Ⅳ期 2010
☆	新　潟			☆	
	富　山				
☆!	清　水	日本平			
☆!	磐　田	ヤマハ			
	名古屋			豊田ス	
	岐　阜				
	京　都		構想頓挫		
	G 大阪	建設中			
☆	C 大阪		☆		長居球
★	神　戸			御崎公	
	鳥　取				鳥取サ
	岡　山				
	広　島	構想案有			
	徳　島				
	愛　媛				
	福　岡			東平尾	
	北九州				
	鳥　栖		鳥栖ス		
	熊　本				
☆	大　分			☆	

■球技専用スタジアム登録　陸上競技場のみ登録　□Jリーグ未加盟

図 3-1　Jリーグクラブの球技専用競技場登録状況の変遷

各クラブ公式 HP などを基に作成

★　日韓 W 杯で使用された球技専用スタジアムを本拠地に構えるクラブ

☆　日韓 W 杯で使用された陸上競技場を本拠地に構えるクラブ

☆!　日韓 W 杯で使用された陸上競技場を本拠地に有しながら、ホームスタジアムとして登録していないクラブ

を着けた板前さんのような人が、ずっと追いかけてきて、『来年もサッカー続けてくれるんですかね』って握手を求めてきた。そういう熱い人に出会うと嬉しいし、そういう人たちに励まされてこれまでやってこれたっていうのがすごくいいなっていまは思えるんです」

（一志治夫，2002，Vol．564）

また三浦は、先程の秋田に見られた「恩返し」の意識を持っており、対等な立場でサポーターとの結びつきを高めようとしている。

三浦知良「『どういうふうにチームを強くするのか。神戸をどうやって知ってもらうのか。どうやってお客さんを集めるのか』って。……僕は言った。『もしかして今年、前期優勝するかもしれない。でもこのままだと、そのとき一瞬盛り上がって、それで終わりですよ。そうならないためには、もっと市民と関わらなければいけない。選手ひとりひとりが地域に貢献し、ヴィッセルは市民と深く関わって存在しているのだということを分かってもらえれば、愛してもらえる。そういうクラブになっていかなければいけない』と。…」

（三浦知良，2003，Vol．572）

このように、サッカー選手はサポーターとの対等な関係を築こうとしている。とくに当時の秋田、三浦が所属していた鹿島アントラーズ、ヴィッセル神戸がサッカー専用スタジアムを本拠地とするクラブ

なので［図 3-1］、その意識が顕著にあらわれているものと考えられる。

3-5　「楽しませる」場への欲求

Ⅱ期は自動車工業全体の不振（浦和レッズの親会社であった三菱では当時リコール問題も起こっていた）や、全日空、佐藤工業の営業不振からのクラブ吸収合併、さらに読売によるヴェルディ東京移転など、J リーグ初期の爆発的人気を支えた親会社の問題が深刻化し、サポーターの地位が高まる時期でもある。そのため、仮説では選手が文化への貢献で担う部分は大きくなり、意識も高まるものとした。

中田英寿は、1998 年から 2005 年にかけて勝利至上主義といわれるイタリアで名門クラブを渡り歩いたが、その環境の中でもサッカーに対するピュアな欲求を失くしていない。

> 中田英寿「きれいなサッカーをやりたいんです」
>
> 今回のインタビューで、個人的にこの発言が一番印象に残っている。勝利至上主義のイタリアで 7 シーズン、ある意味ピュアな部分がすり減っていないことに少々驚いたし、そこに共感も覚えた。
>
> プロサッカー、特にセリエ A でのプレーは PLAY というより過酷な WORK（労働）である。その中で奮闘する彼が、なおプレーを楽しみたい、文字通り PLAY したいという欲求を維持している。
>
> （西部謙司，2005，Vol．618）

そうした「きれいなサッカーをやりたい」という思いを強く持つ中田は、日本のスポーツ、サッカー文化の更なる発展のために、ある提案をしている。

TEAM	背番号「12」着用者	
	1999	2006
鹿　島	サポーター（1999～）	
浦　和	渡 辺 敦 夫	三上卓哉
大　宮	佐 藤 太 一	サポーター（2004～）
市　原	立 石 智 紀	サポーター（2004～）
柏	酒 井 直 樹	サポーター（2006～）
F 東京	梅　山　修	サポーター（2002～）
川　崎	桂　秀　樹	サポーター（2002～）
横浜 F	波 戸 康 広	サポーター（2003～）
甲　府	土橋宏由樹	サポーター（2002～）
新　潟	中野圭一郎	サポーター（2004～）
清　水	ファビーニョ	サポーター（2003～）
磐　田	大 神 友 明	サポーター（2006～）
名古屋	喜 名 哲 裕	サポーター（2000～）
京　都	仁田尾博幸	サポーター（2003～）
G 大阪	サポーター（1999～）	
C 大阪	眞 中 靖 夫	サポーター（2002～）
広　島	菊 池 利 三	サポーター（2001～）
福　岡	藤 崎 義 孝	サポーター（2004～）
大　分	山 崎 哲 也	サポーター（2002～）

図 3-2　背番号「12」の系譜

参照：Wikipedia

2006 シーズンの J1 所属 18 クラブで検証。浦和レッズを除く全クラブでⅡ期における 12 番のサポーターズナンバー化がなされていた

> ――ここフィレンツェに来る前に、実はマドリッドで、当初中田さんも出場予定だったジダン・フレンズ対ロナウド・フレンズ戦、貧困撲滅のチャリティマッチを見てきたんです。（ジダンとは当時のフランス代表 MF であり、ロナウドとは当時のブラジル代表 FW である。当時、2 選手ともにスペインのレアル・マドリード CF 所属）
>
> 中田英寿「僕も呼ばれてたんですけどね。チーム（当時所属していたフィオレンティーナ）が許してくれなくてホント残念でした。ああいう試合はプレッシャーも少ないし、やっぱり『魅せる』ことが大事だから、リスクを負ったプレーにチャレンジできる。ドリブルでガーッというようなのはナシで、とにかくワンタッチ、ツータッチで速いパス回しをする」
>
> ――激しさはないけれど、選手にも参加する楽しみがあって。そういうエッセンスがもっと日常の試合にあってもいいかもしれない。
>
> 中田「そうなんですよ。そういうことを選手も監督も、もう少し考えたほうがいいんじゃないかな。この前、新潟でやってましたけど、日本ではチャリティマッチってまだまだ少ないですよね。こっちにいると、みんなが普段からチャリティを意識していて身近なんです。ああいうのが頻繁にあったら、もう少しサッカーが日本に文化として定着していくんじゃないかな、と思います」
>
> （西部謙司，2005，Vol．618）

中田が提案しているチャリティマッチとは、戦術や勝敗に束縛されない、純粋に観客を楽しませることを目的とした慈善試合のことである。中田が普段から思っている「きれいなサッカー」を具現化する

ための方法としてチャリティマッチがあり、それを日本国内でも普及させることでサッカーが文化として定着するのではないかと語っている。

「チャリティマッチ」というような具体的な提案をしている選手は、この時期では他に見受けられないが、中田のように「楽しむサッカー」への渇望を言葉に出す選手は多い。

> 小野伸二「入団当時と昨年（1999 年）とじゃ全然違う。何が違うかっていうと、今は本当に心からサッカーを好きになっていない。今も嫌いじゃないし、楽しい。でも前は、相手の嫌なところとか、いろんなことを考えてパス出したり、楽しくプレーしていたけど、今は普通にただパスを出して、淡々とやっている」
>
> （佐藤俊，2002，Vol．550）
>
> 松井大輔「J リーグの 1、2 年目、監督のゲルトから速くパス出せって言われ続けましたが、その意味がわからんかった。俺は頑張ってんねん、ボール持って頑張ってんねん思うだけで……」
> ――限界を感じたことはある？
> 松井大輔「限界ってなんなのか……。僕は普通にサッカーを楽しみたいだけで、何が限界なのかわからない」
>
> （熊崎敬，2003，Vol．572）
>
> プロ入り当初、「好きなサッカーで生活できるのは、本当に幸せ。何があっても、辛いとか大変とか感じることもないし、楽しい」と語っていた柳沢に、敢えて同じ質問を繰り返した。そうした状況下（ポストプレイ、つまりゴール前で味方の得点に直接結びつけるような動きで大きく貢献をしながら、ゴールへの意欲が足りない FW、というレッテルを貼り付けられていた）、今もサッカーが楽しいか？と。
> 柳沢敦「ウーン、楽しいです……よ？まあ、楽しいときのほうが少なくなっているけれど。自分のプレーがうまくいって、チームが勝ってくれたら、『こんな幸せな商売なんてない。最高だよな』って思いますもん。でも、辛いほうが多いですね（笑）」
>
> （小崎貴紀，2000，Vol．504）

このように、中田英寿の「チャリティマッチ」の提案をはじめ、サッカー選手が「楽しませる」ための場を強く求めている傾向がわかる。また、ここまでの発言を検証する中で、日本人選手がプロとしての技術的側面に「楽しませる」だけの能力を持ち合わせているという自信があることがうかがえる。中田が日本国内でチャリティマッチの普及を提案したことも、日本の選手個々の技術がチャリティーマッチで観客を感動させるだけのものを有しているという自信の表れであり、小野、柳沢、松井の発言に関しても、評価されるだけの技術力、サッカー文化を深く根付かせるためのスキルを持っているというアピールを内包していると見ることができる。

3-6　サッカーは愛せないのか

仮説上、楽しみや愛情に関するプロフェッショナリズムは能力分析の次元と大きく関わっている。Ⅱ期では自己分析の能力がⅠ期に比べて高まり、挑戦目標と自己能力の位置関係が近いことがわかっている。そのため、Ⅰ期と比較して幸福に近い状態にあることが考えられるが、藤田俊哉のインタビューを検証すると、それとは異なる様相をうかがうことができる。

> 藤田俊哉「好きなサッカーが仕事になって、どこがつらいの？」と言ってきましたし、サッカーをしているときがいちばん楽しいから、いつも色紙に何か書いてくださいとお願いされると＜ケガなくフル出場＞と書いてきました。……でも、僕は本心を口にしていて、実際サッカー選手はみんなそういうものだろうと思っていたのに、「嘘言うなよ、おまえ。つらくねえわけねえだろう」って言われたりして、あまり理解されなかった。どうして、この人たちは苦痛に思うんだろう。好きなことでお給料がもらえるのに、何の不満があるんだろうって考えて……。」
>
> （藤田俊哉，2003，Vol．572）

藤田は、好きなことが仕事になること、つまりサッカーをすることでお金が貰えるということに喜びを感じているが、周囲の人間からは藤田が本心を口にしていないと思われている。藤田の周囲の意識（文化への貢献に関する意識を見たときの小野や柳沢の意識）、つまり当時の日本のサッカー選手の不満に関する背景として、3 つの仮説をたてた。

第一に「見合った給料が支払われていない」という状況である。2000 年代前半から日本では「命名権」が普及していた［図 3-3］。その先駆けが FC 東京・東京ヴェルディの本拠地である東京スタジアムであった。その背景として、各地の公共施設が大幅な赤字であり、管理運営費の資金源の確保が急務となった。このことから選手の給料（需要）と入場者数（供給）の関係も悪化していたものと考えられる。しかし、Ⅰ期同様当時のサッカー選手から年俸に関する不満などは聞かれないため、この仮説は関係がないものと思われる。

第二に「J リーグが世界とのコネクションを持たない」状況である。これはキャリア形成の意識と関係している。当時の J リーグは、ACL が誕生したとはいえまだ名誉ある大会ではなく、日本の出場枠は J 優勝クラブ、天皇杯優勝クラブの「2」と非常に少なかった。また、当時の日本代表監督ジーコは体制中期以降、召集メンバーがほとんど固定された状況にあった。この二点を踏まえれば、彼らの不満の背景にこのような背景があると推察することができる。

図 3-3 「命名権」を売却したスタジアムの例

左：アビスパ福岡の本拠地である東平尾公園博多の森球技場、通称「レベルファイブスタジアム」／右：内田篤人の所属するドイツ・FC シャルケ 04 の本拠地であるアレナ・アウフシャルケ、通称「ヴェルティンス・アレーナ」

第三に「サッカーを『楽しむ』もしくは『楽しませる』機会が少ない状況」である。これは地域文化への貢献に関する意識と関係している。楽しませたいという欲求は強いが、それを実現する手段や機会を見つけ出せずにいる現状への不満と推測することができる。

4　小括

Ⅱ期では、愛情などに関する意識以外の側面で仮説とほぼ同じ傾向が見られた。選手はⅠ期と比較して自己分析を進めており、目標に関しても身の丈から少し上のところへ挑戦しようという意識が見られる。自己分析の共有と言う価値を見出し、日本人選手間の信頼関係の構築も重視し始めている。キャリア形成の自律性にもⅠ期と比較して挑戦への意識の高さがうかがえるが、J リーグ国際化に大きな変化がないことから、推移は微量である。サポーターとの関係においては親近感が芽生え始め、地域貢献への意識も僅かながら生まれ始めている。

Ⅱ期においては、愛情などに関するプロフェッショナリズムについて他の意識の高低が影響しているのではないかと仮定した。Ⅰ期では、Ⅱ期と同じようにキャリア形成や文化への貢献などの次元で低い意識が見られており、こうした他の意識との関係はⅢ期以降で詳しく確認しなければならない。

第４章　Ⅲ期：日本サッカーは死んだのか

1　欧州系アジア諸国の登場

本章は、2006 ドイツ W 杯後から 2010 南アフリカ W 杯までのプロフェッショナリズムを検証する。本章のタイトルは、ドイツ W 杯直後の『Number』の副題である。日韓 W 杯でのベスト 16 を上回る成績を目指した「ジーコジャパン」だったが、オーストラリアに 1-3、クロアチアに 0-0、ブラジルに 1-4 と何の手ごたえも得られずドイツを後にしてしまう。大きく期待を裏切った日本代表、そして日本代表に対する「問い」を『Number』が投げかけている。この後、エースの中田英寿は失意のまま 29 歳の若さで引退し、新監督に就任したイビチャ・オシムが大規模な選手の入れ替え（若返り策）を行ったことで、それまで代表の中心だった「黄金世代」は影をひそめ、日本サッカーはしばし閉塞的な雰囲気が漂い始める［図 4-1］。

図 4-1『Number』732 号
2009 年 7 月 16 日発売。「変革なくして 4 強なし」という言葉には、当時の日本サッカーに対する悲観的な見方もあらわれている

そのドイツ W 杯でベスト 16 入りを果たしたオーストラリアは、同年、オセアニアサッカー連盟（OFC）からアジアサッカー連盟（AFC）に転籍。「アジアの」ナショナルチームとして、アジア杯や W 杯アジア予選で日本と 3 度対峙することになったが、日本はⅢ期においてオーストラリアから 1 勝も挙げることができなかった（4 か国共同開催の 2007 アジア杯では準々決勝で日本がオーストラリアを PK 戦の末下すが、サッカーの記録上 PK 戦にもつれこんだ試合は「引き分け」扱いとされる）。

続く準決勝・サウジアラビア戦で 2-3 の敗戦を喫し、アジア杯の王座から陥落してしまう。2000 年・2004 年とアジア杯を連覇した「アジアの盟主」たる威厳は日本からなくなっていった。一方でオシムはこのアジア杯を成長のための戦いと位置付けており、この大会でタイトルを獲得する野心があったわけではなく、メディアが煽る「3 連覇」という言葉を非常に忌み嫌っていた。

ウズベキスタンは、旧ソビエト連邦を源流に持ち、ヨーロッパ的（ロシア的）な身体能力とサッカースタイルを併せ持つ中央アジアの国である。独立後、UEFA と AFC の加盟を選択できたが、1994 年に AFC 加盟を決定。するとその年の広島アジア競技大会におけるサッカー競技でいきなり優勝を果たし、アジアに衝撃を与えた。以降長らく低迷が続いていたが、2004 年・2007 年のアジアカップでは連続ベスト 8 入りを果たした。ドイツ W 杯アジア予選では 5 位決定プレーオフに進み、南アフリカ W 杯アジア最終予選では埼玉での日本戦で引き分けに持ち込むなど、新興国としてその頭角を現している。

これまでアジアの勢力は、韓国や日本、北朝鮮などの「極東」とイランやサウジアラビアなどの「中東」が二分していたが、オーストラリアやウズベキスタンといった非アジア的な身体能力を有するチームにより、アジアサッカーの勢力図が大きく変化してゆく。

2　Ⅲ期におけるプロフェッショナリズムの検証

2-1　日本サッカーの限界と岐路

世界はおろか、盟主として君臨していたアジアでも結果を出せず、メディアでは日本サッカーへの悲観論が強まった。2007 年から代表に就任した岡田武史監督が目標とした「ベスト 4」は、現実的な目標

ではないとしてメディアに失笑をもって迎えられてしまう。
第 1 章において示した仮説では、選手の挑戦目標は「アジアで確実に勝つこと」に向けられるとしたが、インタビューを見る限りではⅡ期より続く世界志向が依然として強いことがうかがえた。一方で、精神面の課題に話を及ばせる選手が多くなったという特徴がある。

> **長谷部誠「個人個人の意識を変えていかなきゃいけない。サッカーでいちばん大事なのは気持ちだと僕は思うんで、気持ちの部分をもっともっと日本のサッカー選手は変えていかないといけない、と。今からでも代表選手全員を僕が海外に連れて行きたいくらい」**
>
> （木崎伸也，2008，Vol．702）

長谷部誠は、2006 年に浦和レッズの一員として J リーグ初制覇・天皇杯優勝に大きく貢献した選手である。しかしその直後、ドイツ 1 部・VfL ヴォルフスブルクへ移籍をしている。上のインタビューはヴォルフスブルク所属 1 年目の時のものである。当初は「浦和レッズで安定した地位を確立しているのに、なぜドイツのクラブへ行くんだ」と移籍に批判的な声をよく聞いた、と自伝（2011）で綴っている。この発言から、海外での経験を通して精神的な部分の変化が日本のサッカー選手に必要だとしている。
2008 年に名古屋グランパスエイトからオランダ･VVV フェンローに移籍した本田圭佑も同様のことを「オーラ」という言葉を用い述べている。このように表現は多様だが、Ⅱ期と比較して精神面での課題を技術面より重視する姿勢はほぼ共通している。

> **本田圭佑「すべてですよ。根本的にすべて足りない。人間性一つとっても足りない。サッカーどうこうじゃないです。オーラが足りない」**
> **――民度の問題になってくるよね。**
> **本田圭佑「フフフフ、そうですよね。ただ、プラスの要素というか、勝つオーラ、勝つチームのオーラというのを、この 1 年で選手一人一人が身に付けてくる必要があるんじゃないかと感じます。いまの段階では、そこが絶対に足りない。まずチームでと言ってるようじゃまず駄目。その前に個人をできるだけどこまで伸ばせるか。どれだけ戦えるか」**
>
> （金子達仁，2009，Vol．732）

本田は、サッカーにおける気持ちではなく「元々の人間的な気質」、インタビュアーが言い換えたところの「民度の問題」に触れている。このように、サッカーにおける日本人の気質的な部分に警鐘を鳴らす表現がドイツ W 杯以降で増えている。同様に中澤佑二も精神面で課題があることを語っており、「意識改革」が必要と語っている。彼の場合は先に述べた長谷部・本田らと異なり国内のサッカー選手であるという点で、そうした J リーグ内の選手にも「意識改革」の流れが及んでいることがわかる。

> **中澤佑二「日本はこの（南アフリカ W 杯までの）1 年で何をしなければいけないのか。個人的には意識改革だと思います。……あれ（ドイツ W 杯）以来、僕は J リーグの試合中も世界を意識してプレーするようになりました。例えば、このポジショニングなら無難に守れるというところで、もう 1m、相手との距離を縮めてみる。ドリブルで抜かれる確率も高くなりますけど、リスクを負ってでもチャレンジしていかないと、世界で勝つことは出来ないですからね……。これはほんの一例に過ぎないですけど、日本の練習や試合から世界を意識しなければ成長できないと思うんですよ」**
>
> （佐藤岳，2009，Vol．732）

こうした意識の芽生えはアジアでの戦いを通して生みだされたものだ、と本田と中澤は語っている。

> **中澤佑二「例えば、オーストラリア戦（南アフリカ W 杯アジア最終予選、メルボルンでのアウェーゲーム）がそうだったように、日本の選手が海外の悪条件に戸惑うのは、普段プレーしている環境が整いすぎていることが少なからず影響しています。でも、どんな状況下でも、パスの質や**

スピードを意識することで、技術を向上させることができるはずなんです」

（佐藤岳，2009，Vol．732）

中澤の場合は、アジアで日本がもう一度抜きんでた存在になるためには世界を意識することだと述べている。本田圭佑も、アジアなどでの経験が世界を戦い抜く上で活きるという発言をしている。

——また話を北京（五輪）での初戦、アメリカ戦（で本田が本来の実力を全く発揮できずに終わってしまった件）に戻そう。あれはなんだったの？
本田圭佑「いろんな要素があるんでしょうけど……まず一つは、日本はホームで試合しすぎです。北京のあのピッチと国立のピッチ、雲泥の差があるんです」
——違う競技になるよね。
本田圭佑「はい。まずボールがまともに転がらない。これだけで日本人はパフォーマンスがガクンと下がるんです」
——瞬時にアジャストする能力は低いからね。
本田圭佑「はい。……やっぱりいろんな部分での精度が落ちていたんでしょう。経験も、メンタル的なものも、まだまだ足りなかったし」

（金子達仁，2009，Vol．732）

本田はこのように語り、国外での経験をもっと増やすべきだとしている。ヨーロッパに限らずアジアやオセアニアなど様々な条件下で「考えて」プレーする。そうした経験が適応力という日本にとっての新しい力を生み出し、世界に近付くことができるという考えを持っている。

このように、日本のサッカー選手は精神的な側面の課題を意識する傾向にある。換言すれば、技術的な面では世界レベルに近いものを持ち合わせるようになったが、それをどのような状況下でも引き出す知的な側面に課題があり、それに取り組もうとしている。技術的な側面における自信は、長谷部の言葉からも伺える。

長谷部誠「ドイツに行ったら当初は本当に力が違って、当たっても岩のようなヤツらばかりだった。ズンッて感じで痛いんです。でも、技術的なところは、世界との差はあんまりないと僕は思ってるんですよ。ただし、技術はフィジカルで抑えられちゃう」

（木崎伸也，2008，Vol．702）

長谷部の言葉から、日本サッカーの限界がうかがえる。かねてから日本サッカーは、欧州・南米のチームとの対峙においてフィジカル（身体能力）の面で劣るために日本の技術が抑えられてしまうという重大な問題点を抱えていた。これは日本人という民族の特長であり、解決するのは無理な話である。ここに日本サッカーの限界が見出された。そこでサッカー選手は「考えて戦う」こと、つまり「いかにして無駄な走りを減らすか」とか「いかにしてピッチに適応させるか」という知的な側面の向上を求めるようになったのである。これは現在の日本サッカーの特徴であるあるパスサッカーのルーツとも言える。

考えるサッカーへの変化は、選手がドイツW杯やアジア杯での惨敗を実力の結果として受け入れ、もう一度アジアでの戦いから始めようとしたことから始まり、ここに能力に準じた目標設定が認められるという点で高い分析力が見られる。

2-2　気ィ遣い

仮説では、日本人同士の信頼関係は外国人選手など「カリスマ」の存在によって変化するとしたが、Ⅲ期は「カリスマの不在」から日本人同士の結びつきがⅡ期より強固なものになるとした。

田中マルクス闘莉王について質問されたとき、坪井慶介は彼を「気ィ遣い」と評する。

坪井慶介「（見た目は）FW っぽく豪快そうに見えるけど、気を遣う。そういう一面を垣間見ることがありますよ。オフの日前日とかに選手同士で食事に行くとき、僕なんかは家族を置いて行く

わけじゃないですか。で、次の日の午前中に電話かかってくるんですよ。『ちゃんと帰れた？家空けて、大丈夫だった？』って。僕にだけじゃなく、ほかのヤツにもしてるんじゃないかな。で、『お前、いまどこに居るの？』って聞くと、『動物園に来てる』って（笑）」

気遣いはもちろん“本職”においても遺憾なく発揮されていると坪井は語る。

坪井慶介「僕が相手のボールを取りに行ってるときにパッとカバーに来てくれたり、ちょっと裏取られたときにちゃんとカバーしてくれる」

闘莉王は足が速いわけではない。それでも高いカバーリング能力を有しているのは、考えているからだ。坪井に言わせれば、「僕の特徴、ホリ（堀之内聖）の特徴、それぞれ考えてカバーリングの位置も多少変えてやってると思います」ということだ。

（小齋秀樹，2006，Vol．667「田中マルクス闘莉王『サムライの存在意義』」）

坪井は、普段からのそうした気遣いがプレーにも影響しており、インタビュー内で闘莉王に大きな信頼を寄せている。こうした意識がプレーの質に反映し、他の選手との連携に活きていると彼を好評している。

闘莉王の気遣いは、クラブ内の全選手に向けられる。その当時ユースに上がったばかりだった小池純輝も、闘莉王との関わりを鮮明に思い出している。

小池純輝「僕がユースでトップの練習に参加させてもらったとき、練習場から寮まで歩いてたんですよ。そしたら闘莉王さんが車で通りかかって、『どこまで行くの？乗せてくよ』って。怖い人だと思ってたから、すごく嬉しかったことを覚えています」

（小齋秀樹，2006，Vol．667「田中マルクス闘莉王『サムライの存在意義』」）

闘莉王は、共に闘う浦和レッズ（当時）の選手とのコミュニケーションを重視しようとしている。闘莉王は「一緒にやるヤツが誰であれ、ソイツの持ってる力をすべて出させてやるのがオレの仕事だと思ってるんで」とインタビュー（2007，Vol．667）で語っている。

日本における選手間のコミュニケーションの向上、異なる環境で戦う海外組に驚きをもって迎えられる。松井大輔は、フランスのサンテティエンヌ所属時代、代表での不振についてこう述べている。

松井大輔「もっと話し合わないといけないのかもしれない。周囲の期待にこたえていないというのは、一番自分がわかっている。この状況を打開するのも自分自身だから。そのためにすべてを変えたい。今までやってきたことすべてを」

（寺野典子，2009，Vol．732）

松井が 2004 年から戦っていたフランスリーグについて「フランス（リーグ）の選手は、『俺は俺の仕事をするから、お前はしっかり自分の仕事をやってくれ』という感じ。我関せずっていうところはある。」と語っており、個人技に長ける松井はその意味で「フランス向き」の選手である。しかし彼が個人で突破してもチームとその意図疎通ができていないためにプレーが続かず、当時代表内で不振に陥っていた。中村俊輔がパスの「パイプを太くしたい」と数多くの選手と言葉を交わし、成功を収めている（寺野典子，2009）のとは対称的な状況である。このように、Ⅲ期ではⅡ期（もしくは松井がフランスへ旅立つ 2004 年ごろ）と比較して日本人同士の結びつきが強固になっていることがわかる。

2-3　選手と「環境」

Ⅲ期では ACL がクラブ W 杯のアジア代表決定戦という価値を有し、ACL 出場権が J1 の 2 位・3 位にも与えられ枠が「4」となり、さらにスルガ銀行 CS が登場し、J リーグが現在と同じ国際性を有するようになる。第 1 章の仮説から、こうした J リーグの国際性の拡大は選手の自律性を高めるとした。

Ⅲ期においては、そうした J リーグの変化が選手のキャリア形成に関して「環境」という言葉を選手が多用している。

中村憲剛「プロになりたいという気持ちだけでなれるもんじゃないのに、フロンターレに運よく拾ってもらった。しかも（入団）当時は J2 で、どんどん力をつけて、これから伸びていくところだった。それはすごくタイミングが良かったと思います。非常に恵まれた環境でした」

（浅田真樹，2006，Vol．667）

阿部勇樹「（長年プレーした千葉から浦和に移籍したことに対して）どの環境でやれば一番うまくなるかを考えた時、やっぱレッズかなって。チームの施設環境もいいし、選手層も厚い。……それに浦和は ACL で勝って、世界に出て行こうとしている。僕も世界のクラブと戦いたいし、世界を目指したい。レッズのビジョンと僕のビジョンが同じだった」

（佐藤俊，2007，Vol．671）

Ⅱ期においては、代表に直結する「レベルの高さ」「厳しさ」に重点を置いていた。その傾向はこの時期にも見て取れる。一方で、上記 2 選手から見られるように「クラブのビジョン」が大きな要素となって加わっていることが伺える。

阿部は、浦和レッズに入団した理由のひとつとして浦和の ACL 勝利へのビジョンにあるとここで説明している。アジアのクラブとの戦いに価値を見出し始めた日本人選手のプロフェッショナリズムをここでも見ることができる。事実、浦和レッズは 2007・2008 と ACL 出場権を手にしており、2007 で優勝。阿部勇樹はそのメンバーであり、決勝第 2 戦（埼玉）で得点を決めている。

クラブ単位での世界大会が始まり、ACL がアジアでの競争をさらに激しくし、日本代表でなくともアジアや世界へ挑戦するチャンスが与えられるようになった。これは選手たちに ACL、クラブ W 杯への明確なビジョンといった成長戦略をもつクラブへの移籍を希望させる動機となっている。中村の移籍に関しても成長戦略が明確な川崎の環境は「恵まれた」ものだとしている。つまりここでの「環境」とは、クラブの成長戦略に影響されるクラブ内の「勢い」「雰囲気」といったものである。

一方で、阿部はネガティブな要素も移籍の動機となったと語っている。ここでも「環境」という言葉が使われているが、ここでの「環境」とは先程までの「環境」とは別の概念と捉えられる。

阿部勇樹「自分が巧くなるためには、環境を変えたほうがいいかなって……。移籍しても巧くなれるかわからないけど、9 年間、ジェフで普通に試合に出てプレーして、それに慣れてしまった。……でも、環境を変えればゼロからのスタートだし、チームメイトやサポーターに認めてもらうために必死にやらないといけないですからね」

（佐藤俊，2007，Vol．671）

阿部がここで用いる「環境」は、「所属するクラブそのもの」である。同様に、鹿島アントラーズからフランスのオリンピック・マルセイユに渡り、スイス 1 部・FC バーゼルに移籍した中田浩二、東京ヴェルディ 1969 からイタリア 1 部カルチョ・カターニャへ移籍した森本貴幸も、その経緯を『Number』で語っているが、両者ともネガティブな要素、慢性的なクラブへの依存に対する嫌悪感が移籍を促したとしている。

――欧州でプレーしたいと思った理由は？

中田浩二「もっと伸びたいと思ったから。プロになって 1、2 年目は試合に出ていなかったけど、いろんな刺激を吸収して伸びたという実感があった。でも、レギュラーになってからは、どこか与えられた環境の中でサッカーをやっている感じがあって、このままじゃダメになりそうな気がしていた。だから与えられるものじゃなくて、自分から奪いに行くくらいじゃないと伸びない、一度、与えられたものを壊して、新たな気持ちでやっていきたいってね。……」

（寺野典子，2006，Vol．664）

森本貴幸「日本では静かに生活するのが難しくなったから。煩わしいものを捨ててきたっていうのは、ありますね。自分を高めることだけに集中できるところに、もう一度戻りたかったから」

（熊崎敬，2007，Vol．671）

阿部、中田、森本は共通して「原点回帰」を求めている。とくに中田浩二が移籍したFCバーゼルのあるスイス・スーパーリーグは、世界的リーグを数多く抱える西欧で知名度的には陰に隠れており、日本の名門・鹿島で活躍していた中田浩二の、日本人未開の地への挑戦に疑問符も多く上がっていた（なお、バーゼル移籍前のマルセイユ時代、シーズン序盤での自殺点が悪印象を与えてしまい、人種差別的待遇で思う様な活躍が出来なかったことがインタビュー内で語られており、そうした不遇の 1 シーズンの経験も発言に影響していると思われる）。このように、この時期のサッカー選手たちには、同一クラブとの長い関わりに価値を見出していないことがわかる。

2-4　カミーザ・ドーゼ 後編～サポーター再考～

スタジアムの質的な向上（ピッチとスタンド間の物理的距離の改善）がサポーターへの親近感に影響するとすれば、Ⅲ期ではⅡ期と同じくサポーターと選手の関係が改善される状況にあるとした。

この時期はサポーターとの関係の在り方を語る中で、試合における選手との意識の同化を求める言葉が多くなっている。まずガンバ大阪の幡戸竜二のインタビューを見ていく。

> 幡戸竜二「例えば、昔の（92 年広島）アジアカップで、カズさん（三浦知良）が（グループリーグ最終戦のイラン戦で）ゴールを決めて、ガーッて喜んでるシーンがあったでしょう。あれを切り取ってこの時代に持ってきたら、どうなります？浮いちゃうでしょう。
>
> 今、アジア相手にゴールを決めて、あんなに喜べるのかって。選手もそうだし、観る側も同じことですよ。みんなで旗持って、振って、わーって出来ますか？
>
> 観ている人が、『勝って当たり前、点を決めても当たり前』と思っている。ならば決めた選手も力いっぱい喜べないでしょう。
>
> もういちど、考え直すべきですよ。選手はもちろんのこと、サポーターにも問いたいですね。代表がこうだ、選手がどうだって言うのなら、自分たちの考えも見つめ直して欲しい。代表は、あくまで自分たちの代表であり、自分たちとともに戦っているという感覚で見てほしい」
>
> （吉崎エイジーニョ，2007，Vol．686）

日本サッカーの発展は喜ばしいことではあるが、これまで代表が欧州・南米のチームと戦う機会が増えたことで、見る者が目先の小さな喜び、つまりアジア諸国からの勝利に価値を見出せなくなっている。そのことに幡戸は残念な心情を抱いている。

まだ日本がアジアで燻っていた時代を例に出し、幡戸がサポーターに求めたのは「自分たちとともに戦っているという感覚」を持つことである。つまり「12 人目の選手」の役割だった。Ⅱ期において、サポーターとの信頼関係は結ばれた。しかし、サポーターが支援し、応援し、選手がそれに応えて結果を出す、という役割分担ではなく、共闘者、つまり「サポーターは選手」という意識を求めていく。

サポーターの熱狂振りでは当時も国内屈指の浦和レッズであるが、田中マルクス闘莉王（当時）も幡戸のような「共に闘う」存在であることを求めている。彼は浦和サポーターの時に辛辣な部分は選手にとってもマイナスだと語る。闘莉王自身、熱いプレーが売りの選手であり、サッカーになれば自分や周囲に厳しく、DF というポジションながら最前線へ一気に駆け上がる姿はレッズの象徴として愛され、親しまれた。しかしその熱さゆえ、時にサポーターと衝突し、涙を流す場面もあった。

> ――闘莉王はサポーターとどういう関係でありたいですか？
>
> 田中マルクス闘莉王「つらいときこそ拍手をしたり、みんなで力を合わせていこうよ、というのがいい。僕はサポーターのみなさんに、そういう関係を求めていた。……つらいときこそ“We are Reds！”（浦和レッズサポーターの名物コール）と言って欲しいです」
>
> ――サポーターへの期待や感謝の気持ちは大きいのですね。
>
> 闘莉王「レッズはサポーターと一丸となっているときが一番強い。サポーターがいなかったら、僕らはここまで来てないですよ。……サポーターとは仲間であるという気持ちだからこそ、ブーイングは（ただ負けたショックの）2 倍につらいし、心の中に響く。一人ぼっちにされたような気持ちになるんです。僕らも手を抜いたりしない。そういう選手がいたら、僕らでそいつを怒る。

選手同士でも絶対に許していない。そこは分かって欲しいです」

（小齋秀樹，2006，Vol．667）

闘莉王が「2倍につらい」と話す「ブーイング」とは、主に相手チームがボールを支配している際に良く行われるヤジ、非難であるが、時としてその矛先は応援するチームや選手にも向けられる。Jリーグ屈指の集客力を誇る浦和の場合、ホームでの敗戦では 6 万のスタンドから容赦ないブーイングがレッズ選手に浴びせられるのである。

選手自身は「12 人目」の関係、闘莉王に言わせれば、サポーターが「選手」であるならばその関係を破壊するような「ブーイング」はしない。しかしサポーターはそういった選手が求める「12 番目の選手」像を持たっていない。ここにある種のギャップが生じている。

同じように、清水エスパルスの選手（当時）、市川大祐、枝村匠馬の例を見ていく。

日本平スタジアムには、他のスタジアムには感じられない一種独特の雰囲気がある。それはエスパルスが創設される何年も何十年も前からボールを蹴り、子供を鍛え、サッカーを語り尽くしてきたという年配者の厳しい視線だ。バックパスがふたつでも続けば、彼らは容赦なく糾弾する。スタジアム全体がざわめき、それは「お前らは間違っている」という圧力となって選手たちに襲いかかる。

市川大祐「そうなんです。そこは僕らもつらいところで……。

サッカーが好きで、長年関わられてきた方が多いので、本当に厳しいんです。流れが悪いときには、それを落ち着かせる意味で後ろにつなぐこともあるんですが、それだけでネガティブな印象を持たれてしまうので……」

枝村匠馬「俺がちっちゃな人間だから、そう思うのかもしれないけど。バックパスをしたときのざわめき、相当なプレッシャーになるんですよ」

（熊崎敬，2006，Vol．667）

浦和と清水には、類似する歴史がある（熊崎敬，2006）。埼玉と静岡、とくに旧浦和市と旧清水市の高校は、全国高校サッカー選手権大会において優勝の常連であった。ともに埼玉と静岡が「サッカー王国」と呼ばれる所以がこの両市の高校にあった。

しかし、90 年代に入り、埼玉では浦和の高校が県内でも勝てない時期が続き、清水でも清水商業や清水東といった伝統校が勝てなくなっていった。その中で浦和と清水にプロクラブが誕生し、市民は地元のクラブにサッカーの情熱を傾けていった。そうしたルーツが独特のサポーター集団を形成していることは間違いないし、そういった歴史があるからこそ、結果に対する危機感が味方選手へのブーイングなどに表現されるのだろう。そして浦和と清水が本拠地とする競技場はサッカー専用であり、陸上競技場より設備的な面でスペクタクル感を得られるという点でも共通し、地元でのサッカー人気を維持・発展させてきたのである。

一方、選手の意識としては「12 人目の選手」の出現を期待する。ここに微妙な温度差が存在している。Ⅱ期においては、信頼関係は確立されたがクラブが地域に根付くためのサポーターと選手とのコミュニケーションが重視されていた。その関係が成り立つことで、Ⅲ期ではサポーターは貴重な戦力という意識を強く持っている。

3-5　野球とサッカーのエンターテインメント追究

Ⅱ期では、Jリーグブームを支えた大企業の相次ぐ撤退により文化の振興に関する選手の意識が高まっていった。そして、魅力的なサッカーを披露する機会に飢えていたとした。仮説では、当時のリーマンショックに端を発する景気の後退によりクラブの経営難が問題となったために選手のそうした意識がさらに高まるとした。

Ⅲ期において、Ⅱ期のような『Number』から「楽しませる」サッカーをしたいという欲求を示す選手がはほぼ見られない。一方で、サッカーのエンターテインメント性を追求する動きが増えたことが挙げられることで、こうした「楽しませる」という欲求はⅡ期と関連付けることができる。

図 4-2 槙野智章の「元気玉」

カナダで彼らが披露したゴールパフォーマンスは日本に持ち帰られ、Jリーグのクラブに浸透していく

2007 FIFA U-20 ワールドカップ 日本代表の戦績		
グループリーグ		
第 1 戦	vs スコットランド	○ 3-1
第 2 戦	vs コスタリカ	○ 1-0
第 3 戦	vs ナイジェリア	△ 0-0
決勝トーナメント		
ラウンド 16	vs チェコ	● 2-2 PK3-4

FIFA 公式 HP を基に作成

発端は、2007 カナダ U-20W 杯の日本代表である［図 4-2］。後に日本代表の主力となる香川真司、内田篤人、槙野智章、安田理大、ハーフナー・マイクらによって構成された代表は、得点を決めた後のゴールパフォーマンスで世間の注目を浴びた。日本代表が全 4 試合を戦ったヴィクトリアでは日本代表のユニホームが完売し、チェコ戦敗退後のスタジアム周辺では日本の応援歌を歌いながら家路に向かうカナダ人の観客たちの姿があった（金子達仁，2007）。

カナダという国は、W 杯などで突出した成績を残していないが、大会招致には積極的である（1987 U-17 世界選手権、2007 U-20W 杯、2002・2014 女子 U-20W 杯、2015 女子 W 杯など）。サッカーに「見るスポーツ」としての高い価値を見出しているカナダで、日本代表は鮮烈な印象を残したのだった。

パフォーマンスは当時流行したビリーズ・ブートキャンプや漫画『DRAGON BALL』の主人公・孫悟空の必殺技「カメハメ波」など多岐にわたり、メディアからは「調子乗り世代」「悪ガキ世代」などと評された。それでも、奇跡的な才能を持った選手の集団発生によって 1999 年に準優勝を果たした「黄金世代」と異なり突出した才能を持った選手がいないながらのベスト 16 進出は、日本サッカーの未来を僅かでも明るく照らした。

もともと集団で繰り広げられる独特のゴールパフォーマンスといえばアフリカの代表チームが行う民族舞踊調のものに代表されるが、そのアフリカも以前はただ狂喜するだけだった。パフォーマンスが行われるようになったのは、イタリア W 杯でカメルーンがベスト 8 に進み、世界に「21 世紀はアフリカの時代」と言わしめた 1990 年以降、アフリカ勢が国際大会で結果を出し始めてからだ。カナダで 2 得点を決めた森島康仁は、ゴールパフォーマンスのきっかけについて以下のように話す。

> **森島康仁「カナダではね、インターネット回線でゴールを見てたんですよ。それで TBS の『スーパーサッカー』を槙野（智章）と見てたら、柏レイソルのファンがビリーの真似してて、ゴール決めたらこれやろって。それで、試合の 2 日前あたりから『ウイニングイレブン』でゴールが決まるたびに、“みんな集まれ！おい、おい、おい！”って感じで練習してたんすよ」**
>
> （熊崎敬，2007，Vol. 686）

つまり、独特の踊りの習慣が既に根付いているアフリカ諸国と異なり、当時の U-20 日本代表は大会直前に「練習」しなければこうしたパフォーマンスは不可能である。そのキッカケは、「アフリカの選手がやっているから俺らもやってみよう」ではない。世界を相手に得点を入れることが「当たり前」、「決定事項」であるという自信がチームに共有されなければ、こういった意識は生まれない。

こうしたパフォーマンスには新たなサッカーファンの開拓という選手側の思いがあると考えることもできる。槙野智章もこうしたパフォーマンスを当時の所属先であるサンフレッチェ広島に持ち帰り、「広島劇場」と呼ばれた。J リーグアウォーズ受賞時、彼はこうしたパフォーマンスについて「サッカーファン以外の人、これからサッカーを好きになっていく子供たちにも、もっとサッカーを好きになってほしいという一心でやっている」とのコメントを発表している。

J リーグが登場して以降、それまでの国民的スポーツであった野球と人気を二分し、どちらが人気か比較され続けてきた。2002 日韓 W 杯の盛り上がり以降、サッカー人気の過熱とともに野球人気に陰りが見え始めていたが、2006 年の野球界では、北海道日本ハムファイターズの新庄剛志が地元札幌ドームで行った「札幌ドーム超満員大作戦」を皮切りとした「新庄劇場」が大きな話題を呼んだ。新庄は「魅せる野球」にこだわり、独自に考案したファンサービスを積極的に行った。例としてかぶりもの、バイク入場ショー、イリュージョンショーなどがあり、時にはチームメイトも誘って実行し、その狙いはチームメイトにも興味を持ってもらい新たなファン層を開拓して広げていくきっかけづくりにあった。

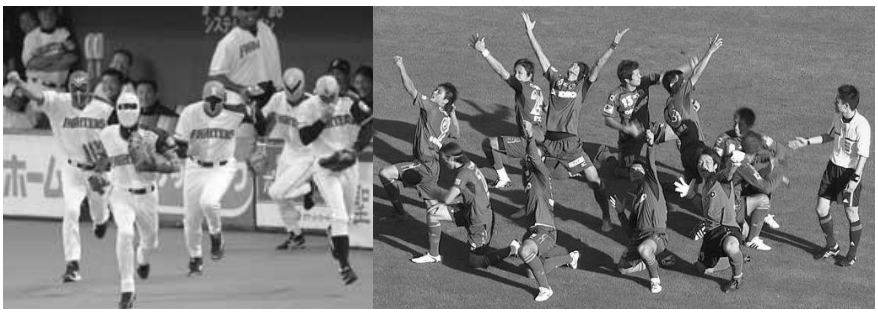

表 4-3　野球とサッカーのエンターテインメント化比較

左：試合前の練習を、特撮番組『秘密戦隊ゴレンジャー』のマスクを着用して行う北海道日本ハムファイターズの選手たち。先頭が新庄剛志（2006）／右：槙野智章が当時所属したサンフレッチェ広島での「弓矢パフォーマンス」。時には遅延行為として主審に制止される場面も（2009）

こうしたエンターテインメント性の強い動きが功を奏し、北海道を中心に新たな野球ファンの確立がなされた。こうしたライバルスポーツ・野球の動きに感化された影響は大きかったものと推察できる。新しいサッカーの楽しませ方を模索し、実際に彼らはカナダでそれを実践してカナダ人の心を掴んだことで、新しいサッカーの形として日本に持ち帰ってきたのである［図 4-3］。Ⅱ期と比較し、「楽しませたい」という思いを実際に行動に移したという点で、貢献への意識は高まっていると考えることができる。

3-6　楽しいプレッシャー

Ⅱ期においては、サッカーの愛情、楽しみへの意識を持っている選手はほぼ見られず、他の意識との関係を指摘することができた。

この時代の選手からは、プレッシャーのかかる場面でこそサッカーの楽しさを見出す心の余裕ともとれる発言が多く出ている。鈴木啓太と中村憲剛の場合、プロの世界の緊張感、重圧から楽しさを見出すことのできた喜びを語っている。

> **鈴木啓太「うーん。最近楽しいと思ったのは、この間の川崎戦。ひとつのミスも許されないっていうのが、ぴりぴり伝わってきた。で、お互いに良かったじゃないですか。代表とはまた違った緊張感、ゾクゾクするような感覚があった。楽しいなあ、この時間ずっと続かないかなあって。……その“ギリギリ”も楽しいし、大変な自分が結構好きだったりもして」**
>
> （近藤　篤，2006，Vol. 667）

> **中村憲剛「たまに、練習でできないようなことが試合でできたりするから、ビックリするんですよ。スタジアムの雰囲気とか、真剣勝負のテンションがなせる業、なのかな。だから、サッカーはおもしろい。やめられないですね」**
>
> （浅田真樹，2006，Vol. 667）

純粋にプロの雰囲気、緊張感――「真剣勝負のテンション」を楽しむことができているという選手の意識は、プロの雰囲気に不満すら覚えていたⅡ期とは大きく異なるものであることが分かる。

山瀬功治は、そうしたプロのサッカーや子ども時代に経験した自由気ままなサッカーに区別を設けず、「サッカー自体」への強いこだわりをみせている。

> **山瀬功治「代表のユニホームを着てプレーすることはとても大事なんですけど、僕にとってそれよりも大事なのは、サッカーができるというシンプルなことなんです。代表を軽んじているわけではないし、より高いレベルでプレーすることはサッカーが上手くなりたいという目標にもつながる。でも、いろんなものをぜんぶひっくるめてサッカーというか……。うまく言えませんが、今の僕はチームではなく、サッカーという大きなもの、サッカー自体にこだわっているんです」**
>
> （城島充，2009，Vol. 704）

つまり選手の意識には、プロサッカーというものの前にサッカーができていることへの純粋な喜びを感じ取れるようになっている。Ⅲ期において能力と挑戦目標の位置関係が非常に近接していたことが能力分析のプロフェッショナリズムを検証した時に明らかになっており、フロー理論においては「フロー」つまり適合状態にあり「幸福」であると考えられる。そして、インタビューの検証から選手がこうした幸福を見つけ出していることがわかる。

3　小括

能力分析に関しては、これまで見てきた時代の中で挑戦目標と能力が近接した位置にあり、分析力の高さがうかがえる。そこにはオーストラリアやウズベキスタンといった非アジア系諸国の台頭に対する危機感も意識の形成に影響していると考えることができる。こうした高い適合性が選手にプロとしての「喜び」や「楽しみ」を見出すことを可能にさせたと捉えることができる。信頼関係やキャリア形成における自律性の面においても仮説とほぼ同じモデルを当時の日本サッカーに見出すことができる。

サポーターへの親近感という面だが、「選手（チームメイト）」としてのサポーター像を強く求めており、選手にとってより近い存在になっていることがわかる。ただ、浦和や清水の例を見てわかるように、ここでは歴史がサポーターの意識の高まり、つまりクラブや選手への親近感の高まりを後押ししているという状況を指摘することができる。

文化への貢献に関する意識をみるとき、Ⅱ期では「楽しませたい」という欲求にとどまっていたものが、エンターテインメント性の追求へ転換され実際に行動へと移された。しかし、そこにはサッカーのライバル的スポーツである野球人気が大きく関係しているのであって、こうした別の背景もあったことで意識が高まったと考えることもできる。

第５章　Ⅳ期：新・黄金世代の挑戦

１　解決されない問題

1-1　エリート育成システム論批判

本章では、2010 南アフリカ W 杯後から現在にかけてのプロフェッショナリズムを検証した上で、今後のプロフェッショナリズムの行方を推察する。W 杯終了後は、国内でサッカー熱が急騰し始め、1993 年の J リーグ開幕、2002 年の日韓 W 杯フィーバー以来の盛り上がりを見せる。しかしこの盛り上がりの一方で、危惧すべき課題も浮上する。

第一に、各世代の「伸び悩み」である。FIFA が主催する年代別 W 杯（U-17、U-20）、さらに五輪（U-23）といった大会での日本代表の活躍が聞かれず、U-20 に関しては 2009・2011 大会と 2 大会連続でアジア予選敗退を喫している。U-17 代表は 2007・2009 本大会でグループリーグ敗退。挙げた勝ち星は計 6 試合中わずか 1 試合だけだった。しかし 2011 年メキシコ大会ではフランス、アルゼンチン、ジャマイカという強豪揃いのグループを 2 勝 1 分けで 1 位通過。ラウンド 16 ではニュージーランドを 6-0 で下し、準々決勝でブラジルに 2-3 で敗れたが、1993 大会以来 9 大会ぶりのベスト 8 進出を果たした。

第二に、クラブチーム出身者がプロで突出した功績を残していない点である［図 5-1］。この点については、城福浩（2011）がエリート育成機関とされている J リーグクラブのユース（18 歳以下）チームやジュニアユース（15 歳以下）チームの問題点を『Number』において指摘している。海外のクラブユースの場合は、早ければ半年、遅くとも 1 年のサイクルでチームのメンバーを入れ替えていく。基本的には選手の衣食住から教育、サッカーの指導に至るまで最高の環境を提供する代わりに、容赦なく選手を切り捨てる。そうした厳しい生存競争を生き抜いた選手だけが真のエリートとして残っていくのである。

図 5-1　W 杯各本大会における日本代表の内訳

（城福浩, 2011）

対称的に日本の場合は、ジュニアユースもユースもセレクトされれば 3 年間はふるいにかけられない。つまりお受験と同じで、合格してしまえば今後の 3 年間の生活が保障されるのである。

こうした日本のクラブチームのシステムでは、ユース出身の選手が「自分の力でチャンスを掴み取っていくエネルギーや飢餓感」において高校サッカーの選手を上回ることは難しいと城福は指摘する。こうした精神的なたくましさの欠如により、本来用意されているはずの次のステップを踏み外すようなケースも起こりやすいとしている。海外と異なり日本のユースではクラブが選手の面倒を 100％見るわけではなく、選手の父兄にも相応に金銭的な負担を強いるのである。そこで選手を 1 年毎に入れ替えたりすれば、クラブが猛烈に批判されるのは誰の目から見ても明らかだ。そうした意味で「ユースは日本社

会そのものの縮図」であり、「一種の終身雇用制度に近いものになってしまっている」という。

1-2　新・黄金世代

一方で、[図 5-1] からは必ずしも「エリートコース」を歩んできたとは言えない「非エリート」の選手がW杯メンバーなど日本サッカーのトップで活躍しているという状況を知ることができ、彼らの成功の秘訣に関心が高まっていく。

南アフリカW杯でゲームキャプテンを務めた長谷部誠の著書『心を整える。――勝利をたぐり寄せるための56の習慣』（2011）では、ドイツや日本代表で活躍し続けるためにメンタルを「強化」するのではなく「調整（調律）」するという長谷部独特の価値感が大きな反響を呼び、ミリオンセラーとなった。長友佑都は大学サッカー出身の選手で、現在はイタリアの名門インテルで活躍するが、彼のこれまでの軌跡を綴った著書『日本男児』（2011）も20万部以上を売るベストセラーとなった。明治大学時代はケガなどもありメンバーに入れず、応援の太鼓係をやっていた彼は、そこから大学選抜、五輪代表、A 代表、セリエA、そしてインテルと、一気に世界最高峰のDFへの階段を駆け上がっていったのである。

長谷部や長友の他にも、川島永嗣『準備する力』、内田篤人『僕は自分が見たことしか信じない』、阿部勇樹『泣いた日』（いずれも2011）など、サッカー選手の著書が多数発表され大きな話題となった。

彼らのほとんどは1999年にワールドユース準優勝を果たした「黄金世代」と比較され、突出した戦績を残せなかったことで劣等の烙印を押された世代であった。その彼らが南アフリカW杯ベスト16、アジア大会優勝の主力となったことは日本サッカーにとっては喜ばしいことであった。長友や内田をはじめ岡崎慎司、本田圭佑など2008北京五輪に出場した世代を『Number』では「新・黄金世代」と表現する。

2　Ⅳ期におけるプロフェッショナリズムの検証

2-1　スペインサッカーと日本サッカー

Ⅲ期においては、国際経験から日本サッカーの限界を知り、メンタル的な問題に触れる選手が多く、実力と挑戦目標の適合性を伺うことができた。

Ⅳ期における仮説では、日本サッカーの次の目標として「W杯8強（または4強）」を目指すのが妥当であるとした。しかし序章でも述べたように、「W 杯優勝」という目標は日本のサッカー選手にとって当たり前のものとなっている。

現在のサッカーのトレンドとして、FCバルセロナに代表されるスペインのパスサッカーが挙げられる。南アフリカW杯で優勝したスペイン代表は、総得点こそ歴代優勝チーム史上最低記録だったが、連動するパスワークでボール支配率では他を圧倒していた。世界で注目を集めるスペイン、もしくはその代表に多くの選手を送り出したバルセロナに対して、同じパスサッカーで世界と対峙する日本サッカーも関心を強めていく。

> **香川真司「（スペイン代表MFアンドレス・イニエスタについて）運動量が豊富で、パスも出せて、すごいフェイントがあるわけでもないのに、サイドからカットインしてシュートまで持っていける。そういう意味では自分に近いかも。インサイドであったり、アウトサイドを使ったり、ああいうボールの持ち方は俺もすごく好きだから。自分と重ねているうちに、あんな風になれたらいいなと思ってました。まぁ、オレが一方的に真似しているような感じですけど」**
>
> （ミムラユウスケ，2010，Vol. 760）

例えば、上のインタビューにおける香川真司は、イニエスタと自分の能力を重ね合わせている。香川が所属するのはドイツのドルトムントであるが、入団した際に目標として挙げたのはイニエスタだった。このように特定の外国の選手と比較して自己を見るという意識はこれまで見られないものである。本田圭佑も、自身のプレースタイルについてイニエスタやシャビ（スペイン代表）を例に比較している。一方で、本田はイニエスタやチャビはあくまで自分の技術の比較対象のひとつであり、目標ではないとしている点で香川とは異なっている。

——……イニエスタの動きをＷ杯で見ていると、ボールを貰う動きが直線的でない。そんなに走っているわけじゃないんだけども、頻繁に方向を変えている。
本田圭佑「イニエスタもチャビも、それがうまいね」
——そういう動きを、もっとすべきでは？
本田「すべての面でボクがイニエスタに劣っているのは間違いないと思う……。あとオレは、自分で得点を取りたいからね。チャビやイニエスタのようにゲームを作って、相手を完全に圧倒して、支配する時間を長くして、前線にパスを供給する。そういうスペシャリストになりたいと思ってないから」

（木崎伸也，2010，Vol．760）

このインタビューで、インタビュアーに「スペインのようなサッカーを本田含め日本が目指すべきではないか？」という意図があることがうかがえる。本田はスペインの選手との実力の差を認めた上で、自身のプレースタイルは曲げないとしている。そして彼らスペインリーグ所属の選手たちを目標とする中でオリジナルのスタイルを持つ選手に成長することに楽しみも抱いている。

本田圭佑「（自分のように足が）めちゃくちゃ遅くて個人技であまりいかれへんみたいなタイプが、クリスチャーノやメッシを目指しても、それは自由ですよね。それを目指したときに、どういうものができあがるのかなと思っているんですよ」

（木崎伸也，2010，Vol．760）

このように、特定のスペインの選手（もしくは、クリスチャーノ・ロナウドのようなスペインリーグで活躍する選手）を自己の目標、もしくは能力の比較対象と捉える傾向が強い。黄金世代で現在唯一日本代表に残っている遠藤保仁も、現在の日本のサッカーについてこう語っている。

遠藤保仁「やはり日本人の特徴を考えてみると、スペインとか今のドイツに近い、パスを軸にするスタイルにしていかないといけないと個人的に思います。日本のスタイルというものをつくっていかないといけないし、そういうのが徐々にできているとは思うんです」

（二宮寿朗，2011，Vol．785）

一方、こうした傾向が契機となりプレースタイルを封印させた選手もいる。2011 年冬の欧州移籍市場でドイツのシュトゥットガルトに移籍した岡崎慎司は、「足よりも頭」を得意とし、清水エスパルス時代から「一生ダイビングヘッド」を座右の銘としていた。しかし、ドイツ移籍後にその価値感は大きく変化する。

いま、岡崎が意識していることが、2 つある。
自ら仕掛けてシュートまで持っていくこと。
そして、攻撃の組み立てに参加することである。
一方、攻撃の組み立てに参加しようという意識は、こんな言葉に表れている。
岡崎慎司「シュトゥットガルトは前に行く力は強いので、僕のところでボールを失わないようにして、その上でしっかりとつないで、攻撃にアクセントをつけたい。正確性なんかはけっこう考えてやってますね」
リーグ戦 4 試合を終えてパス成功率は 82%。攻撃的なポジションの選手としては申し分ない。
攻撃の組み立てを強く意識するようになったのは、今年に入ってからだ。シュトゥットガルトへの移籍前、アジアカップでの出来事だった。
岡崎「最初は、みんなで DVD 見ようぜ、みたいな話から始まったんですよ。それでバルサの試合見ようということになって……見ている最中に、俺らもバルサみたいなサッカーをしたいけど、どうやったらこうできるのか？という話になったんです」

（ミムラユウスケ，2011，Vol．775）

確かに、岡崎ら日本代表の「理想」にバルセロナがあることがわかる。さらに岡崎は、そうしたパスサッカーへの順応性のさらなる向上を期した直後、そのためのおあつらえ向きの舞台が用意されていたことを喜んだ。

岡崎慎司「そういう意味では、そのための環境がシュトゥットガルトにあるのかなと。自分がゲームを作って、さらに自分が飛び出す。今は 2 つのことができると思うので。そういうのが今は必要なので。だから、今は楽しいっすね」

（ミムラユウスケ，2011，Vol. 775）

パスサッカーのために自らの最大の良さを一旦封印し、日本の理想に自らを近づけていく姿勢があらわれている。2010 年にスペインの RCD マジョルカに移籍した家長昭博は、本田との対話でこう語ったことを明かしている。

家長昭博「おまえがマドリーなら、俺はバルサや。そのときはユニフォーム交換でもしよか？おもしろいやないか」

（小宮良之，2011，Vol. 775）

本田圭佑は、かねてから世界のビッグクラブであるレアル･マドリードの「10 番」をつけてプレーすることを最終目標に置いているが、同じ生年月日に生まれ、ガンバ大阪ジュニアユースで本田と共に育った家長はこのように語った。マジョルカはバルセロナと同じスペイン 1 部に所属するため、家長はバルセロナと対峙した経験を持っている。

家長昭博「正直、中村（俊輔）さんのような選手でも苦労したスペインってどんなもんや、とびびってました」

（小宮良之，2011，Vol. 775）

中田英寿は 8 年をイタリアやイングランドで戦い、日本人選手への偏見を払拭した。ドイツでは長谷部誠がマイスターシャーレ（優勝皿）を掲げ、オランダでは本田圭佑が VVV フェンロー時代に鮮烈な印象を残し、その活躍はロシア・プレミアリーグ移籍後も目覚ましい。しかし、現在においても、スペインで結果を残した日本人選手というのはお世辞にも挙げることはできない。日本のサッカー選手がスペインを意識するのには、こうした現在の事情からくる一種の畏敬の念も含まれているように感じられる。

これまで「アジア」「世界」と広範囲だった意識の志向が、スペイン、とくにバルセロナやレアル・マドリードのサッカーに向けられるようになっていく。メディアにもスペインのサッカーに日本を照らし合わせる傾向は見られる。760 号・787 号では香川真司のインタビューが掲載されているが、その題名はそれぞれ「香川真司はイニエスタになれるか」、「バルサに学ぶエースの輝かせ方」。さらに 2011 年の U-17W 杯でベスト 8 に進出した日本代表を「アジアのバルセロナ」と称し、何かと日本とスペインを比較する強い傾向が見られる。しかし、本田や遠藤の意識にも見られるように、スペインのサッカーをただ模倣するのではなく、実力差を認めながら日本らしいサッカーを築こうとしている。

2-2　向上心をあおる存在

本田圭佑、岡崎慎司、内田篤人、長友佑都ら「新・黄金世代」が続々と海外へ渡り成功を収めている背景には、こうした同世代での切磋琢磨、向上心の煽り合いがある。例えば、先ほど岡崎慎司のインタビューから日本がバルセロナ的なパスサッカーを志向し始めたことを見たが、それに関し本田圭佑らと以下のようなやりとりがあったことを話している。

岡崎慎司「お前、（相手の）裏は狙えるけど、他がなぁ、とかボロクソに言われました（笑）」
本田からはこんなことも言われた。
「お前も、もっとボールもらいにいけよ。そうすれば俺がボランチのつなぎのところに入らなく

ていい。お前が気を使ってそこに入ってくれれば、俺だってもっと点をとれるポジションにいけるのに」
　岡崎は苦笑いしながら語る。彼らの会話に余計な遠慮はない。互いにリスペクトしあっていることをわかっているからだ。
岡崎「俺のことを認めてくれているんだと思いましたね」

（ミムラユウスケ，2011，Vol. 775）

このインタビューから見られるように、選手同士の指摘に遠慮がない。ただ、こうしたやりとりを岡崎は好意的に捉えており、刺激としている。岡崎と本田は、南アフリカ W 杯で PK 戦でパラグアイに敗れた最後の夜に二人で夜遅くまで語り合った。

岡崎慎司「アイツは戦いを好む性格だし、何事に対しても熱くなる。そんな圭佑から『お前よくそんな静かな性格でここまでやってこれたな』と言われたんです。確かに僕と圭佑はまるで性格が違う。まあ、でも海外でやっている圭佑たちを見て、やっぱり自分もいつか海外でサッカーをやりたいなという気持ちを持つようにもなりました。同世代だからこそ、そういう思いになっていったのかもしれない」

（ミムラユウスケ，2011，Vol. 775）

ここで、Ⅲ期において本田が「人間性ひとつとっても足りない」と、民度の問題に言及していたことを思い出す。こうした本田の思いが、この時期になって同世代に浸透していることがわかる。世代のライバル心、向上心を煽る存在という役割を本田はじめ選手が意識して担っている。それは自分のレベルアップにつなげるという意図もあるのだろう、本田圭佑は北京世代の活躍について満足げに語っている。

本田圭佑「ハングリーな選手が多いし、次のステップに進んでいる感じがする。周りが進んでいるおかげで、俺自身も次に進まないといけなくなった。今度は僕が周りからテイクできればいい」

（二宮寿朗，2011，Vol. 775「私はこう考える『同世代を牽引した本田圭佑の野心と成功』」）

本田が岡崎などに見せるこうした挑発的態度は、プロとしてのリスペクトが根底にある。そしてその意図は、同世代のライバル心や向上心を煽り、野心を共有していくことにある。

南アフリカ W 杯以降の欧州所クラブ属状況をみていくと、この 1 年半で北京五輪登録メンバーでは 10 人（本田圭佑、森本貴幸、吉田麻也、長友佑都、内田篤人、細貝萌、香川真司、岡崎慎司、安田理大、李忠成）、本大会出場はならなかったものの予選で戦ったメンバーからも 3 人（伊野波雅彦、家長昭博、カレン・ロバート）と、実に北京世代の 13 人が海外に戦いの場を移している。

こうしたライバル意識（それは根底にプロとしてのリスペクトを有しているが）が非常に強く、北京世代ではそれが「欧州への大量輸出」という現在の日本サッカーの傾向に表れている。これは、第 1 章で示した仮説と異なる傾向、つまり強固な信頼関係がクラブ内ではなく世代の中で形成されていくという状況を示している。

小宮好之（2011）は、こうした欧州移籍の背景として J リーグの移籍ルールの変化も影響していると指摘する。従来、J リーグでは海外移籍にも国内の移籍ルールが適用されていた。例えばクラブとの契約満了後 30 カ月以内に次のチームとプロ契約をした場合、元所属クラブは移籍先に移籍金の支払い要求が可能で、「契約が満了したら選手は別クラブと契約できる（移籍金が発生しない）」という FIFA のルールは無視されてきた。原則、移籍違約金は設定されず「海外移籍は 3 億円」という相場が生まれ、スポンサー主導のいびつな移籍の形をつくっていた。その FIFA の移籍ルールが、2009 年にようやく J リーグでも適用され始めたことで、欧州クラブが積極的に J リーグ市場に参入し始めたのである。北京五輪世代の欧州進出は移籍金 0 のケースが少なくない。こうした北京五輪世代の選手の向上心と欧州クラブの需要の一致が、多くの海外組を生むことになったのである。

2-3　サッカーの力～3．11 の悲劇から～

Ⅲ期においては、地域のスポーツ文化を発展させるうえでサッカーのエンターテインメント性を追求する動きが現れるという現象が見られた。そうした動きが選手たちから生まれたという意味では高い自律性が見て取れた。

3 月 11 日に東日本大震災が発生し、大津波や原発事故が発生し日本は未曽有の国難に見舞われた。それから 18 日経った 3 月 29 日、「東北地方太平洋沖地震復興支援チャリティーマッチ　がんばろうニッポン！」と銘打たれた慈善試合が行われた。

選手たちには「サッカー界からメッセージを」という復興への強い思いがあった。決勝トーナメントが開催されていた UEFA チャンピオンズリーグでは、1 回戦の全試合で黙祷がささげられた。スペインのセビージャ FC は、3 月 20 日のリーガ・エスパニョーラで日本語のユニホームを選手が着用し、哀悼の意を表した［図 5-2］。世界各国でサッカーを通じて支援の輪が広がり、その力に日本人は驚きと感動を覚え、連日サッカーによる国内外の復興支援の様子が伝えられた。現在でも世界各国でチャリティマッチや募金活動が行われている。

東日本大震災後、鹿島アントラーズ所属で岩手県大船渡市出身の小笠原満男は、自身のサッカー観が大きく変化したことを『Number』で語っている。

> **小笠原満男「これまで、サッカーは自分のため、チームの勝利のため、サポーターのためにやってきた。でも今は、被災者の方をはじめ、いろんな人のためにサッカーをして、少しでも喜ばせてあげたい、試合に勝っていいニュースを届けたいと思うようになった。こんな気持ちになったのは初めてだし、今はそれがプレーするうえで大きなモチベーションになっている」**
>
> （佐藤俊，2011，Vol．778）

サッカーにも興味が薄いすべての人にサッカーを楽しんでほしいと思うようになったという。この点では、Ⅲ期における意識との類似が認められるが、純粋にサッカーをして勝利を目指すことで喜んでもらうという思いはⅢ期と異なる様相を示している。同様に、FC 東京所属（当時）の今野泰幸もサッカー観の変化を語っている。

> **今野泰幸「最初はサッカーなんかやっている場合なのかとも思いましたけど、プロの選手としてやれることをしていかなければと思うようになりました。世界のクラブから応援のメッセージが届けられたり、やっぱりサッカーの力というのは凄いんだなとも感じた。（出身の）宮城の人からは、今野さんがサッカーで頑張ってくれることで宮城も活気づくんだよ、と言われたことを自分のなかで強く受け止めています」**
>
> （二宮寿朗，2011，Vol．779「THE THOUGHT IS ONE！熱き“思い”が勇気を与える」）

今野はこの震災で、サッカーを続けることで所属する地域の人々だけではなく、生まれる故郷へももたらすエネルギー、活力の存在を知る。そしてサッカーが持つ純粋な力に改めて気付くようになる。長居で開催された復興支援チャリティーマッチのチケットは完売し、スタジアムは満員御礼となった。

一方で、小笠原はサッカーの質的な部分について言及している。

> **小笠原満男「でも、だからこそちゃんとサッカーをしないといけないんです。支援活動に比重を置きすぎて、プレーに支障を来たすようじゃ、歯を食いしばって頑張っている人たちに対して申し訳ない。試合で勝っていかないと、支援活動をしても『サッカー大丈夫かよ』と思われるし、そんな心配させたくないからね」**
>
> （佐藤俊，2011，Vol．778）

図 5-2　セビージャの黙祷

選手名を日本語で記したユニホームを着用し、震災の犠牲者へ哀悼の意を表した

ここから、サッカー選手としての本業としての仕事を果たすことが

本当の貢献だとする意識がある。Ⅲ期にみられた「エンターテインメント性の追求」とは、明確に区別されるような意識が存在している。海外に戦いの場を移した長友佑都も、自身をサッカー選手ではなく日本人代表としての意識を持つようになる。

――日本人サイドバックの評価、こっちでも上がるといいですね。
長友佑都「日本人の代表として、僕が引っ張っていく位の気持ちでやらないと、日本サッカー界も明るくなっていかない。そんな責任感を持ってやっていますね」

（豊福晋，2011，Vol. 775）

震災を通してスポーツの無力さを知り、一時は無力感が漂っていた日本サッカーだったが、世界のサッカーに勇気づけられ、日本人という民族の代表として世界を舞台に頑張る姿を見せることで、スポーツから日本を元気にしようとする姿勢を示している。こうしたサッカー観の変化は、選手に「サッカー文化に直接的に貢献する」という意識の質的な向上をもたらすきっかけとなった。

小笠原満男「芝のグラウンドを作ってあげたいんです。東北の冬は寒いし、グラウンドが使えなくなる。だから、屋根付きやヒーター付きの芝のグラウンドを作って、東北出身の J リーグの選手がどんどん出るような環境を作りたい」

（佐藤俊，2011，Vol. 778）

Ⅲ期におけるエンターテインメント性の追求と比較すると「サッカーを見る人に限らず不特定多数の人を喜ばせる」という意識では共通しているが、そのために何をするかという面でⅢ期と大きく異なっている。グラウンドをつくるというサッカーの文化への直接的な貢献への姿勢は新しい。現に 2011 年 8 月、石川県金沢市に、ここを第二の故郷とする本田圭佑（同市の星陵高校で選手権 4 強を果たす）の名があしらわれた子供向けサッカー場「本田圭佑クライフコート」が完成した。これは本田圭佑の直接的な寄付による建築ではないものの、ヨハン・クライフ財団が本田圭佑のオランダでの実績を高く評価して寄付されたものである。今後は自治体先導の公共施設建築ではなく、サッカー選手が直接関係するサッカー場の提供・寄付が増えることが予想される。

2-4　サッカー漬けの毎日

序章でふれた 2011 年 1 月の松田直樹の JFL 挑戦は驚きを持って報道された。日本代表として W 杯出場を果たした輝かしい成績を持ちながら、サッカー不毛の地・長野の社会人クラブ（当時）を選んだ理由は、純粋にサッカーをしたい、自分が経験したサッカーの全てを伝えたいという思い、それを全力で受けとめようとした松本山雅の姿勢への共鳴だった。2011 年 12 月、その松本山雅は念願の J2 昇格を果たす。志半ばで急逝した松田の遺志を受け継ぎ、チームは今季から J2 に戦いの場を移すことになる。

W 杯でベスト 16 入りを果たし、アジアカップでも王座に返り咲いた。そして女子サッカーでは「なでしこジャパン」こと女子日本代表が 2011 ドイツ女子 W 杯で優勝。こうしたことから、「なでしこに続け」と言わんばかりに、男子の日本サッカーも現在「W 杯優勝」を目標と公言する選手が増え、アジア各国からの注目度、警戒度も一層増しているのである。

例えば内田篤人は、南アフリカ W 杯後、ドイツの名門シャルケへ加入したが、「俺はサボっちゃうタイプの人間だから、そういう厳しい環境へ行った方がいいと思った」と移籍の理由を話す。しかし、現在は立派なシャルカー（シャルケ所属選手の通称）としてサッカーを楽しんでいる。

内田篤人「言葉はわからないことのほうが多いけど、不自由さを感じることはない。ドイツでの生活は本当に楽。サッカーしかないからかな。厳しさも含めて、今サッカーが楽しいし、サッカーをより好きになったのかも」

（寺野典子，2011，Vol. 775）

具体的にどういった点でドイツと日本は異なるのか、その点については言及されていない。ただ、内

田がサッカー漬けの毎日に楽しみを見出していることは事実である。換言すれば、日本がそうしたサッカー漬けの毎日を送るのに何かが不足していると彼は感じている。

宇佐美貴史は、10 代でドイツの名門バイエルン・ミュンヘンへ移籍した。彼は幼いころから数々の「伝説」をつくりあげた。例として「宇佐美 1 対仲間 8 での勝負に負けたことがなかった」「少年サッカーチームの記録者が、宇佐美が 4 年生～6 年生のときに試合で挙げた得点を集計したら 600 点だった」など挙げるときりがなく、ガンバ大阪ユース時代では「最高傑作」とまで言われた。ガンバのトップチームに昇格してからも、高い潜在能力を見せつけていた。

図 5-3 『心を整える。』(長谷部誠，2011)に対する世間の評価

2012 年 1 月 31 日現在、インターネットショッピングサイト「Amazon」における『心を整える。』のカスタマーレビューは 174 件、その平均は 5 点満点中 4．54 と非常に高い

> **プロ以前の宇佐美伝説は、100 万部売れた小説のように傑作だった。だが、プロになってからは「まだ、引き出しがないし、面白い話がない」と、苦笑いする。**
> **宇佐美貴史「まぁ新しい伝説どうこうよりも、これからもサッカーのことだけ、しっかり考えていきます。サッカー取ったら俺、何も残らん。クズ以下の人間っすから」**
>
> （佐藤　俊，2011，Vol．769）

宇佐美も内田と同様に「サッカーのことだけ頭においておきたい」と思っている。しかし宇佐美の場合はそうした意識が強く、以下の安田の発言から他の部分をおろそかにしてしまっていることがわかる。宇佐美自身も、サッカーを取った自分を「クズ以下」と自覚している。

> **安田理大「貴史ねぇ……。俺は、今まであんな根性腐った、だらしのないヤツは見たことない。敬語は使わんし、スーツも腰パンやし、ネクタイもダラーッとしてる。練習終わってシャワーも浴びへんし、人のことボロカス言うからね。（高木）和道さんに普通に『死ねばいいのに』って言うてるし（笑）。でも、プレーは天才的やね。正直、あんなうまいヤツ、世界を見てもそうはおらんと思う」**
>
> （佐藤　俊，2011，Vol．769）

安田の発言を見ると、宇佐美や内田のような意識は特殊なものであり、サッカー選手は身だしなみや上下関係、礼儀などについて気を使っていることがわかる。こうした傾向は、Ⅳ期において長谷部誠や長友佑都・川島永嗣といった現在の日本サッカーを支える選手の著書が「自己啓発」をテーマとしており、高い売上部数を記録している（本章第 1 節で先述）ことからもうかがうことができる。

Ⅳ期においてはサッカー選手が高い誇りや責任を自覚している時期であるといえる。サッカー選手としての自己研鑽や準備が世間で評価され［図 5-3］、サッカー選手は日本社会において高い地位を確立していくのである。

3　プロフェッショナリズムの今後の変化について

ここまでの検証から、今後（目安としては 2014 ブラジル W 杯頃まで）どのようにプロフェッショナリズムの大きな変質が起こると予想することができる次元を挙げる。

技能分析の側面では、選手たちは「W 杯優勝」という実力とは離れた目標を思い描きながら、それは南アフリカ W 杯で似た様なスタイルをもったスペインが優勝したことでわずかでも実現の可能性を見いだしている。その上、彼らはそうしたスペインのパスサッカーを模倣するのではなく、日本人的な要素

A 規準(44 項目)	B 規準(3 項目)	C 規準(9 項目)
ライセンス交付のために無条件に必須とされる基準	達成しなかった場合に処分が科せられた上でライセンスが交付される基準	必須ではないが推奨される基準
➢ 競技場の入場可能人員がリーグの規定(J1 は 15, 000 人、J2 は 10, 000 人)を上回っていること ➢ 3 期連続の当期純損失(赤字)を計上していないこと(2012 -2014 の 3 年間以降で算定) ➢ 債務超過でないこと(2014 年度から算定) 他	➢ 競技場の屋根が観客席の 3 分の 1 以上覆っていること 他	➢ 女子チームを保有していること 他

表 5-4 J リーグクラブライセンスの概要

2012 年 1 月 17 日発表時点

を取り入れて独自のスタイルに発展させるという長期的な視野を持ち、そのための一歩一歩を着実に歩もうとしている。そういった意味では意識が高い。以降は、今後小さい挑戦目標が技術の向上と共に少しずつ上昇していく（現状に応じて目標を少しずつ変化させようとする）ことが考えられる。

「W 杯優勝」という高い目標の維持は、2011 年にドイツ女子 W 杯で日本が優勝したことでさらに強固なものになることが予想される。圧倒的な体格差などを跳ね返しパスサッカーで試合の主導権を握った「なでしこジャパン」は、世界各国から「女子版バルセロナ」と絶賛された。こうした女子サッカーの躍進が男子のサッカーにも大きく影響する可能性を否定することはできない。

キャリア形成の次元に関しても、ここまで見てきたように海外志向が強まるものと考えられる。

サポーターとの関係であるが、2013 シーズンからの J リーグクラブライセンスの導入が強く影響していくと考えられる。2012 年 1 月 17 日に発表された J リーグクラブライセンスの概要では、56 の審査項目が 3 つの基準に区分されている［図 5-4］。A 基準を満たさない場合はライセンスが交付されず、JFL もしくは地域リーグへの降格となる。また B 基準を満たさない場合、「戒告」「無観客試合」などの制裁が科せられるとしている。

負債を数年間抱えたクラブは例え J1 で優勝したとしてもライセンスはく奪、すなわち J リーグからの追放という措置が下される。これにより、今後は選手はじめ自治体、サポーター、クラブやスポンサーとのつながりが一層強まるものと考えられる。そのため、移籍金が生じない移籍が当たり前となっている現在、海外移籍への動きは弱まるものと考えることができる。一方、2011 年シーズンオフにはオズワルド・オリヴェイラ（鹿島アントラーズ）、西野朗（ガンバ大阪）、レヴィー・クルピ（セレッソ大阪）、ミハイロ・ペトロヴィッチ（サンフレッチェ広島）といった、クラブで長期にわたって実績を積んだ監督の退任が相次いでおり、クラブライセンス制度を見据えた人件費削減の一環ではないかとの報道が見られている。こうしたクラブ側の動きがサポーターとの関係にどのような影響をもたらすか注意して分析する必要がある。

地域文化への貢献に関する意識には、やはり東日本大震災という因子が大きく影響している。震災後の復興支援の象徴としてサッカー界が活動を続けているが、そうした活動は選手に高い意識を生み出している。「W 杯優勝」という目標と実力との乖離は、サッカー選手の意識としては適合状態つまり「幸福」ではない。しかし文化人としての誇りや責任感をサッカー選手が抱いており、ここに震災の経験という特殊な事象が強く影響している可能性を否定することはできない。日本に震災の爪痕が残る限り、人々の余暇を純粋に「楽しませる」「熱狂させる」ための意識は高く維持されるものと考えられる。

第 6 章　総括

最後に本章において、第 2 章から第 5 章までの分析の結果を次元ごとにまとめる。

結論としては、日本のプロサッカー界においてプロフェッショナリズムの変質をスポーツ社会学的理論で説明することは可能である。一方で、時期におけるイレギュラーな社会的背景がプロフェッショナリズムに影響しやすい。単に日本プロサッカー界の位置付けの変化に基づいた仮説通りに変化すると断言することはどの次元でも不可能である。その詳細を以下に説明する。

①見るスポーツを提供するに値する知識や技術を持ち、分析ができるについて、フロー理論を応用した仮説のように選手から「幸福」に向かうように挑戦目標を実力に準拠させる動きが見られる。しかしイレギュラーな社会的背景の存在により、必ずしも「適合状態」つまり「幸福」の状態は見られない。その変遷を示したのが［**表 6-1**］である。

Ⅰ期では、いわゆる「冬の時代」においてすでに世界のサッカーを伝える番組の放送が身近にあったことなど TV メディアの影響を指摘した。世界への憧れを抱かせ、能力と挑戦目標との乖離を生み出した。これは旧態依然の指導者・ベテランとの確執にもあらわれている。Ⅱ期・Ⅲ期では日本代表が世界と対峙する機会も増え、それにより分析能力も向上していった。Ⅳ期では南アフリカ W 杯を制覇したスペインサッカーへの志向が強く表れているが、「なでしこジャパン」の女子 W 杯優勝がこうした高い目標設定に影響している。一方でスペインの良さを取り込みながら日本サッカーを少しずつ成熟させるという考えも見られ、ここに明確な目標の二分化を伺うことができる。

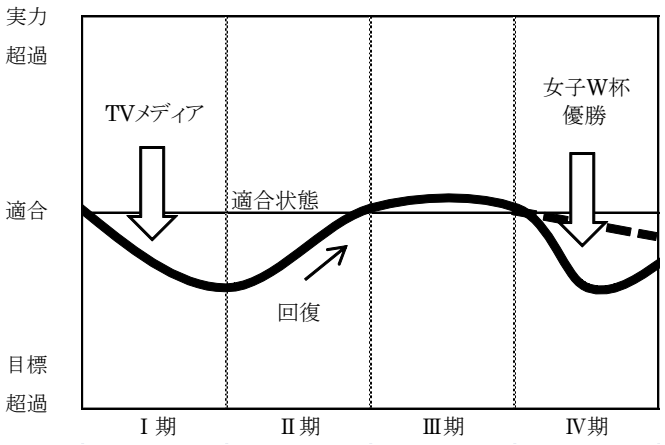

表 6-1　能力分析と挑戦目標の適合性の変遷

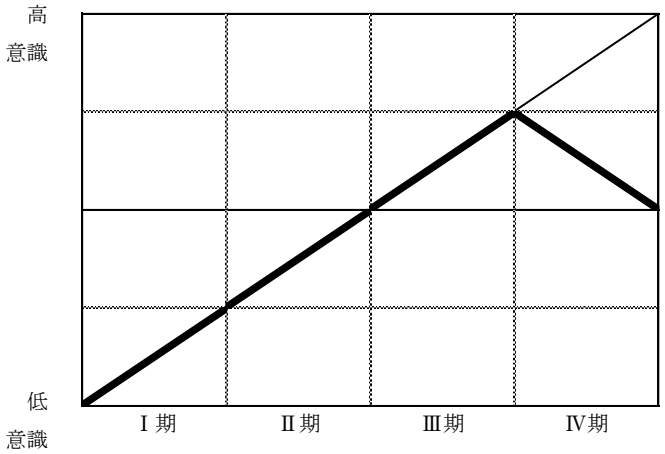

表 6-2　信頼関係に関するプロフェッショナリズムの変遷

細線が仮説。太線が検証結果

②クラブに所属しており、互いにプロとしての信頼関係を結んでいるという次元について、形式社会学の理論を応用した仮説と比較して、Ⅲ期まではほぼ仮説通りといって良い。問題はⅣ期の特殊性、つまり日本人が「カリスマ性」を有するようになったときのモデルを再考すべきということである。Ⅳ期ではクラブ内というより「世代」、とくに北京五輪世代での結びつきが強いということである。こうした背景に仮説通り「本田圭佑の特殊性」を指摘することが可能だが、日本人が「カリスマ性」を有した場合でもⅠ期のようなモデルを当てはめる方が妥当ではないかと考えることもできる［**表 6-2**］。

③キャリア設計において自律的な考えを持っているという次元については、J リーグクラブがリーグの国際的規模の拡大によってビジョンの独自性を増していき、それにより選手のキャリア形成に関する自律性は高まっていったという意味で形式社会学を応

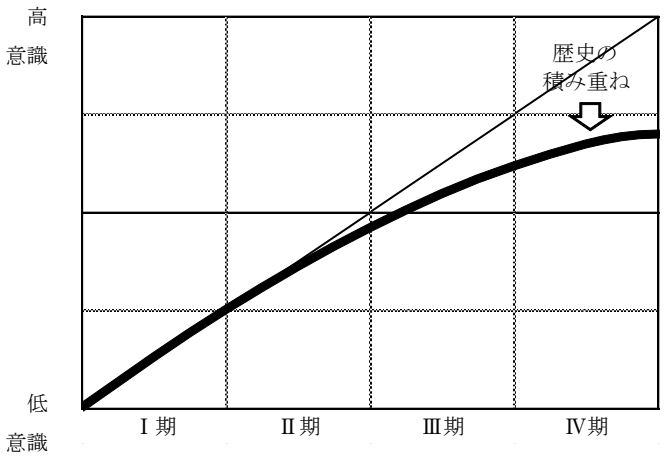

表 6-3 サポーターへの親近感の推移

細線が仮説。太線が検証結果

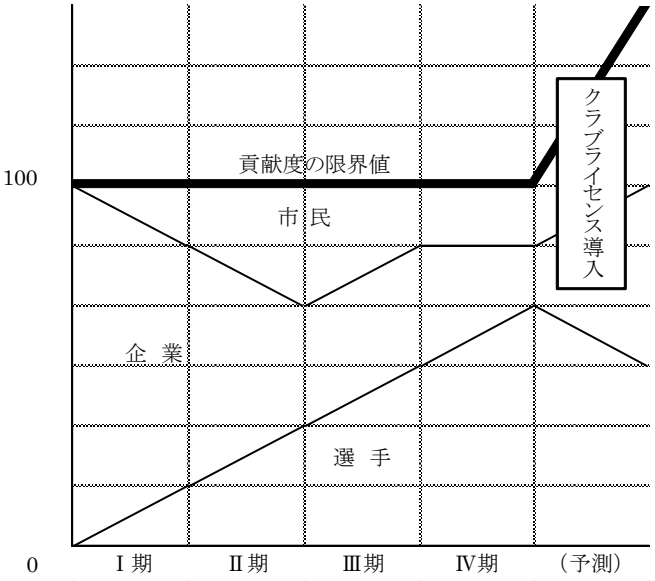

表 6-4 文化への貢献に関する役割分担の割合

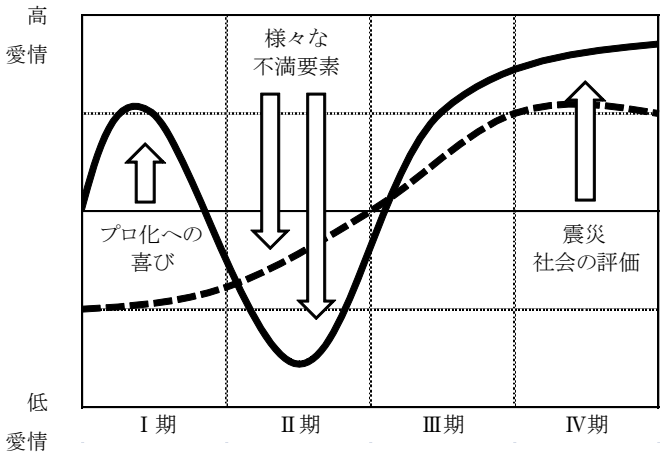

表 6-5 サッカーへの愛情の推移

点線は①の次元の変化を見たときの推移の予測値。実線が検証結果

用した仮説は立証された。

④クラブを応援するサポーターの喜びの為に試合に臨むという次元については、確かに物理的距離が社会的距離に転換され、サポーターへの親近感を高めているというような意識の変化を読み取ることができる。しかし、サポーターの意識とのギャップへの苦悩をⅢ期以降で指摘することができ、そうしたギャップの背景を、浦和と清水を例にして「歴史の積み重ね」によるサポーターの意識の深化に求めた［表 6-3］。

⑤地域のスポーツ文化の振興に貢献することを重視しているという次元については、地域貢献の役割を担う因子としてⅡ期以降「市民」を指摘することもできるが、交換理論のように外部の貢献度によって選手の貢献への意欲も変化していくことを見ることができた。今後は東日本大震災を機に高まる文化人としての意識が維持・発展し、また「Jリーグクラブライセンス」の導入により、貢献度の限界値は高くなり市民と企業などの役割も増すと予想することができる。［表 6-4］。

⑥何より純粋にサッカーをプレーすることを愛し、サッカーを通してサッカーを含むスポーツの素晴らしさを伝えようとする姿勢を持っているという次元に関する変化を［表 6-5］に示した。Ⅰ期においてはJリーグ開幕への喜びがフローからの乖離に関わらずサッカーへの高い愛情を生んでいるが、Ⅱ期では様々な要因からくるサッカーへの辛さが選手の思いにあり、急激な下降をたどっている。Ⅲ期では実力と挑戦目標の高い適合性がプロとしての喜びに結びついていることが示された。Ⅳ期では、サッカー選手が人間性への高い評価を社会から受けるようになったことへの喜びから、高い誇りや愛情をうかがわせる発言も見られた。

以上のように、プロサッカー界の外部の変化を敏感に感じ取りながら、日本のプロサッカー選手の意識は変化を遂げている。そうしたイレギュラーな社会的背景を考えなければ、日本プロサッカー界の変質とプロフェッショナリズムの変化の間には、スポーツ社会学的な理論を基に関係性を論ずることは不可能ではないのである。

参考文献

書籍

Blau, Peter M. 1964 *Exchange and Power in Social Life*, New Jersey: John Wiley & Sons.

Csikszentmihalyi, Mihaly 1990 *Flow: The Psychology of Optimal Experience*, New York: Harper and Row. ＝1996　今村浩明訳『フロー体験――喜びの現象学』世界思想社.

Dunning, Eric and Sheard, Kenneth 1979 *Barbarians, Gentlemen and Players*, London: Routeledge. =1979　大西鉄之祐・大沼賢治訳『ラグビーとイギリス人』ベースボール・マガジン社.

Goffman, Erving 1967 *International Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour*, New York: Anchor Books, Doubleday and Company. ＝2002　浅野敏夫『儀礼としての相互行為＜新訳版＞』法政大学出版局.

Homans, George C. 1974 *Social Bihavior: Its Elementary Forms*, California: Harcourt Brace Jovanovich.

Miner, John B. 1993 *Role Motivation Theories: People and Organizations*, London: Routeledge.

Moffett, Sebastian 2002 *Japanese Rules: Japan and the Beautiful Game*, London: Yellow Jersey. ＝2004　玉木正之訳『日本式サッカー革命――決断しない国の過去・現在・未来――』集英社インターナショナル.

Simmel, Georg 1908 *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Berlin: Duncker & Humblot. =1994　居安正訳『社会学（上・下)』白水社.

Wahl, A. 1989 *La Balle au Pied Histoire du Football*, Paris: Gallimard. =2002　遠藤ゆかり訳『「知の再発見」双書 101　サッカーの歴史』創元社.

Wallace, Rutha A. and Wolf, Allison 1980 *Contenporary Sociological Theory: 1st Edition*, New Jersey: Prentice-Hall. ＝1985　濱屋正男・寺田篤弘・藤原孝・八幡康貞訳『現代社会学理論』新泉社.

井上俊・亀山佳明　1999　『スポーツ文化を学ぶ人のために』世界思想社.

宇都宮徹壱　2008　『股旅フットボール』東方出版.

木村元彦　2005　『オシムの言葉――フィールドの向こうに人生が見える』集英社.

後藤健生　2002　『世界サッカー紀行 2002』文藝春秋.

――――　2007　『日本サッカー史――日本代表の 90 年』双葉社.

佐山一郎　1998　「日本のサッカー――社会の限界と可能性を映す苦い鏡面――」日本スポーツ社会学会編『変容する現代社会とスポーツ』世界思想社.

佐野毅彦・町田光　2006　『J リーグの挑戦と NFL の軌跡』ベースボール・マガジン社

高橋義雄　1994　『サッカーの社会学』NHK 出版.

長友佑都　2011　『日本男児』ポプラ社.

長谷部誠　2011　『心を整える。――勝利をたぐり寄せるための 56 の習慣』幻冬舎.

広瀬一郎　2004　『「J リーグ」のマネジメント　「百年構想」の「制度設計」はいかにして創造されたか』東洋経済新報社.

松尾　睦　2006　『経験からの学習――プロフェッショナルへの成長プロセス』同文舘出版.

宮田義行　1997　「見る側の視点からスポーツの感動を描く唯一無二の専門誌」『雑誌狂時代！驚きと爆笑と性欲にまみれた「雑誌」というワンダーランド大研究！』宝島社，250-255 頁.

森田浩之　2009　『メディアスポーツ解体　＜見えない権力＞をあぶり出す』NHK 出版.

山本　浩　1998　『フットボールの文化史』筑摩書房.

――――　2004　「イギリスのサッカー・ラグビーとフーリガニズム」鈴木守・戸狩晴彦編著『サッカ

一文化の構図』道和書院，22-37 頁.
J リーグ法務委員会編　1993　「J リーグプロ制度構築への軌跡」自由国民社.

学術論文・調査報告書等

鎌田道彦　2006　「プロサッカー選手の人生の転換期に関する一考察：ZINEDINE ZIDANE と中田英寿の引退について考える」『仁愛大学研究紀要』Vol. 5，33-42 頁.
Hall, Richard H. 1968 *Professionalization and Bureaucratisation,* American Sociological Reviews, Vol. 33, pp. 92-104.
鹿野俊之・井上博夫　「浦和レッズがもたらす経済波及効果は年間 127 億円」財団法人りそな産業協力財団『News Release』No. 44A-93，2007. 11. 22.

Web サイト他

伊藤良二『プロフェッショナリズム再考』
慶應義塾大学 SFC 研究所，2010，最終閲覧日 2011. 11. 08.
http://www.crl.sfc.keio.ac.jp/itoh201011.pdf
森洋一郎・大塚貴司『企画・連載（51）浦和レッズ 14 年目の頂点』
YOMIURI ONLINE，2006，最終閲覧日 2011. 11. 20.
http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/saitama/kikaku/051/
富士山マガジンサービス『インタビュー ニッポンの編集長　第 4 回』
雑誌の Fujisan. co. jp，2009，最終閲覧日 2012. 01. 25.
http://www.fujisan.co.jp/interview/number/

分析資料一覧

注 1)　資料は全て雑誌『Sports Graphic Number』（文藝春秋社）である。
注 2)　「Vol. □」＝通算の号数（臨時増刊号を数えない）。
注 3)　「第○巻第△号」＝「第 1 号を発行した 1980 年を 1 年目としたとき、本号は○年目のうちの△番目の発行である」という意味。
注 4)　Vol. 550・551・552 は合併号だが、引用時には「Vol. 550」と記した。

第 2 章　J リーグ・スタートダッシュの成功と課題

Vol. 320, 第 14 巻第 16 号, 1993. 08. 05
　李　春成「混沌、そして沈黙。カズとヴェルディの 60 日」40-44 頁
　小松成美「北沢豪『ワイルドでいこう』」54-59 頁
　鈴木洋史「レッズに火をつけて。――磨かれざる赤いダイヤモンドが輝く日」70-75 頁
Vol. 327, 第 14 巻第 24 号, 1993. 11. 20
　小松成美「中山雅史、“ゴン・ゴール”これが僕の仕事」62-63 頁
　――――「カズが切り開く、W 杯への道」68-69 頁
Vol. 332, 第 15 巻第 03 号, 1994. 02. 03
　平野　史「大野俊三 vs. 黒崎比差支『アントラーズサッカーの真髄』」48-52 頁
　小松成美「三浦知良、日本サッカーの未来へ」64-71 頁
Vol. 334, 第 15 巻第 06 号, 1994. 03. 03
　小松成美「中山雅史『静かなる出撃』」28-33 頁
　一志治夫「磯貝洋光『野獣の領分』」53-61 頁
Vol. 373, 第 16 巻第 18 号, 1995. 08. 31
　李　春成「俺たちのここを見てくれ」54-58 頁
Vol. 394, 第 17 巻第 13 号, 1996. 06. 20
　佐山一郎・後藤健生・平野史「消えた『6. 1』 2002 年 W 杯日韓共同開催の意味」18-29 頁
　佐藤　俊「前園真聖、オリンピックを越えて」30-35 頁
Vol. 400, 第 17 巻第 19 号, 1996. 09. 12
　佐藤　俊「前園真聖『少なくとも俺はキレたね』」52-55 頁
Vol. 406, 第 17 巻第 25 号, 1996. 12. 05
　佐山一郎「2002 年 W 杯でまたも後れをとった日本サッカー協会」13-16 頁
　杉山茂樹「井原正巳『進化の証明』」36-41 頁
　佐藤　俊「前園真聖の 1996」64-67 頁
　山崎浩子「岡野雅行」82-85 頁
Vol. 420, 第 18 巻第 13 号, 1997. 06. 19
　金子達仁「J リーグの○と×」54-57 頁
　――――「アトランタ五輪代表『岐路』」38-44 頁
Vol. 425, 第 18 巻第 18 号, 1997. 08. 28
　金子達仁「前園真聖『獣の瞳をもう一度』」36-41 頁
Vol. 440, 第 19 巻第 06 号, 1998. 03. 26
　佐藤　俊「前園真聖×中田英寿『オレたちに任せろ！』」28-46 頁

第３章　街とクラブとフットボール

Vol. 467, 第 19 巻第 06 号, 1999. 03. 25
小齋秀樹「U-20、アントラーズ組『明日を信じて』」
戸塚　啓「川口能活＆三浦淳宏『それぞれの決意』」46-51 頁
佐藤　俊「名波浩『少しずつハードルを越えて』」52-57 頁
Vol. 492, 第 20 巻第 06 号, 2000. 03. 23
佐藤　俊「小野伸二『試練』」26-31 頁
Vol. 504, 第 20 巻第 16 号, 2000. 08. 24
小崎貴紀「柳沢敦『4 年目の笑顔』」30-36 頁
Vol. 518, 第 22 巻第 06 号, 2001. 03. 22
佐藤　俊「小野伸二の決意『白紙の履歴書』」32-37 頁
Vol. 529, 第 22 巻第 18 号, 2001. 08. 23
増島みどり「中山雅史『J リーグにはナカヤマがいる』」22-27 頁
Vol. 550・551・552, 第 23 巻第 12 号, 2002. 05. 23
佐藤　俊「小野伸二　本当の自分に帰る場所」30-36 頁
矢内由美子「柳沢敦　変わらないもの」37-42 頁
Vol. 564, 第 23 巻第 25 号, 2002. 12. 19
乙武洋匡「秋田豊『いつもギラギラしてた』」60-67 頁
一志治夫「三浦知良『時代』」74-79 頁
Vol. 572, 第 24 巻第 08 号, 2003. 04. 03
三浦知良「ヴィッセル神戸 三浦知良　18 年目の誓い」58-59 頁
小齋秀樹「坪井慶介はフィールドの支配者である」60-65 頁
熊崎　敬「松井大輔はシュンスケを超えていく」80-85 頁
――――「黒部光昭が語る京都サンガ躍進の秘密」86-89 頁
藤田俊哉「藤田俊哉はとまらない」116-117 頁
Vol. 579, 第 24 巻第 15 号, 2003. 07. 10
佐藤　俊「中村俊輔『進化する攻撃本能』」30-31 頁
――――「遠藤保仁『新しいダイナモの誕生』」50-56 頁
Vol. 618, 第 26 巻第 01 号, 2005. 01. 13
西部謙司「中田英寿『先駆者の初心』」18-25 頁
戸塚　啓「川ロ能活 楢崎正剛『ライバルとして、友として』」24-31 頁

第４章　日本サッカーは死んだのか

Vol. 664, 第 27 巻第 19 号, 2006. 11. 03
寺野典子「中田浩二『チームの要となるとき』」
Vol. 667, 第 27 巻第 22 号, 2006. 12. 24
近藤　篤「鈴木啓太『レッズが僕を強くした』」
小齋秀樹「田中マルクス闘莉王『サムライの存在意義』」
佐藤　俊「播戸竜二『やっぱり俺にはガンバやねん』」
浅田真樹「中村憲剛『規格外の成長曲線』」
熊崎　敬「清水エスパルス『長谷川健太が背負うもの』」
Vol. 671, 第 28 巻第 03 号, 2007. 02. 15
佐藤　俊「阿部勇樹『決断の重み』」
熊崎　敬「森本貴幸は野生児になる」
Vol. 686, 第 28 巻第 18 巻, 2007. 09. 13
吉崎エイジーニョ「播戸竜二『アジアから、また始めたい』」

熊崎　敬「森島康仁『悩めるデカモリシ』」
金子達仁「カナダに見た夢」
Vol. 702，第 29 巻第 09 巻，2008．05．08
木崎伸也「長谷部誠『金や安定よりも大事なものがある』」
Vol. 704，第 29 巻第 11 号，2008．06．06
城島　充「山瀬功治『ブラジルに渡った頃のように』」
Vol. 732，第 30 巻第 14 号，2009．07．16
金子達仁「本田圭佑『剥き出しのオーラ』」
寺野典子「打開せよ、松井大輔」
佐藤　岳「中澤佑二 黙示録『トップレベル』」

第 5 章　新・黄金世代の挑戦

Vol. 760，第 31 巻第 15 号，2010．09．02
木崎伸也「本田圭佑『革命児の美学』」18-25 頁
ミムラユウスケ「香川真司はイニエスタになれるか」38-41 頁
Vol. 769，第 32 巻第 01 号，2011．01．13
木崎伸也「本田圭佑『あのゴールは想定内だった』」24-31 頁
佐藤　俊「宇佐美貴史『伝説を紡ぐ不敵な怪童』」74-77 頁
Vol. 775，第 32 巻第 07 号，2011．04．07
Ivica Osim「今こそ，強く連帯を」18-25 頁
豊福　晋「長友は世界一のサイドバックになれるのか？」33-35 頁
ミムラユウスケ「岡崎慎司『ダイビングヘッド封印宣言。ドイツで心掛ける 2 つのこと』」36-39 頁
寺野典子「内田篤人『サボっちゃうタイプだから敢えて厳しい環境を選んだ』」40-44 頁
小宮良之「家長昭博＆本田圭佑『同じ日に生まれたふたりの天才』」50-55 頁
戸塚　啓「私はこう考える『評価を一変させた“南アフリカ W 杯 16 強入り”』」48 頁
二宮寿朗「私はこう考える『同世代を牽引した本田圭佑の野心と成功』」49 頁
小宮良之「私はこう考える『「挫折への免疫」が限界をつくらない』」64 頁
Vol，778，第 32 巻第 10 号，2011．05．26
佐藤　俊「小笠原満男『3．11 でサッカー観が変わった』」68-71 頁
Vol. 779，第 23 巻第 11 号，2011．06．09
二宮寿朗「THE THOUGHT IS ONE！熱き“思い”が勇気を与える」72-72 頁
Vol. 785，第 32 巻第 17 号，2011．09．01
二宮寿朗「遠藤保仁『マラカナンでブラジル人を魅了したい』」38-43 頁
豊福　晋「香川真司『バルサに学ぶエースの輝かせ方』」44-49 頁
Vol. 783，第 32 巻第 15 号，2011．08．04
木崎伸也「本田圭佑『俺の辞書に“安定”の文字はない』」18-25 頁
城福　浩「宇佐美貴史＆岡崎慎司＆中村憲剛『エリート育成システムの行方』」34-35 頁

おわりに

私が物心ついた頃に J リーグが開幕し、兄も私もサッカーに興じていた家族内では「ヴェルディ川崎派」と「鹿島アントラーズ派」に分かれていたことを思い出した。その後、ブーム真っただ中の国立競技場で浦和レッズ対鹿島アントラーズ戦を観戦し、鹿島を応援しに来たはずの私は浦和レッズのサポーターの熱い応援に惹かれ、以降はずっと地元埼玉の浦和レッズサポーターである。

宇都宮大学に入学して 1 年が経った頃、2009 年には栃木にプロサッカーチームが誕生した。栃木 SC のホームスタジアム「栃木グリーンスタジアム」はサッカー専用グラウンドだ。かつて「日本一地味な県」とまで蔑まれた栃木は、栃木 SC、そして栃木日光アイスバックスやリンク栃木ブレックスが活躍し、スポーツ立県としての地位を築きつつある。そして来年度から千葉県で教師としての人生を歩むことになる。千葉には J2 のジェフユナイテッド市原・千葉、そして去年の J リーグ覇者でありクラブ W 杯 4 位の柏レイソルがある。この 2 クラブはレッズと同じくサッカー専用スタジアムを有している。日立柏にも蘇我球技場にも行ってみたい。行ったら行ったで、サポーターに混じって応援したいという気もある。いや、スタジアムに足を通わせるうちに、おそらくそのまま柏か市原のサポーターになってしまうだろう。これまで私が育った場所、そしてこれから私が赴く場所は、幸運にもサッカーがより好きになれる環境に恵まれている場所ばかりだった。こんなサッカー場で、大観衆の中でプレーできる選手はどんなに幸せだろうと思う。

研究のなかで、いつしか選手はプロとして仕事するのに慣れ、子どもたちの憧れであり、地域の誇りであるというサッカー選手の魅力を忘れて行っているのではないか、と考えるようになった。確かに、世界に羽ばたきたいという強い意識は持ってしかりだ。ただ、遠い目標ばかり見つめて目の前の現実を軽視する選手が多いようでは、地域からサポーターも離れていき、子どもたちもサッカーへの魅力や選手への憧れを抱かなくなってしまう。

J リーグは開幕においてサッカー場の建設や指導者養成などの面で後れをとってしまったのかもしれない。ただ、当時の J リーグにはスタジアムで観たくなる理由があった。闘志あふれるジーコのプレー。ゴールを決めたビスマルクが、眉間を指でつまみピッチに跪くポーズ。カズダンス。ラモスのループを真似る子どもたちがあらわれ、サッカーをしない子も「シジマールごっこ」に興じるようになった。アルシンドカットにしたいという子どもが増えてちょっとした問題となり、「アルシンドになっちゃうよ～！」という自虐的な言葉が流行した。選手たちはプロサッカー選手であることに誇りを感じ、与えられた環境でファンに精一杯のプレーを見せた。外国人選手は独特のパフォーマンスを披露しながら、決して日本のサッカーを下に見ようとせず、現在まで続く J リーグの土台を見事に構築した。

環境が整備され、欧州のプロサッカーリーグらしい雰囲気が各地で完成しつつある中でのプレーは快感だろう。だが、今日に至るまでの歴史を、サッカー選手はもう一度見つめ直すべきだ。それは J リーグの歴史だけではない。J リーグ開幕を待たずして JSL でキャリアを終えた冬の世代の選手たちの歴史にもだ。2011 ドイツ女子 W 杯決勝の数時間前、佐々木則夫監督は日本女子サッカー30 年の歴史をまとめたビデオを選手たちに見せた。坂口夢穂は強いモチベーションが生まれたのを感じたという。それがアメリカ戦で 2 度の同点ゴールを生み、そして PK での逆転勝利に結びついたのだろう。「なでしこリーグ」はかつてない人気を勝ち取り、今まさに日本女子サッカー栄光の時代が訪れている。

2014 ブラジル W 杯、でなくとも 2018 ロシア W 杯での優勝を目指すなら、まだ欧州のそれと比べれば浅いものの、これまで J リーグを支えた人たちが紡いだ歴史に感謝を忘れず、高いプライドと誇りを持ってサッカー選手というプロフェッショナルに打ち込んでほしい。そして、欧州や南米のサッカーがモンスタービジネスとなった現在、「サッカーが好きだ」という強い意志で沢山の人々を喜ばせてあげてほしい。2011 年 3 月 29 日、長居スタジアムで日本サッカーはその大切さを思い知ったはずである。

2012 年 2 月　渡辺和磨